



TITLE:

センター研究年報 2017

AUTHOR(S):

CITATION:

センター研究年報 2017. センター研究年報 2018, 2017: 1-84

ISSUE DATE:

2018-02-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/235482>

RIGHT:

センター研究年報2017



京都大学人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センター

特集 京都大学人文科学研究所蔵 龍門二十品拓本

目 次

例 言	1
龍門二十品 拓本・釈文・校勘・訓読・解説（岡村秀典・稲本泰生）	
1. 長樂王丘穆陵亮夫人尉遲造像記 北魏 太和十九年（495）	2
2. 一弗造像記 北魏 太和二十年（496）	5
3. 比丘慧成造像記 北魏 太和二十二年（498）	7
4. 侍中護軍將軍北海王元詳造像記 北魏 太和二十二年（498）	11
5. 都綰闕口遊徼校尉司馬解伯達造像記 北魏	14
6. 鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等造像記 北魏	16
7. 北海王國太妃高造像記 北魏	19
8. 仇池楊大眼造像記 北魏	21
9. 比丘道匠造像記 北魏	25
10. 前南陽太守護軍長史雲陽伯鄭長猷造像記 北魏 景明二年（501）	28
11. 孫秋生劉起祖二百人等造像記 北魏 景明三年（502）	31
12. 高樹解伯都三十二人等造像記 北魏 景明三年（502）	36
13. 比丘惠感造像記 北魏 景明三年（502）	39
14. 広川王祖母太妃侯造像記 北魏 景明三年（502）	42
15. 広川王祖母太妃侯造像記 北魏 景明四年（503）	
（附）平乾虎造像記 北魏	45
16. 比丘法生造像記 北魏 景明四年（503）	49
17. 太中大夫安定王元燮造像記 北魏 正始四年（507）	53
18. 齊郡王元祐造像記 北魏 熙平二年（517）	56
19. 比丘尼慈香慧政造窟記 北魏 神龜三年（520）	60
20. 馬振拌張子成許興族三十四人造像記 北魏 景明四年（503）	63
（参考）韓曳雲司徒端等造像記（造優填王像記） 唐	66
京都大学人文科学研究所蔵「龍門二十品」拓本調査整理報告（安岡素子）	67
京都大学人文科学研究所蔵龍門二十品拓本一覽	69
「都綰闕口遊徼校尉司馬解伯達造像記」十種	70
附録 京都大学人文科学研究所蔵 龍門二十品拓本選	72
龍門石刻著録書目	83
参考文献	84

例 言

1. 本書は京都大学人文科学研究所の蔵する「龍門二十品」拓本を、釈文・訓読・解説等を付して紹介するものである。
2. 「二十品」は、民国四年（1915）に洛陽県知事の曾炳章が選定した北魏造像記二十種（「馬振拝張子成許興族卅四人造像記」を含む。今日通行しているもの）とする。それ以前の「二十品」に含まれていた唐刻「韓曳雲司徒端等造像記（造優填王像記）」は参考資料とする。
3. 掲載順序は稲本泰生・安岡素子編『松本文三郎旧蔵 龍門二十品拓本』*（『東方学資料叢刊』第24冊，京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター，2017）に準じ，前項の「馬振拝張子成許興族卅四人造像記」は二十番目に配した。
4. 拓本資料の分類整理と一覧表作成は安岡素子が行い，得られた知見に基づく報告を執筆した。同時に諸本の比較対照に資するべく「都綰關口遊徼校尉司馬解伯達造像記」について，所蔵拓全十種の写真を示した。
5. 図版は黒川幸七旧蔵拓三種のうち「旧拓」とある品（東方拓本Ⅲ）により，「侍中護軍將軍北海王元詳造像記」のみ別本（東方拓本Ⅱ）を掲載した。このほか附録として，人文研所蔵拓から各品二点を選定し掲載した。
6. 【釈文】【校勘】【訓読】【解説】は，2016年度の共同研究班「北朝石窟寺院の研究」（班長・岡村秀典）における発表資料をもとに，岡村秀典と稲本泰生が執筆した。
7. 各造像記の名称のあとに，対応する仏龕の位置を龍門石窟研究院の窟龕番号を以て示した（略号：N＝北壁，S＝南壁，D＝窟頂）。
8. 【著録】の項には水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』（座右宝刊行会，1941）所収の塚本善隆・水野清一・春日禮智「龍門石刻録」（以下「石刻録」）の録文番号，劉景龍・李玉昆主編，龍門石窟研究所『龍門石窟碑刻題記彙録』（中国大百科全書出版社，1998。以下『碑刻』）所載の碑刻番号，東アジア人文情報学研究センターのウェブサイトで公開中の文字資料データベース（京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料）のファイルナンバー（2018年1月31日現在）を掲載した。各種金石録（略称は巻末「龍門石刻著録書目」参照）への著録状況は「石刻録」の「目録」を転載（旧字使用）した。
9. 参考文献（「龍門石刻著録書目」掲載書以外）は巻末にまとめて収録した。
10. 【釈文】は可能な範囲において原石に近い字形で入力し，改行箇所（／）を示し句読点を付した。【訓読】【解説】は新字を用いた。
11. 【校勘】には，本書【釈文】と「石刻録」録文及び『碑刻』の異同すべてを記載した。また「録文」の「校記」すべてを引用した。「録文」『碑刻』以外の書物の見解は，必要最小限のもののみ示した。
12. 本書には，科研基盤研究（B）「龍門石窟の内外にあらわれた仏教儀礼の考古学的研究」（研究代表者・岡村秀典）による研究成果の一部が反映されている。
13. 本書の編集は，稲本泰生と安岡素子が行った。

*なお『松本文三郎旧蔵 龍門二十品拓本』中の，当研究所蔵拓と既刊書掲載拓の関係にまつわる記載に誤りがある。同書「はしがき」2頁目の一文（「前者は～該当する」）を削除されたい。

太和九年十一月使持節司空公長樂
王丘穆陵亮夫人尉遲為亡息牛欄捨於
樓石造此弥勒像一區願牛欄捨於
之鄉騰遊无礙之境若存託生生於
諸佛之所若生世界妙樂自在之處
若苦累即今解脫三塗惡道永絕因
趣一切衆生咸蒙斯福

1 長樂王丘穆陵亮夫人尉遲造像記

北魏 太和十九年（495）十一月 古陽洞（第1443窟）N94

【著録】

録文577，碑刻1840，人文研 DB・NAN0036X，NAN0712M

目録1（補正12，關表上1，佛蹟108，沙畹1597，趙録2，楊録2，汪録5，楊圖3，王目，繆目2，吳録6，吳目9，方筆，常録，調表，石言）

【釈文】

太和〔十〕^{*1}九年十一月，使持節^{*2}・司空公・長樂／王・丘穆陵亮夫人尉遲，為^{*3}亡息牛橛，請工／鑲石，造此弥^{*4}勒像一區。願牛橛捨於分段／之鄉^{*5}，騰遊无^{*6}礙之境，若存託生，生於天上／諸佛之所，若生世界，妙樂自在之處，若有／苦累，即^{*7}令解脫，三塗惡道，永絕因趣。一切／衆生，咸蒙斯福。

【校勘】

- *1 1字欠損。北魏の太和は二十三年までであるから，録文・碑刻は「太和十九年」とするが，劉景龍（2001：附冊94頁）は造像前からここに亀裂があったために刻字されなかったとして「太和九年」と読む。
- *2 「節」録文「節」，碑刻「節」。
- *3 「為」録文「爲」。龍門二十品はすべて「為」に作る。以下同じ。
- *4 「弥」碑刻「彌」。「弥勒」はほぼすべての歴代石刻で「弥」と記される。以下同じ。
- *5 「郷」録文「鄉」。
- *6 「无」碑刻「無」。
- *7 「即」録文「卽」。

【訓読】

太和十九年十一月，使持節・司空公・長樂王・丘穆陵亮夫人尉遲，亡息牛橛の為に，工に請いて石に鑲み，此の弥勒像一区を造る。願わくは牛橛，分段の郷を捨て，無礙の境に騰遊し，若し存して生を託せば，天上諸仏の所に生まれ，若し世界に生まれなば，妙樂自在の処に，若し苦累有らば，即ち解脫して，三塗（途）の惡道，永えに因趣を絶たしめんことを。一切衆生，咸な斯の福を蒙らんことを。

【解説】

古陽洞北壁上層にあり，魏靈藏造像龕の直上，北海王元詳造像龕の直下に位置する円拱龕である。龕の高さ125cm，幅104cm，深さ18cm，交脚菩薩を主尊として左右に脇侍菩薩が侍立する。

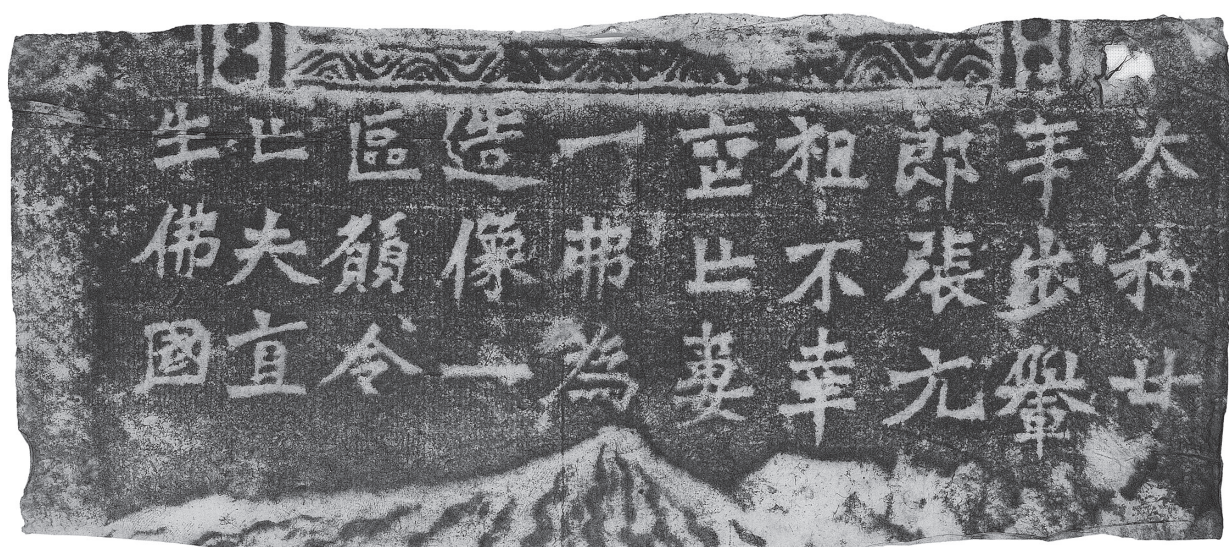
造像記は碑形で，高さ100cm，幅36cm，交龍に囲まれた碑額には文字がなく，碑身には7行，各行16字の銘文を刻んでいる。「牛橛造像記」と通称されるが，願主は長樂王丘穆陵亮夫人の尉遲氏で，亡息牛橛のために造像されたことから，（長樂王丘穆陵亮夫人）尉遲氏造像記と呼ぶのが妥当である。

冒頭第3字の欠損について，注1に記したように「十」を補い，「太和十九年」（495）と読むのが通説である。劉景龍2001は造像前からここに亀裂があったために刻字されなかったとして「太和九年」とするが，後述のように丘穆陵亮が司空に任じられたのは太和十七年（489）の南征後であるから，その説は成り立たない。

丘穆陵氏は古くから北魏に仕えた胡族の功臣で、帝室とは代々婚姻関係を結んでいる。496年に姓を「穆」に改めた。丘穆陵亮の伝は『魏書』巻27穆崇伝に附され、字は幼輔、献文帝のときに仕官し、中山長公主と結婚して駙馬都尉となり趙郡王に封ぜられ、ついで侍中、征南大將軍となり、長楽王に封ぜられた。また孝文帝に仕えて使持節となり、太和十七年（489）の南征後、司空に就任し、洛陽遷都においては尚書李冲らとともに洛京經始の重任にあたった。しかし、太和二十年（496）の穆泰の乱に兄が関係したため、司空を引責辞任した。宣武帝の代には定州刺史から尚書令、司空公を歴任し、景明三年（502）に52歳で卒した。かれの墓誌は人文研に拓本（NAN0062X）があり、「太尉領司州牧驃騎大將軍頓丘郡開国公穆文献公亮墓誌」の銘がある（趙超1992：41-42頁）。この造像記が刻まれたのは、亮45歳のときである。また丘穆陵亮の名は孝文帝の「弔比干墓文」の碑陰にみえる。太和十八年（494）十一月、孝文帝が洛陽遷都の途上、鄴に行幸して殷の忠臣比干の墓を訪ね、親しく弔文を作って碑を建てた。その碑陰には帝室元姓の顯官にまじって3人の丘穆陵（丘目陵）姓の名があり、その最初に「使持節・司空公・太子大傅・長楽公・臣江南郡丘目陵亮」と記されている（塚本善隆1941：197-198頁）。ただし造像記の「長楽王」は、太和十六年の降爵により、この「長楽公」の方が正しい。亮の子の紹は、字は永業、琅邪長公主と結婚し、父亮の没後、襲爵した。

丘穆陵亮夫人の尉遲氏は鮮卑に出自し、のち「尉」に改姓した。『魏書』太祖紀には道武帝の天興六年（403）に「朔方尉遲部別帥率万余家内属、入居雲中」とあり、大同市陽高県王官屯鎮では太安三年（457）の「歩胡豆和民莫堤尉遲定州」という銘文を門石に刻んだ墓が発見されている（殷憲ほか2011）。また『魏書』尉元伝によれば、尉元は代の豪宗で、北魏の徐州征服に功績があり、孝文帝のときに淮陽王、尚書令、司徒を歴任し、太和十七年（493）に81歳で没した。子の羽は博陵郡開国公・征虜將軍・恒州刺史、景興は正始元年（504）に卒し、兗州刺史を贈られるなど、みな高位高官にあった。亮夫人尉遲氏の墓誌拓本が北京図書館にあり、「故大尉公穆妻尉太妃墓誌銘、太妃、河南洛陽人也」、「祖侍中散騎常侍建義將軍四部尚書西陽公」、「父博陵府君」、「昊天不吊、春秋六十六、神龜二年十一月十日薨於洛陽之安貴里第。大魏神龜三年歲次庚子六月癸卯朔卅日壬申、附葬於景山之旧塋」（趙超1992：112頁）とあって神龜二年（518）に66歳で没したことがわかる。父は尉羽で、この造像記が刻まれたのは、夫人43歳のときである。

丘穆陵亮は司空として洛陽遷都の重任にあたったことから、かれにともなって夫人尉遲氏も洛陽に移住し、太和十九年（495）にこの龕を造営したのであろう。（岡村）



2. 一弗造像記

2 一弗造像記

北魏 太和二十年（496） 古陽洞（第1443窟）N76

【著録】

録文578，碑刻1841，人文研 DB・NAN0038X，NAN0712G

目録 2（補正12，關表上 1，大村190，沙畹1600，趙録 2，汪録 5，王目，繆目 2，吳録 6，吳目 9，方筆，調表，石言）

【釈文】

太和廿／年，步輦／郎張元／祖不幸／喪亡，妻／一弗為／造像一／區。願令／亡夫直／生佛國。

【訓読】

太和廿年，步輦郎の張元祖 不幸にして喪亡し，妻一弗 為に像一区を造る。願わくは亡夫をして直ちに仏國に生まれしめんことを。

【解説】

古陽洞北壁上層にある高さ27 cm，幅23 cm，深さ4 cm の小さな円拱龕である。禪定形の坐仏を主尊とし，龕内の左右に菩薩が侍立する。

造像記は台座の下にあり，本文は10行，各行3字である。願主の一弗氏は史書では「乙弗」と表記し，本龕が造像された太和二十年（496）と同じ年に「乙」姓に改められた。北魏の文成帝・献文帝期に乙渾は丞相・太原王となり，政權をほしいままにしたが，文明太后馮氏によって誅殺された。『北史』巻13西魏文帝文皇后乙弗氏伝に「其先世為吐谷渾渠帥，居青海，号青海王。」とあり，また「高祖莫瓌，擁部落入附，拜定州刺史，封西平公。……父瑗，儀同三司，兗州刺史。母淮陽長公主，孝文之第四女也。」という（姚薇元2007：175-177頁）。

奉為の「張元祖」については不詳。「輦」は「輿」と同じ。歩輿は板輿ともいい，造像記の「步輦郎」について汪鋆『十二硯齋金石過眼録』巻5は「按『魏書』官氏志，五品有奉乘郎，六品有翼馭郎・高車羽林郎，皆歩輿類也。而独無歩輿，或太和中議定百官時，易之，汰之。皆未可知。」という。（岡村）

[illegible]

3 比丘慧成造像記

北魏 太和二十二年（498）九月十四日 古陽洞（第1443窟）N304

【著録】

録文579，碑刻1842，人文研 DB・NAN0040X，NAN0712P

目録4（萃編27，補正12，關表上1，大村190，佛蹟111，沙畹1601，錢目1，姚目3，縣志59，一跋3，趙録1，楊録2，楊圖3，王目，繆目2，吳録6，吳目9，調表，石言，羅録）

【釈文】

題額：始平公／像一區。

夫靈蹤弗^{*1}啓，則攀宗靡尋。容像不陳，則崇之必□。是^{*2}／以真^{*3}顏□於上齡，遺形敷于下葉。暨于大代，茲功厥／作。比丘慧成，自以影濯玄流，邀逢昌運。率渴誠心，為／國造石窟寺^{*4}，謚^{*5}糸答皇恩，有資來^{*6}業。父使持節光〔祿〕^{*7}／大夫洛州刺史始平公，奄焉薨放^{*8}。仰慈顏，以摧躬□，／匪烏^{*9}在〔天〕^{*10}。遂為亡父造石像一區。願亡父神飛三〔會〕^{*11}，／智^{*12}周十地，□玄照，則万^{*13}有^{*14}斯明，震慧嚮，則大千斯〔時〕^{*15}，／元世師僧・父母・眷屬，鳳翥^{*16}道場，鸞騰兜率。若悟洛人／間，三槐獨秀，九棘雲敷。五有群生，咸同斯願。太和廿^{*17}二年九月十四日訖。朱^{*18}義章書。孟達文。

【校勘】

- *1 「弗」録文「非？」，碑刻未読。小林靖幸1984は楊大眼造像記（龍門二十品8）に「夫靈光弗曜」とあり，下句との関係や残画からみて「弗」とする。
- *2 「是」録文校記「大村・沙畹・補正による」。萃編は偏を「方」に作る。
- *3 「真」録文「眞」。龍門二十品はすべて「眞」に作る。以下同じ。
- *4 「寺」録文・碑刻未読。中田1974により補う。
- *5 「謚」録文・碑刻未読。小林1984は残画から「謚」と釈し，「庶」の異体字とする。
- *6 「來」録文・碑刻「來」。龍門二十品はすべて「來」に作る。以下同じ。
- *7 「祿」録文未読，中田1974，碑刻により補う。
- *8 録文は「薨放」の後で句読する。青木1983は「薨」の後で句を切り，「慈顏を放仰し」と読む。
- *9 「烏」録文校記「萃編・沙畹・大村による」。「匪烏」を沙畹は『詩經』邶風「北風」の「莫赤匪狐，莫黑匪烏」に典拠があるとする。
- *10 「天」録文未読，碑刻により補う。
- *11 「會」録文未読，碑刻により補う。中田1974は「界」とする。
- *12 「智」録文校記「萃編・沙畹・大村による」。碑刻は「五」とする。
- *13 「万」碑刻「萬」。「万」は「萬」の古字。
- *14 「有」録文・碑文未読。中田1974により補う。
- *15 「時」録文未読，碑刻により補う。中田1974は「瞭」とする。
- *16 「鳳翥」録文校記「萃編・沙畹・大村による」。
- *17 「廿」録文校記「萃編・沙畹・大村による」。碑刻未読。
- *18 「朱」前の「訖」との間に空格あり。

【訓読】

始平公像一區。



夫れ靈蹤 啓かざれば、則ち宗に攀るも尋ぬる靡し。容像 陳せざれば、則ち之を崇ぶも必ず□。是を以て真顔 上齡に□し、遺形 下葉に敷く。大代に暨び、茲の功を厥れ作す。比丘慧成、自ら影を以て玄流に濯ぎ、昌運に邀え逢う。率て誠心を竭（竭）くし、国の為めに石窟寺を造り、誠（庶）わくば皇恩に糸に答え、来業に資する有らんとす。父 使持節・光祿大夫・洛州刺史の始平公、奄焉として薨放す。慈顔を仰ぎ、以て躬□を摧き、匪烏 天に在り。遂ち亡父の為に石像一区を造る。願わくは亡父の神 三会に飛び、智は十地を周ねく、玄照を□すれば、則ち万有 斯れ明らかに、慧鬻を震えば、則ち大千 斯の時、元世の師僧・父母・眷属、道場に鳳翥し、兜率に鸞騰せんことを。若し悟（寤）て人間に落ちなば、三槐 独り秀で、九棘 雲のごとく敷せんことを。五有の群生、咸な斯の願いを共にせんことを。太和廿二年九月十四日 訖わる。朱義章の書、孟達の文。

【解説】

古陽洞北壁第3層の東端（第4龕）、窟門に隣接する円拱の大龕である。龕の高さは242cm、幅182cm、深さ40cm、禪定形の坐仏を主尊とし、龕内に2体の菩薩が侍立する。

造像記は碑形をなし、交龍に囲まれた碑額に「始平公像一区」の6字2行、碑身に10行、各行20字の本文があり、いずれも陽刻されている。

造像の完成は「太和□二年九月十四日」と紀年の1字を欠いており、「太和二年（478）」、「太和十二年（488）」、「太和廿二年（498）」と読む説が提起されてきた。「太和二年」説（畢沅『中州金石記』、劉景龍2001：附冊94頁）は、未読の1字はもともと文字のない空格であったとするが、その部分には文字間の界線が認められるから、そこに「十」もしくは「廿」の文字が存在したとみるべきである（清原実門2000）。「太和十二年」説の張乃翥1983は、(1)欠字の残画は「廿」になりえないこと、(2)本龕の上方に太和二十二年九月の造像になる北海王元詳龕があり、同時期の造像はむずかしいこと、(3)本尊仏坐像は服制改革以前の西方式服制で、供養者は胡服であることから、「太和十二年」の可能性が高いとする。(2)と(3)は論拠としては不十分だが、(1)にかんしては黄叔璥『中州金石攷』巻6（1741年）、孫星衍・邢澍『寰宇訪碑録』巻2（1802年）、趙紹祖『古墨齋金石跋』巻2（1810年）など初期の著録がいずれも「十二年」と読んでおり、そのころには字画がみえていたのかもしれない（清原2000）。これに対して「太和二十二年」説は王昶『金石萃編』（1805年）にはじまり、シャヴァンヌや大村西崖、塚本善隆（1941：212-215頁）ら海外の研究者に継承されて今日にいたっている。張乃翥説に対する正面からの反論はないが、造像様式からみると、左右の脇侍菩薩像は漢式のX字状天衣をまとい、西方式の絡腋を着けた太和十九年の丘穆陵亮夫人尉遲氏造像龕の交脚菩薩三尊像より後出することから、ここでは「太和二十二年」説にしたがう。

本龕は比丘慧成が父の洛州刺史始平公のために造像したものである。慧成の伝記は不明だが、「為国造石窟寺」とあるから、本龕だけでなく古陽洞そのものを最初に開いた高僧であろう。本龕は古陽洞のもっとも入口に近いところに位置し、ここから奥に向かって同形式の仏坐像をおさめる魏靈藏等造像龕、その上に太和十九年の尉遲氏造像龕や太和二十二年の北海王元詳龕などが造像されたことから、そのことが裏づけられる。

始平公について最初に詳論したのは武億『授堂金石跋』巻3である。そこでは「攷『隋書』、元孝矩祖修義、父子均、並為魏尚書僕射、孝矩西魏時、襲爵始平県公、然則此記始平公、当太和時、或子均為修義所建与」という。大村西崖（1915：196-197頁）は『魏書』巻19上と『北史』巻17の伝をもとにこれを補い、元修義は、字は寿安、景穆帝拓跋晃の子である汝陰王天賜の第五子で、雍州刺史にて没しているから、造像銘の「洛州刺史」に合わないが、史伝の失とみなした。これに対して塚本善隆（1941：

213頁)は、『魏書』卷9 肅宗紀に正光五年(524)「秋七月甲寅，詔吏部尚書元脩義兼尚書僕射，為西道行台，率諸將西討」とあるから，元脩義は太和二十二年の造像時には健在で，故始平公ではありえないとする。なお，元脩義は孝昌二年(526)五月に没したことが同年十月十九日の「魏故使持節侍中司空公都督冀瀛滄三州諸軍事領冀州刺史元公墓誌銘」(趙超1992:190-192頁)によって判明している。

洪頤煊『平津讀碑記』卷2が論じるように，始平郡は太平真君年間(440-451)に廃止されて扶風郡の属県になっている。もっとも『魏書』地形志には「南白水郡，領県二，始平・京兆」とあり，始平県は2か所あったらしい。その爵位は，献文帝の六男で，孝文帝の弟の元勰が，太和九年(485)に始平王に封じられ，太和二十年(496)に彭城王に移封されている。ところが太和二十二年(498)十二月二日の元偃墓誌には「太和十五年十二月廿七日制詔使持節・安北將軍・賀侯延鎮都大將・始平公元偃，今加安西將軍」とあり(趙超1992:36-37頁)，太和十五年(491)の時点で元偃は始平公であった。元偃は景穆帝拓跋晃の孫で，外都大官・濟陰宣王拓跋小新成の子であり，造像記の「使持節・光祿大夫・洛州刺史・始平公」とは別人であるが(趙万里1956:50頁)，元勰と元偃とで爵名が重複していた可能性がある。また，正光五年(524)十一月十五日の元寧墓誌には，元寧は「平遠將軍・散騎常侍・殿中尚書・冠軍將軍・始平公侯尼須之孫」とあり(趙超1992:157頁)，年代は不明だが，侯尼須という名の胡人が始平公に封じられていたことがわかる。

近年では青木実1983が洛州刺史を手がかりとして，始平公を太和十九年(495)に没した馮熙に比定した。すなわち，州刺史の定員は3人で，太和二十二年(498)以前に没したと確認できる洛州刺史には，在任が460年の常喜，475年の丘頓，476年の苟頹，476年の任命直後に没した楊懿，477年の馮熙，その前任の常伯夫，493年の穆崇の7人があり，始平公に該当しない人物を消去すると，苟頹と馮熙の2人がこのころ。苟頹は洛州刺史在任中の476年に散騎常侍・殿中尚書・成德公，翌年に侍中・河南公，479年に征北大將軍・司空公・河東王に進み，太和十三年(489)に没し，僖王と諡された。もうひとりの馮熙は，文明太后馮氏の兄で，娘が孝文帝の皇后になった外戚である。平城に五重塔をもつ皇舅寺，洛陽に北邙寺を建て，みずから家財を出して諸州鎮に72か寺を建立するなど奉仏家として知られる。封爵は肥如侯から昌黎王に進み，492年の例降により京兆郡公に改封され，495年に平城で没した。問題は始平公の爵位であるが，『魏書』馮熙伝によると，馮熙の孫の馮穆は「襲熙爵。避皇子愉封，改扶風郡公」とあり，太和二十一年に皇子の元愉が京兆王に封ぜられ，扶風郡公に改封されたため，馮熙生前の爵名を散爵の始平公に改めたと推測する。馮熙の死ぬ2か月前には嫡子の馮誕が没し，太和二十年には娘の廢皇后が皇后位を廢されて出家，翌年に皇后位についた娘の幽皇后も太和二十三年には死を賜り，馮氏一族の権勢は急速に凋落していった。本龕が馮熙のために造像されたとすれば，それは馮熙の死後3年半ほどで完成したことになるが，そのとき馮氏の家運は傾きつつあったというのである。近年，洛陽で馮熙と子の馮誕・馮聿の墓誌が相次いでみつかっており(宮万瑜2012・劉連香2016)，正始三年(506)に没した「給事黃門侍郎・太中大夫・征虜將軍・兗州刺史・信都伯馮順公(聿)」墓誌には，馮熙伝のとおり馮熙の諡は「武公」となっている。青木説はなお検討が必要であろう。

なお，洛州については『平津讀碑記』が指摘するように『魏書』地形志の洛州条の注に「太宗置，太和十七年改為司州，天平初復。」とあるが，洛陽出土の正始四年「征東大將軍・大宗正卿・洛州刺史・樂安王元緒墓誌」によれば，元緒は景明正始の間に洛州刺史になったとあるから，太和十七年以後に「洛州刺史」の名がなくなったとはいえない(塚本1941:213頁)。

この造像記を撰文した「孟達」は，孫秋生造像記に「孟広達文，蕭顗慶書」とある「孟広達」と同一人物かもしれない。朱義章と孟達ともに伝記は明らかでない(中田1974)。(岡村)

維大和之十八年十二月十一日皇帝親御
六旌南伐蕭逆軍國二容別於洛汭行留雨音
分於開外太妃以聖善之規戒途戎振弟子
以資孝之心戈言奉淚其曰太妃還家伊川立
願母子平安造彌勒像一區以置於此至廿二
年九月廿三日法容剋就日即造齋鑿石表心
奉申前志永願母子長飡化年眷名內永終始
榮期一切群生咸同其福

維太魏大和三年九月廿三日侍中護軍將軍北海王元詳造

4 侍中護軍將軍北海王元詳造像記

北魏 太和二十二年（498）九月二十三日 古陽洞（第1443窟）N51

【著録】

録文580，碑刻1843，人文研 DB・NAN0041X，NAN712K

目録 5（補正12，關表上 1，大村191，沙畹1598，汪録 5，楊圖 3，王目，繆目 2，吳録 6，吳目 9，方筆，調表，石言）

【釈文】

維太和之十八年十二月十一日，皇^{*1}帝親御／六旌，南伐蕭逆。軍・國二容，別於洛汭，行・留兩音，／分於闕外。太^{*2}妃以聖善之規，戒途戎旅，弟子／以資孝之心，戈言奉淚。其日太妃還家，伊川立／願母子平安，造弥勒像一區，以置於此。至廿二／年九月廿三日，法容剋就。因即造齋，鑄石表心，／奉申前志。永願母子長飡^{*3}化年，眷属内外，終始／榮期，一切群生，咸同其福。／

維太魏太和廿二年九月廿三日，侍中護軍將軍北海王元詳造。

【校勘】

* 1 「皇」前の「日」との間に空格。

* 2 「太」前の「外」との間に空格。

* 3 「飡」碑刻「餐」。

【訓読】

維れ太和の十八年十二月十一日，皇帝親しく六旌を御し，南のかた蕭逆を伐つ。軍・国の二容，洛汭に別れ，行・留の両音，闕外に分かる。太妃 聖善の規を以て，途を戎旅に戒め，弟子 資孝の心を以て，戈言奉涙す。其の日，太妃 家に還り，伊川にて母子の平安ならんことを立願し，弥勒像一区を造り，以て此に置かんとす。廿二年九月廿三日に至りて，法容 剋く就る。因りて即ち齋を造し，石を鑄ちて心を表わし，前志を奉申す。永えに願わくは母子の長餐化年し，眷属内外，終始榮期にして，一切の群生も，咸な其の福を共にせんことを。

維れ太魏の太和廿二年九月廿三日，侍中・護軍將軍・北海王元詳 造る。

【解説】

古陽洞北壁の最上層にあり，龕の高さ140cm，幅103cm，深さ13cm，交脚菩薩を主尊とし，浅い龕内に2体の菩薩を配する三尊像龕である。

造像記は碑形をなし，交龍に囲まれた碑額には銘刻がなく，碑身に8行，各行18字の本文があり，末尾は1字下げ，小さい文字で造像の年月日と願主の名を記している。

願主の北海王元詳は『魏書』巻21上「献文六王列伝・北海王詳伝」に立伝されるほか，永平元年（508）十一月六日の「北海王元詳墓誌」（趙万里1956：図版181，人文研 DB・NAN0098X）が知られている。それによれば，元詳は献文帝の第七子で，字は季予，太和九年（485）に北海王に封ぜられ，侍



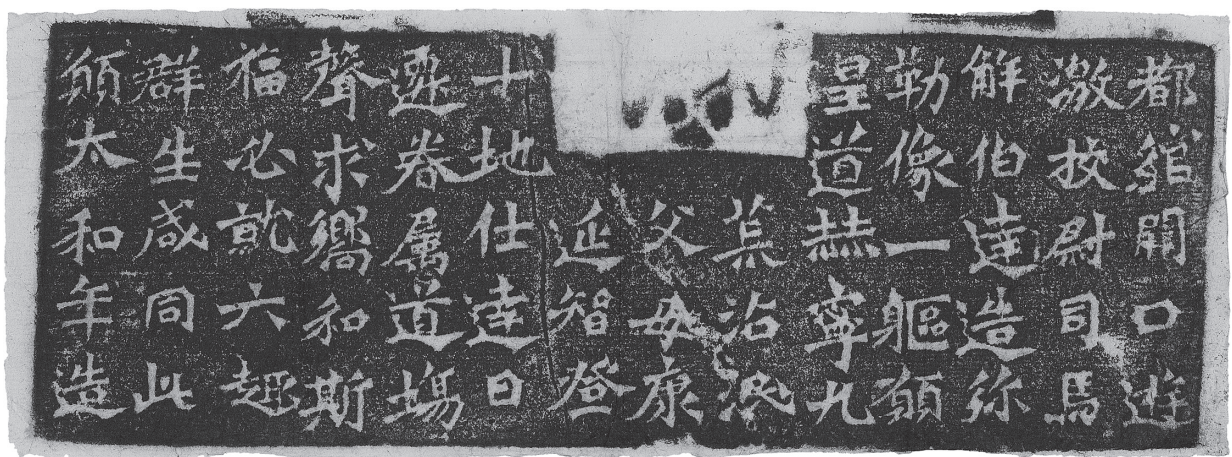
中・征北大將軍を加えられた。本造像記にもみえる太和十八年（494）の孝文帝の南征に際して散騎常侍となり、太和二十二年（498）正月、洛陽に帰還し、趙郡王元幹に代わって行司州牧・護軍將軍・兼尚書左僕射に除せられた。同年九月にこの造像記が完成したが、末尾の護軍將軍はこのときの官職である。太和二十三年（499）に孝文帝の遺言により、司空となって宣武帝を輔政した。宣武帝の親政後も司徒・録尚書事となったが、高肇の誣告により庶民に落とされ、幽閉の後、正始元年（504）六月十三日に29歳で暴死した。したがって、生年は父獻文帝の崩じた476年で、孝文帝の南征に従軍したときは19歳、本龕の造像は23歳のときである。また、元詳の母は高椒房、元詳が北海王に封ぜられて太妃となった（北海王国太妃高造像記〔龍門二十品7〕の解説参照）。なお、元詳の居宅は光睦里にあり、永平元年に平王と諡され、孝文帝の長陵北山に埋葬された。

『洛陽伽藍記』卷3城南に「龍華寺，広陵王所立也。追聖寺，北海王所立也。並在報恩寺之東，法事僧房，比秦太上公。京師寺皆種雜果，而此三寺園林茂盛，莫之与争。」という。報恩寺は同卷に「報德寺，高祖孝文皇帝所立也。為馮太后追福。在開陽門外三里。」とあり、その西側に洛水にかかる永橋があった。『魏書』北海王詳伝によれば、宣武帝はしばしば洛陽城の南にあった元詳の「南第」に行幸し、その後堂で高太妃に会い、「阿母」と呼んだというから、北海王の家は追聖寺に隣接したのだろう。追聖寺はその寺号からみて元詳が孝文帝を追善するために造営した可能性が高く、499～504年の造営と考えられる。

本龕造像のきっかけは孝文帝の「南伐蕭逆」である。清・汪鋐『十二硯齋金石過眼録』卷5が考証したように、494年7月、宣城公蕭鸞は南齊皇帝の蕭昭業を殺害し、弟の蕭昭文が即位するが、同年10月に廃位され、蕭鸞みずから即位した。この混乱の中で南齊の雍州刺史の曹虎が北魏への帰順を申し出てきたため、同年12月に孝文帝は討伐の軍を起こしたのである。『魏書』高祖紀下によれば、この12月は辛丑朔で、辛亥（11日）に「車駕南伐」し、丁卯（15日）に「郢予二州之民」に賜爵などをおこない、戊辰（28日）に「車駕至懸瓠」という。「懸瓠」は『水經注』卷21に「汝水又東逕懸瓠城北。……高祖以太和中幸懸瓠，平南（將軍）王肅，起高台於小城，建層樓於隅阿」とあり、司州汝南県（現在の河南省汝州市）に城郭があった。

造像記第2行の「洛汭」は『尚書』禹貢の「東過洛汭」に『正義』は「洛汭，洛入河処，河南鞏縣東也。」とするが、洛陽城の宮城から直線で30kmあまりの距離がある。一方、『魏書』卷82常景伝に孝昌（525-527）初めに「景經洛汭，乃作銘焉」とあり、『洛陽伽藍記』卷3城南に「宣陽門外四里，至洛水上，作浮橋，所謂永橋也。神龜中，常景為汭頌。」とあるから、皇帝の六軍は宮城の閭闔門から宣陽門を通過して南下し、太妃らは永橋のあたりで見送ったため、その日のうちに帰宅できたのであろう。

以上のことから、孝文帝の軍は洛陽城から真っ直ぐ南下し、汝南から東に徐州に向かうルートを取ったのであろう。（岡村）



5. 都館關口遊激校尉司馬解伯達造像記

5 都綰關口遊徼校尉司馬解伯達造像記

北魏 太和年間 古陽洞（第1443窟）N233

【著録】

録文581, 碑刻1843, 人文研 DB・NAN0050X, NAN712Q

目録4（補正12, 關表上1, 大村191, 沙畹1603, 錢目1, 孫録2, 姚目3, 縣志59, 續跋1, 楊録2, 楊圖3, 王目, 繆目2, 趙目1, 吳録6, 吳目9, 方筆, 調表, 石言）

【釈文】

都綰關口・遊^{*1}／徼校^{*2}尉・司馬／解伯達, 造弥／勒像一軀^{*3}。願／皇道赫寧, 九
／荒沾泯, 父母康／延, 智登／十地, 仕達日／遷, 眷属道場, 聲求嚮和, 斯／福
必就, 六趣／群生, 咸同此／願, 太和年造。

【校勘】

*1 「遊」碑刻「游」は誤り。

*2 「校」碑刻「校」。

*3 「軀」碑刻「區」は誤り。

【訓読】

都綰關口・遊徼（徼）校尉・司馬の解伯達, 弥勒像一軀を造る。願わくは皇道赫寧にして, 九荒沾泯し,
父母康延し, 智は十地に登り, 仕達 日び遷り, 眷属の道場にて, 声求嚮和し, 斯の福 必ず就り, 六趣
の群生も, 咸な此の願いを共にせんことを, 太和の年に造る。

【解説】

比丘慧成龕（龍門二十品3）と魏靈藏等龕（龍門二十品6）の間, 魏靈藏等造像碑の上に位置する円
拱龕である。龕の高さ53cm, 幅40cm, 深さ4cm, 交脚菩薩を本尊とし, 左右に脇侍菩薩が侍立する
が, 本尊は大破している。脇侍菩薩の左右には供養者が浅い浮彫で2体ずつあらわされている。

台座に造像記があり, 本文は14行, 各行5字で, 中央の3行は地天像があるため, 各行3字である。
現状は造像記の後半が破損により失われている。

願主の解伯達は, 解が姓, 伯達が名である。解氏は解枇氏を改めた姓で（『魏書』官氏志）, 天興四年
（401）に北魏に帰順した高車族の解枇部落に出自がある（姚薇元1962: 156頁）。古陽洞の高樹解伯都造
像記（龍門二十品12）の解伯都も同姓であり, 伯達と伯都是音も近く, 同一人物であるかもしれない
（中田1974: 34頁）。

「都綰關口・遊徼校尉・司馬」は伊闕の関門の警備隊に属する隊員。古陽洞では正始五年（508）の關
口関曹吏張英周妻や關口関吏史布榮らの造像記にみえる關口関曹吏や關口関吏史も同じ職種であろう。
（岡村）

夫靈跡誕邁必表光大之迹玄功既敷無樹希世之作自雙
 林改昭大千懷綴曠之悲慧日潛暉哈生銜道慕之應是
 應真悼三乘之靡憑遂以刊像爰暨下代茲容廉任經
 魏靈藏河東薛法紹二人等求募光東照之資開兜率
 翅頭之益敢輒罄家財造石像一區凡多衆形同不備列
 釋迦像額乾祚興通方朝贊額藏等挺三槐於孤峰秀九棘於華
 薛法紹范芳寶再繁璫樵獨茂合門築菴福派并葉命終之後飛
 蓬聖神颺六通知同三達曠世所生元身眷屬捨百郭則
 鵬翥龍花悟無生則鳳昇道樹五道群生咸同斯慶
 陸渾縣功曹魏靈藏

6 鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等造像記

北魏 無年月 古陽洞（第1443窟）N234

【著録】

録文678, 碑刻2024, 人文研 DB・NAN712J

目録1136（萃編26, 補正12, 關表上11, 大村194, 佛蹟2-107, 沙畹1615, 畢記1, 錢目1, 孫録2, 姚目2, 縣志59, 洪記2, 一跋3, 楊録2, 楊圖3, 王目, 繆目2, 趙目1, 吳録6, 吳目9, 方筆, 調表, 石言3, 羅録）

【釈文】

題額：魏靈藏／釋迦像／薛法紹

夫靈跡誕遘，必表光大之迹，玄功既敷，亦標^{*1}希世之作。自雙／林改照，大千懷綴暎之悲，慧日潜暉，含生銜道慕之痛。是以／應真悼，三乘之靡憑，遂騰空以刊像。爰暨下代，茲容厥作。鉅／鑪^{*2}魏靈藏・河東薛法 紹^{*3}二人等，乖^{*4}豪光東照之資，闕兜率／翅頭之益。敢 輒^{*5}罄家財，造石像一區，凡及衆形，罔不備列。／願乾祚興延，万^{*6}方朝貫。願藏等挺三槐於孤峰，秀九棘於華／苑，芳 實^{*7}再繁，荆條^{*8}獨茂，合門榮葩，福流奕^{*9}葉，命終之後，飛／逢千聖，神颺六通，智周三達。曠世所生，元身眷屬，捨百郭，則／鵬^{*10}擊龍花，悟無生，則鳳昇道樹。五道群生，咸同斯慶。／陸渾縣功曹魏靈藏。

【校勘】

- *1 「標」龍門二十品では旁に「寸」が付く。以下同じ。
- *2 「鑪」碑刻「鹿」。
- *3 「法」と「紹」の間に空格があるのは、亀裂を避けたからだろう。
- *4 「乖」萃編・録文・碑刻などは「求」と釈すが、その字形と下句との関係から中田1974にしたがう。
- *5 「輒」碑刻は「輒」。「敢」との間は亀裂を避けて空格がある。
- *6 「万」碑刻「萬」。
- *7 「芳」と「實」の間に亀裂による空格がある。
- *8 「條」碑刻「條」。下の「獨」との間に空格がある。
- *9 「奕」碑刻「并」。潘岳「楊仲武誄」（『六臣注文選』卷56）に「伊子之先，奕葉熙隆」とあり，その注に「濟曰，奕，累。」という。
- *10 「鵬」の前に亀裂による空格がある。

【訓読】

夫れ靈跡 誕に遘えば，必ず光大の迹を表わし，玄功 既に敷せば，亦た希世の作を標わす。雙林 照を改めて自り，大千は暎（映）の綴む悲しみを懷き，慧日 暉を潜めてより，含生 道慕の痛みを銜む。是を以て応真は，三乗の憑る靡きを悼み，遂に空に騰りて以て像を刊む。爰に下代に暨びて，茲の容 厥れ作る。鉅鹿の魏靈藏・河東の薛法紹二人等，豪（毫）光東照の資に乖き，兜率翅頭の益に闕く。敢えて輒ち家財を罄くし，石像一區を造り，凡て衆形に及ぶまで，備列せざるは罔し。願わくは乾祚興延し，

万方朝貫（貢）せんことを。願わくは藏等 三槐を孤峰に挺んで、九棘を華苑に秀で、芳実は再び繁り、荊條（条）は独り茂り、合門栄葩し、福は奕葉に流れ、命終わるの後は、飛びて千聖に逢い、神は六通に颺がり、智は三達に周ねからんことを。曠世の所生、元身の眷属も、百郭を捨つれば、則ち鵬は龍花に撃かり、無生を悟れば、則ち鳳は道樹に昇らんことを。五道の群生、咸な斯の慶を同じうせんことを。陸渾縣功曹の魏靈藏。

【解説】

古陽洞の北壁第3層、比丘慧成造像（龍門造像記3）と楊大眼造像（龍門造像記8）との間にあり、龕高は2.5m、幅1.5m、この3大龕は古陽洞の中でも初期の段階に計画的に造像されたと考えられる。本龕は合手形の坐仏を主尊とする。光背上部の左右の維摩文殊像に多数の比丘像がともなうのはめずらしい。宣字形の台座には左右三体ずつの供養者が立つ。

造像記は碑形をなし、碑首の題額は「釈迦像」を中央にして右に「魏靈藏」、左に「薛法紹」とあり、本文は9行、各行23字、末尾の第10行目に願主のひとり「陸渾縣功曹魏靈藏」の名を刻んでいる。「陸渾縣」は伊水の上流、司州の管下にあり、いまの河南省伊川県の南に位置している。「功曹」は書史を司る役人。魏靈藏は鉅鹿（いま河北省晋州市）に出自があり、佐藤智水氏の教示によれば、鉅鹿の魏氏には『魏書』を編纂した魏収などがある（『魏書』列伝第92自序、『北齊書』列伝第29、『北史』列伝第44）。また、もうひとりの河東（いま山西省永濟県）の薛法紹は、官職は記されていないが、薛氏は河東三氏のひとつに数えられる。

塚本善隆（1941：214頁）は、これが比丘慧成造像記と同じ指導者の思想信仰から導かれていること、その指導者は石窟の発願者であり、洛州刺史の始平公の子である比丘慧成が想定されること、その比丘慧成が洛州管下の県の役人を勧進し、あるいは比丘慧成が発願して着工している国のための造窟事業を州下の県の役人が賛助し、その窟内に造られた一龕に対して費用を寄附して、かれらの名による造像記をつけてもらったこと、古陽洞の南壁にある景明三年（502）の孫秋生等二百人造像記（龍門造像記11）も同じ背景があることを指摘している。しかし、洛州は太和十七年（493）に司州に改められ、魏靈藏は司州の管下にある陸渾県の役人である。また、鉅鹿に出自する魏靈藏が遠く離れた陸渾県の功曹に就いたこと、河東の薛法紹も外地の人であり、そうした人びとが比丘慧成造像や楊大眼造像に比肩しうる仏龕を造像したことなど、解明すべき問題が残されている。

字体は楊大眼造像記に近似するが、「荊条」は別字で、「唵」・「希」・「求」・「豪」・「率」・「棘」などは異体字である（畢沅『中州金石記』）。

拓本の新旧について3行目の「騰空」字をみると、乾隆拓では「騰」の「馬」部がみえ、嘉慶・道光拓では「空」字も完全にみえるが、光緒拓では「空」字が大半を失い、民国十年（1921）には100字あまりが欠損したという（王壯弘1981：240-241頁）。今日では碑文の三分の二が失われている。（岡村）

孫保失鄉抹
今載終如
不幸早死今為保造像
區使永脫百苦
魏北海王國太妃高為孫保造

7. 北海王國太妃高造像記

7 北海王国太妃高造像記

北魏 無年月 古陽洞（第1443窟）D45

【著録】

録文680, 碑刻2288, 人文研 DB・NAN0712H

目録1243（補正12, 關表上10, 大村190, 佛蹟111, 沙畹1599, 汪録6, 王目, 繆目2, 吳録6, 吳目9, 方筆, 調表, 石言, 羅録3-7）

【釈文】

孫保失郷^{*1}, 播越□□。□□／歴載, 終始^{*2}寡^{*3}愆, 未及免之, ／不幸早死。今為保造像一／區, 使永脫百苦。／魏北海王國太妃高^{*4}, 為孫保造。

【校勘】

*1 「郷」録文「郷」。

*2 「始」録文は「如」とするが, 碑刻・中田1974にしたがう。

*3 「寡」録文は「眞」とし, 碑刻未読だが, 中田1974にしたがう。

*4 「高」録文・碑刻「高」。龍門二十品はすべて「高」に作る。以下同じ。

【訓読】

孫の保 郷を失い, □□に播越す。□□すること歴載, 終始寡愆なきも, 未だ之を免るるに及ばず, 不幸にして早死す。今, 保の為に像一区を造り, 永えに百苦を脱れ使めん。魏・北海王国太妃高, 孫の保の為に造る。

【解説】

古陽洞のドーム天井の北側頂部にあり, 龕の高さ127cm, 幅92cm, 深さ8cm, 交脚菩薩を主尊とする三尊像龕である。本尊の衣文や舟形光背の内側には彫刻がなく, 仕上げが未完成と思われる。

造像記は左横にあり, 長方形をなし, 本文は5行, 各行10字, 末尾に「魏北海王国太妃高為孫保造」の12字がある。碑形の右下が欠損し, 第1行の下4字が読めない。

願主の北海王国太妃高氏は, 元詳の母の高椒房で, 太和九年(485)に元詳が北海王に封ぜられて太妃となった(北海王元詳造像記〔龍門二十品4〕の解説参照)。元詳の子には, 北海王を継いだ顓, 字は子明と, 東海王に封じられた弟の頊, 字は宝意の2人があるが(『魏書』卷21献文六王列伝・北海王詳伝), 保をふくめた他の子については史伝がない。保は高氏の孫にあたり, 造像記にあるように, 幼くして死んだらしい。元詳は宣武帝の信任をえた高肇の誣告によって幽閉され, 正始元年(504)六月十三日に29歳で暴死したから, 本龕は元詳龕の太和二十二年(498)以降, 正始元年までの間に造像されたのであろう。造像が未完成であるのは, 元詳の幽閉によって仕上げが中止されたのかもしれない。

中田1974はこれと北海王元詳造像記と書体がよく似ているという。このほか北海王母子を奉為とする景明四年(503)比丘法生造像記(龍門二十品16)の書体も類似している。(岡村)

8 仇池楊大眼造像記

北魏 無年月 古陽洞（第1443窟）N228

【著録】

録文677，碑刻2023，人文研 DB・NAN0712E

目録1847（萃編28，補正12，關表上10，大村191，佛蹟2，160，沙畹1614，畢記1，錢跋2，錢目1，孫録2，姚目2，縣志59，洪記2，一跋3，楊録2，王目，繆目2，趙目1，吳録6，吳目9，方筆，調表，石言，羅録）

【釈文】

題額：邑子像

邑主仇池楊大眼為〔孝文 皇帝造像記〕^{*1}／夫靈光弗曜，大千懷永夜之悲^{*2}。明^{*3}蹤不邁，葉生含靡道之懺。／是以如來應群緣，以顯迹。爰暨下代^{*4}，至^{*5}像遂著。降及後王，茲／功厥作。輔國將^{*6}軍・直閣將軍・□□□□・梁州大中正・安戎縣／開國子仇池楊大眼，誕承龍曜^{*7}之資，遠踵應符之胤。稟^{*8}英奇／於弱年，挺超群於始冠。其行^{*9}也，垂仁聲^{*10}於未聞，揮光也，摧百／万^{*11}於一掌。震英勇則九宇咸駭，存侍納則朝野必附。彰^{*12}王衢／於三紛，掃雲鯨於天路。南穢既澄，震旅歸闕，軍次□行，路逕／石窟，覽先 皇之明^{*13}蹤，覩^{*15}盛聖之麗迹。矚^{*16}目徹^{*17}霄^{*18}，泫然流感。／遂為孝文 皇^{*19}帝造石像一區，凡及衆形，罔不^{*20}備列。刊石記／功，示之云爾。武^{*21}。

【校勘】

- * 1 録文校記「孝文皇帝造像記八字は萃編によって補う，沙畹大村も同じ」。碑刻「孝文 皇帝造〔像記〕」。
- * 2 「悲」録文未読。中田1974・碑刻により補う。
- * 3 「明」録文・碑刻未読。中田1974により補う。
- * 4 「下代」録文・碑刻未読。中田1974により補う。
- * 5 「至」録文・碑刻未読，中田1974により補う。碑刻は「下代至」に相当する文言を4字分未読とする。
- * 6 「將」録文・碑刻「將」。「直閣將軍」も同じ。
- * 7 「曜」碑刻「耀」。
- * 8 「稟」碑刻「稟」。
- * 9 「行」録文・碑刻未読，中田1974により補う。
- * 10 「聲」録文校記「萃編によりて補う」。
- * 11 「万」碑刻「萬」。
- * 12 「彰」録文・碑刻「清」。洪記は何超『晋書音義』を引いて「靜」に同じとするが，畢記が「清」の異体字とし，中田1974も「きよめ」と読むのにしたがう。
- * 13 「皇」前の「先」との間に空格がある。
- * 14 「明」録文・碑刻「明」。
- * 15 「覩」碑刻「睹」。
- * 16 「矚」原石の偏は「日」。録文は「矚」とするが，中田1974・碑刻にしたがう。
- * 17 「徹」中田1974未読，「徹のようにみえる」「徹かもしれないが未詳」とする。
- * 18 「霄」碑刻「霄」。
- * 19 「皇」前の「文」との間に空格がある。
- * 20 「不」録文校記「補正による」。



*21 「武」前に1字分の空格がある。畢記はこのあと年号が続くはずだったが未完と推測。中田1974は楊大眼自身をいうか、この下に文字を刻するつもりだったか、明らかでないとする。

【訓読】

邑子像。

邑主仇池の楊大眼、孝文皇帝の為に像を造るの記。

夫れ靈光曜かざれば、大千は永夜の悲を懷く。明蹤邁わざれば、葉生は道なきの懺を含（含）む。是を以て如来は群縁に応じ、以て跡を顕らかにす。爰に下代に暨び、至像遂に著る。降りて後王に及び、茲の功厥れ作る。輔国將軍・直閭將軍・□□□□・梁州大中正・安戎県開国子・仇池の楊大眼、誕（ここ）に龍曜の資を承け、遠く応符の胤を踵ぐ。英奇を弱年に稟け、超群を始冠に挺んず。其の行や、仁声を未聞に垂れ、光を揮うや、百万を一掌に摧く。英勇を震えば則ち九宇咸な駭き、侍納を存すれば、則ち朝野必ず附す。王衢を三紛に清め、雲鯨を天路に掃う。南機既に澄み、旅を震いて闕に帰る。軍□行に次り、路に石窟を逕て、先皇の明蹤を覽、盛聖の麗迹を觀る。矚目すること宵を徹し、泫然として流感す。遂に孝文皇帝の為に石像一区を造る。凡て衆形に及ぶまで、備列せざるは罔し。石に刊みて功を記し、之を示すと、爾か云う。武。

【解説】

古陽洞北壁第3層、東から3番目の仏龕（第2龕）に付属する。龕の高さは253cm、幅は142cmで、禪定相の坐仏を中心に、2体の菩薩像が侍立する。造像記は高さ126cm、幅42cm。始めに15字の標題、ついで本文が10行、各行23字で刻される。碑首に6つの弧を連ねた形状の題額を配し、「邑子像」の三字を表す。

現状では表面がかなり損傷しているが、欧陽輔1923（『集古求真』）巻3は旧拓では第1行の「皇帝造像記」の5字、第7行の「咸駭」の2字が残り、それに続く「則」、第5行の「応踵」の2字、第6行の「垂」「光」も完好とする。また張廷済1892（『清儀閣金石題識』）巻2が著録する拓本は第1行全体と「咸駭」の2字が完存するといい、張廷済は武億（『授堂金石一跋』）と王昶（『金石萃編』）が見たものと同じと推測する（道光十二＝1832年壬辰閏九月二十三日付記事。以上中田1974）。しかし現存最古とされる北京図書館蔵拓でも、「皇帝造像記」の5字中判読できるのは「皇」のみにとどまる。

冒頭に願主として名がみえる楊大眼は、『魏書』巻73及び『北史』巻37に立伝される、北魏を代表する武将の一人である。仇池（甘肅省成県）の楊氏は五胡の一つ氏族に属する。漢の武都の白馬氏に出自をもち、漢末に仇池を拠点として百頃氏王と号した（姚薇元1962：368-372頁等）。地方政權としての仇池（前仇池）の建国は296年で、初代君主の楊茂搜は右賢王・輔国將軍を自称したが371年に滅亡した。385年に再興（後仇池）されたものの442年、最後の君主である楊難当の北魏亡命によって滅亡した。大眼は難当の孫として生まれたが庶流の出だったため若年期は不遇だったといい、太和に入って北魏に仕え、武人として頭角を現すに至った。造像記中の「誕承龍曜之資、遠踵応符之胤」は、仇池国の君主の血を引くことをふまえた表現であろう。また「安戎県」は『魏書』地形志に秦州略陽郡に属する五県の一としてみえるもので、正史の楊大眼伝にみえる「安成県」は訂正を要する。また文中で大眼は「邑主」を自称しているが、錢大昕『潜研堂金石跋尾』（錢跋）もいうとおり、信徒集団の造像という体裁をとるにもかかわらず他の人名がみえない点は不可解である。

本造像記は年紀を欠くが、内容はきわめて重要な要素を含む。楊大眼は宣武帝の即位（499）直後の景明元年（500）2月、奚康生とともに軍勢を率い、南斉の予州刺史裴叔業を寿春（安徽省）に攻略し

た。造像記中の大眼の肩書のうち「梁州大中正」以外が、これによって得た官職（『魏書』『北史』の楊大眼伝）に一致する。武億はここに注目し、文中の『南穢』既澄、震旅帰闕もこの戦役に照応する一節と考えた。同時に正史の伝にいう「安成」が「安戎」の誤記であることも指摘する（この点は畢沅『中州金石記』が僅かに早い）。錢大昕も同様の見解をとり、造像記の年代を景明（500～503）初に特定し、塚本善隆（1941：207-8頁）・中田勇次郎（1974：39頁）らもこれに追従している。

寿春攻略に続く大眼の事績について、『魏書』の伝は「出為征虜將軍・東荊州刺史。時蛮酋樊季安等反，詔大眼為別將，隸都督李崇，討平之」，同卷8世宗紀は「正始元年（504）春正月，（略）丙辰，東荊州刺史楊大眼，大破群蛮樊季安等」と述べる。一方で造像記の文面は楊大眼が洛陽城に凱旋する途上、龍門石窟に立ち寄ったかのように読めるが、溫玉成1987、張雯2012は造像記の肩書が寿春からの帰還後に与えられていることを根拠に、「南穢」がこの樊季安の乱にあたる可能性を指摘した。

しかし最新の曹・焦・劉2016は「南穢」について、北魏疆域南部の東荊州における樊季安の「群蛮」勢力より、蕭梁の政治軍事勢力である可能性が高いという見解を示した。同論文は『魏書』にみえる「南」の用例を多数挙げて、これが地理的な意味での「南方」ではなく、南朝の政権および領域を指す語であるとみて、「南穢」を正始二年（505）に宿予を平定して藍懷恭を討ち取った話、もしくは同三年（506）に荊州河南城を攻撃して王花を討ち取った戦役にあて（のち大眼は鍾離の戦の大敗で官位を剥奪されることになる）る。ただ南朝勢力とみなす説という点では、清朝の諸学者や日本人研究者が採ってきた「南穢既澄」を裴叔業攻略にあてる、従来の説も同様である。

曹・焦・劉の指摘でより重要なのは、史書にみえない「梁州大中正」という肩書の解釈に関する、以下の諸点である。①北魏は宣武・孝明時代、州の大小に関わらず必ず中正をおいた（『通典』卷14）。②天監三年二月（北魏正始元年閏十二月），梁州長史夏侯道遷の内附により梁州は北魏に降った（『魏書』卷8・71、『梁書』卷2・11）。③北魏は梁の秦・梁二州を改めて梁州とした（『魏書』地形志。正始元年のこと，領郡五・県十四とする）。④大眼が出自と称する仇池（秦州に属する）も梁州に編入された結果，梁州もまた大眼の本州となった。⑤『魏書』中に，本州の大中正を兼務する事例が多くみられる。これらを総合して曹・焦・劉は大眼が当該職を得た時期は正始元年閏十二月を遡らず，したがって「南穢」以下の述べる戦役は，樊季安らを撃破した正始元年正月の戦いにはあたらないと考証した。現時点で問題はみあたらず，有力な見解としてよい。

同論文の結論は，楊大眼造像龕が景明三年（502）五月三十日以前に制作が始められ，正始二年（505）ないし三年（506）における戦役で勝利した楊大眼の洛陽への帰還の途次，完成したというものである。景明三年五月三十日という日付の根拠は右上にあるN135龕に付された造像記（高樹解伯都三十二人等造像記〔龍門二十品12〕。なお孫秋生劉起祖二百人等造像記〔同11〕も同じ日付）で，楊大眼造像龕の規格が確定したのち余白部を利用して制作されたという前提に基づく推測がなされている。

本造像記は仏龕制作の動機について，大眼が石窟で「先皇の明蹤を覽，盛聖の麗迹を觀」たことを挙げる。中田は「先帝孝文帝の造窟事業の壮大さ」「宣武帝がその偉業を承けてさらに造宮を進めている盛況」と解し，孝文帝崩御翌年の景明元年（500）に宣武帝が先帝とその妃高氏のために龍門石窟の造宮を行っている（魏書『釈老志』所説の，賓陽三洞造宮に連なる事業をさす）ので，楊大眼もこれに協賛して孝文帝のために造像した，と推測する。張雯2012は大眼らをして「泫然流感」せしめた「明蹤」「麗迹」がともに孝文帝が主体となって行われた事業に照応し，かつそれが古陽洞奥壁三尊像にあたるとの見解を示すが，「盛聖」は宣武帝とみるのが穏当だろう。当該箇所解釈は北魏主要窟の造宮経過全体の理解を左右する重要な論点といえ，総合的な検討が必要である。（稲本）

大覺去塵有生謂
絕尋利慶形則應
合无方昇岸由源
思儀本是以此丘
道匠佳与妙目今
悟盡性竭已成心
造像六區上為皇
更隆三寶無點顧
師僧父母魂与神
遊宿与慈會身終
百六視範三滄動
不遠於如来有氣
者咸贊来崇

9. 比丘道匠造像記

9 比丘道匠造像記

北魏 無年月 古陽洞（第1443窟）N78・79・80等5龕

【著録】

録文681, 碑刻2229, 人文研 DB・NAN0712A

目録1717（補正17, 關表上11, 大村195, 沙畹1670, 趙錄2, 汪録6, 王目, 繆目2, 方筆, 調表, 石言）

【釈文】

大覺^{*1}去塵, 有生謂／絶。尋刊處^{*2}形, 則應／合无^{*3}方。昇峯^{*4}由源, ／思果^{*5}依本。是以比丘／道匠, 住^{*6}与^{*7}妙因, 今／悟盡性。竭已^{*8}成^{*9}心, ／造像六區。上為皇／道^{*10}更隆。三寶^{*11}無點^{*12}。願／師僧父母, 魂与神／遊, 宿与慈會, 身終／百六, 視絶三塗, 動／不遠於如来, 有氣／者, 咸資来業。

【校勘】

- *1 「覺」録文・碑刻「覺」。
- *2 「刊處」録文・碑刻に言及ないが、補正、中田1974等の指摘どおり二字の間に返り点（レ点）の存在が認められ、訓読はこれにしたがう。
- *3 「无」碑刻「無」。
- *4 「峯」碑刻「峰」。
- *5 「果」小字で「思」と「依」の間に刻す。
- *6 「住」補正・中田1974等の「往」の意に解する。
- *7 「与」録文・碑刻「與」。以下同じ。
- *8 「已」録文「己」。
- *9 「成」補正・沙畹・中田1974等の所説どおり「誠」の省体。
- *10 「道」「更」の右上に小字で刻す。
- *11 「寶」録文・碑刻「寶」。
- *12 「點」補正は「玷」の通仮とする。

【訓読】

大覺 塵を去り, 有生 絶を謂う。処を尋ねて形を刊めば, 則ち応に無方に合すべし。峯に昇り源に由り, 果を思ひ本に依る。是を以て比丘道匠, 住（往）に妙因を与にし, 今 尽性を悟り, 已（己）の成（誠）心を竭くし, 像六区を造る。上は皇道の更隆, 三宝の点（けが）るるなきが為にす。願わくは師僧父母, 魂は神と遊び, 宿に慈と会し, 身は百六を終え, 視は三塗を絶ち, 動もすれば如来より遠ざからず, 有気の者, 咸な来業に資せんことを。

【解説】

古陽洞北壁第3層の上, 頂部に続く千仏龕のほぼ中央に位置する交脚菩薩龕（N78。高133cm, 幅90cm）の左, 中国式服制の二仏並坐像を入れた龕（N79。高50cm, 幅45cm）の下に位置する。高22cm, 幅46cmをはかり, 全13行, 各行7字（ただし脱字を補う行あり）で刻される。

本造像記は同治（1862～1874）以前の書物に記載がなく, 南壁に刻まれた同治九年（1870）「選龍門十品」（録文1020, 碑刻2337, 目録833「燕山徳林等題記」）の列举する十種に「大覺」としてみえるの



が初出と推測される。当時と現在を比べると、第2行の「絶」字の「色」の上部にやや変化が認められる（以上、清原1997）。

二仏並坐龕（N79）と一体をなしており、この龕に関係する造像記であることは明白だが、文中には「六区」とあって、周辺のどの造像に対応するかが問題となる。劉景龍1997は「区」を「主仏を意味するのでその他の脇侍などは入らない」とし、①交脚菩薩龕（N78）、②二仏並坐龕（N79）、③題記下右の坐仏龕（N80）、④倚坐仏龕（番号なし）、⑤その下の坐仏龕（同）を併せて「六区」とみなす。水野・長広1941、中田1974は「題記上方にある本尊は二尊であるが」「題記の下部になお大小四尊があるので、あるいはこれを含めて6体」（中田1974）とする。ここでもこれにしたがう。

無紀年であるが中田1974の指摘どおり、景明三年（502）の「高樹解伯都三十二人等造像記（龍門二十品12）」、太和二十年（496）の「一弗造像記（龍門二十品2）」と位置が近く、ほぼこれに近接した時期とみて問題ない。

比丘道匠については不詳だが、このような大型の区画の統括を行っていることから、古陽洞における初期造像で一定の影響をもつ僧だったと推定できる。ただなぜ大小まちまちの仏龕群に個人名義を付したのか、その理由は判然としない。（稲本）

晉
太守護軍長史雲陽伯鄭長猷為上父敬造彌勒像一
軀鄭長猷為母皇甫敬造
一軀鄭長猷為
上兄士猷敬造彌勒像一軀
一軀鄭南陽妾陳王女為上母
徐敬造彌勒像一軀
景明二年九月三日誠訖

10. 前南陽太守護軍長史雲陽伯鄭長猷造像記

10 前南陽太守護軍長史雲陽伯鄭長猷造像記

北魏 景明二年（五〇一）九月三日 古陽洞（第1443窟）D142・143・156・157

【著録】

録文582，碑刻2520，人文研 DB・NAN0055X，NAN0712D

目録10（補正12，關表上1，大村191，沙畹1603，孫録2，趙録2，楊録2，楊圖3，王目，繆目2，吳録6，吳目9，方筆，調表，石言）

【釈文】

前^{*1} 太^{*2}守護軍長史雲陽伯／長^{*3}猷，為亡父敬造弥勒像一。／一^{*4}軀鄭長猷
為母皇甫敬造／弥勒像一軀^{*5}。一軀鄭長猷為／亡兒士龍敬造弥勒像一軀^{*6}。／一軀鄭
南陽妾陳王^{*7}女，為亡母／徐^{*8}敬造弥勒像一軀。／景明二年九月三日誠訖。

【校勘】

*1 「前」原石は文字の上半のみ刻する。

*2 「太」この前に2字分の空格がある。補正・中田1974は欠損と考え「南陽」の2字を補うが，原石の状態からみて当初より刻字なし。

*3 「長」録文・碑刻はこの前の1字を空格とする。補正（未読）・中田1974（「鄭」を補う）は欠損とみるが，当初より刻字なし。

*4 「一」録文・碑刻，この前の1字を空格とする。中田1974は欠損と考え「軀」を補うが，当初より刻字なし。

*5 *6 「一軀」後の「一軀」との間に空格がある。

*7 「王」碑刻「玉」は誤り。

*8 「徐」録文・碑刻「徐」。補正・大村にしたがう。

【訓読】

前の 太守・護軍長史・雲陽伯の長猷，亡父の為に敬んで弥勒像一を造る。一軀，鄭長猷，母皇甫の為に敬んで弥勒像一軀を造る。一軀，鄭長猷，亡兒士龍の為に敬んで弥勒像一軀を造る。一軀，鄭南陽の妾の陳王女，亡母徐（徐）の為に敬んで弥勒像一軀を造る。景明二年九月三日，誠（成）し訖る。

【解説】

古陽洞の洞口南側上方，頂部近くに位置する造像記で，高さ50cm，幅35cmをはかる。銘文は周囲の壁面から一段低く作られた長方形の区画に8行にわたり，各行12字で刻まれる。最初の著録は呉式芬（1796～1856）『金石彙目分編』（呉目）で，採拓は道光以降まで下る。王壯弘1981は第7行「敬造弥勒像一軀」の「軀」の偏が刻されていないものを重刻本とみなすが，これは洗石補刀以前の古い拓本であり，現状はその後の処置で文字がより明確になっている（以上，清原1997）。

文面は非常に簡素で，鄭長猷による亡父，母皇甫氏，亡兒士龍の為の，及び長猷の妾陳王女による亡母徐氏の為の，弥勒像制作についてのみ述べる。このうち母皇甫氏のみ「亡」の字が付されない。最初の弥勒像の後が「一」とのみ記されて続く文字が空白であること，その後三度反復される「○○為○○敬造弥勒像」の前後に「一軀」の文言があることは甚だ不可解だが，水野・長広1941は題名を「北魏護軍長史雲陽伯鄭長猷等造弥勒像四軀記」としており，中田1974も4軀の造像を述べたものと解している。

この造像記の西にはサイズ・形式ともほぼ同一規格の6つの交脚菩薩三尊龕が横2列、縦3列に整然と並んでおり、同時の作である可能性が高い。劉景龍1997は「書かれている造像龕の数は実際の数と一致している」として、造像記が6龕全てに対応すると考える。しかし文面を見る限り、やはり言及されているのは4軀の弥勒像のみと考える方が無難であろう。中田は文章が不完全であるとし、「一軀」の二字が数回重出する要因を稚拙さゆえと解する。その理由はともかく、本造像記の上方にはこれと同じ幅、同じ高さの平面をもつ未刻の銘区が2小龕を挟んで存在し、その下辺は6龕中、上の2龕と一続きをなす。この点も考慮して、ここでは6龕が上2龕と下4龕の二群に分かれ、造像記は後者のみに対応するとの見解を採用する。なお上記2小龕のうち左の交脚菩薩三尊龕(D141)は破損するが、右の坐仏龕(D140)は下部に題記があり、陸増祥『八瓊室金石補正』(補正)巻13が「那龍姫題字」として採録する(録文913, 碑刻2525)。

鄭長猷は『魏書』巻55劉芳伝に付伝される鄭演の子で、造像記の「亡父」が鄭演である。伝には長猷の子についても記載があるが、登場するのは廓・元休・憑の三男のみで、造像記にいう「士龍」はみえない。補正は早世したと解する。鄭演は滎陽の人で、顯祖(献文帝, 在位465~471)の初めに宮廷に出仕するに至り、功あって冠軍將軍、彭城太守、洛陽侯に除せられた。後に太中大夫を拝し、爵を雲陽伯に改めた。没後幽州刺史を追贈され、諡は懿という。その子孫は彭・泗に居を構えた。

父の功績によって仕官した長猷は寧遠將軍、東平太守を拝した。ついで沛郡(楚州の領郡十二の一。『魏書』地形志)に転じて南主客郎中、太尉属となり、父の爵を襲い雲陽伯となった。その後孝文帝が太和二十一年(497)八月に南伐に赴き、翌九月に宛城を攻略(『魏書』巻7下・高祖紀)した際、長猷は南陽郡(『魏書』地形志・荊州)の太守に任ぜられた。帝は帰還にあたり長猷に(及鑾輿將反, 詔長猷曰)「昔曹公克荊州, 留滿寵於後。朕今委卿此郡, 兼統戎馬, 非直綏初附, 以捍城相托」という言葉を賜ったほか、特に縑二百匹を与えており、信頼のほどがうかがえる。高祖紀には翌二十二年二月に帝が宛の北城に進攻してこれを抜き、南齊の冠軍將軍・南陽太守房伯玉を捕縛したとの記事もある。

太和二十三年(499)三月、孝文帝は再び南伐に出征したが翌四月に「南陽」で崩じ、五月に長陵に埋葬された。皇后馮氏(幽皇后。馮熙の女、文明太后の姪、孝文廢皇后馮氏の姉)の殺害、太子元恪を魯陽(現・河南省魯山県)で即位させること、北海王元詳、王肅、広陽王元嘉、宋弁、咸陽王元禧、任城王元澄の6人による帝の補佐等を命じる遺詔に従い、宣武帝を頂点とする新体制が発足した。新帝は四月に魯陽で即位、天下に大赦を行った。

長猷に関しては、『魏書』の伝が南陽太守拜命に関する記事のあと「高祖崩於南陽, 斂於其郡」と続けることから太守在任中、帝の遺体の管理・奉送などの局面で重責を担ったと推定できる。孝文帝崩御をうけ、長猷は護軍長史に任ぜられた。(南陽)太守, 護軍長史, 雲陽伯, ここまでが造像記と伝、双方に出る称号である。ついで伝は世宗(宣武帝)初年の「寿春の帰款(内通)」及び「給事黃門侍郎」を兼ねたことを記し、長猷に何らかの手柄があったことを示唆する。この記事は景明元年(500)二月、楊大眼らが寿春に南齊の豫州刺史・裴叔業を攻略し、帰服に至らしめた戦役に対応する。長猷は種々の官職を歴任したのち諫議大夫(従四品), 司徒諮議(四品)を経て最終的に通直散騎常侍(四品)の地位につき、永平五年(512)に没して貞侯と諡された。(稲本)

色子像

色主中散大夫
榮陽太守孫道務
子榮茂奏龍連槐獨

天伐太和七年新城縣功准那程道起孫龍保衛伯介孫祖德衛看劉保韓買實念
 功曹孫秋生新城縣功准那夏侯文德孫洪龍王洪哲孫洪保夏侯父度王洛州張龍圖董洪陪王
 起祖二百人等准那高伯生劉念祖程万宗衛榮方樊希子王和生和龍友邊伯龍諸
 敬造石像一區額國准那孫鳳起夏侯父成劉靈鳳楊佰醜衛天念衛靈劉韓機王貴歡子貴万壽
 准那王承一耶老胡孫頑孫豐書衛國標劉仲起高州齊眾祖明華山國
 子榮茂奏龍連槐獨准那賈道柱孫鐵敦孫道萬珣國孫陽高天保高泰王天受楊始宗高合
 秀蘭撥鼓額於昌年金准那馮靈莊李定龍龍標魏助魯伏耶耶靈潤董雀王洛都董万及李文禮
 暉誕照於聖歲現世卷准那傳定吉孫狗孫龍起吳龍霞吳什孫万洛州尹父遠田父安王共及楊万
 屬萬福雲歸洙輪疊駕准那衛方晉孫天放趙光祖姜龍起姜清龍趙天與楊榮祖趙珣伯諸葛磨介
 元世父母及弟子等来准那朱法興司馬雙狼顯明倉景珣王父才陶靈珣陶晉國許靈書王後
 身神騰九空迹登十地准那孫倭伯孫壽之孫石荷道成杜万歲趙祖歡宋小才張万度劉道義宋伊
 五道群生咸同此願准那朱安玄上官梨上官毛郎衛賈者生孫黑不貴龍圖董雙王董佰壽
 孟廣達文蕭顯慶書准那東祖近僕董伯初景明三年歲在壬午五月戊子朔廿七日造

11. 孫秋生劉起祖二百人等造像記

11 孫秋生劉起祖二百人等造像記

北魏 景明三年（502）五月二十七日 古陽洞（第1443窟）S106

【著錄】

錄文583，碑刻2296，人文研 DB·NAN0058X，NAN0712L

目錄12（萃編27，補正12，大村193，沙畹1605，畢記1，錢目1，洪記2，王目，趙目1，吳目9，方筆，調表，石言，羅錄，劉錄3·7）

【釈文】

題額：邑子像（中央）

邑主中散大夫／榮^{*1}陽太守孫道務（左）

寧遠將軍中散大／夫潁川太守安城／令衛白犢（右）

大代^{*2}太和七年，新城縣／功曹孫秋生，新城縣功／曹劉起祖二百人等／敬造石像一區。
願國祚／永隆，三寶弥顯，有願弟／子等，榮茂春葩，庭槐獨／秀，蘭條鼓馥於昌年，
金／暉誕照於聖歲。現世眷／属，萬福雲歸，洙輪疊駕，／元世父母及弟子等，来／身
神騰九空，迹登十地。／五道群生，咸同此願。／孟廣達文，蕭顯慶書。

唯那程道起。孫龍保。衛伯^{*3}爾。孫祖德。衛辰。劉俱^{*4}。韓買。賈念。趙^{*5}□□。
高雙。高後進。／唯那夏侯文德。孫洪龍。王洪哲。孫洪保。夏侯文度。王洛州。張龍
鳳。董洪略^{*6}。王醜。／唯那高伯生。劉念祖。程万^{*7}宗。衛榮方。樊虎子。王馬^{*8}
生。和龍度。邊伯熾。諸葛願德。／唯那孫鳳起。夏侯文成。劉靈鳳。楊伯醜。衛天念。
衛靈虬^{*9}。韓橡生^{*10}。賈款子。賈万壽。／唯那吳靈^{*11}。劉曇^{*12}樂。夏侯三郎。王樂
祖。劉仲起。高叔齊。寇^{*13}祖听。輦^{*14}山國。趙道榮。／唯那王承^{*15}。郭毛^{*16}胡。孫
頑。孫豐書。衛國標。高□^{*17}紹。馬佰遺。高玠保。方豫州。張花。／唯那賈道柱。孫
鐵懃^{*18}。孫道。高玠國。孫陽。高天保。高叅。王天愛。楊始宗。高念。孫策^{*19}。／
唯^{*20}那馮靈恭。李定。趙龍標。魏靈助。魯伏敬。郭靈淵。董雀。王洛都。董万^{*21}度。
李文檀。／唯那傅^{*22}定香。孫豹^{*23}。孫龍起。吳^{*24}龍震。吳仲孫。方^{*25}洛州。尹文遠。
田文安。毛洪秀。楊方。／唯那衛方意。孫天敬。趙光祖。姜龍起。姜清龍。趙天俱^{*26}。
楊榮祖。趙玠伯。諸葛磨尔。／唯那朱法興。司馬雙。張顯明^{*27}。倉景玠。王文才。陶
靈玠。陶晉國。許靈壽。王拔。張雙。／唯那董光祖。衛僧顯。劉洪慶。高及祖。李虎
子。录祖憐。趙醜奴。王龍起。王雙。劉洛。／唯那孫侯伯。孫壽之。孫石。荷道成。
杜万歲。趙祖歡。宋小才。張万度。劉道義。宋俱。／唯那朱安盛。上莒^{*28}犁。上官
毛^{*29}郎。衛勝。賈苟生。麻黑奴。賈龍淵。賈雙王。董伯壽^{*30}／唯那来祖香^{*31}。解



廷*³²儁。董伯*³³初。臣*³⁴景明三年，歲在壬午，五月戊子朔廿七日，造訖。

【校勘】

- * 1 「榮」碑刻「榮」。文意を通じるのは「榮」だが、「榮」とは別字。中田1974は「榮」に翻刻の上、「榮」と注記。
- * 2 「代」碑刻「伐」。温玉成1985は「伐」は「代」の筆誤とするが、新旧拓の対照に基づいて近年の補刀の結果「代」が「伐」に変貌したとみなす清原1997にしたがう。録文が「代」に作る一方で異体字とみなすのは要訂正。
- * 3 「伯」原石の旁は「日」。大村はこれにしたがいがい翻刻。録文「舊」。
- * 4 「俱」碑刻未読。
- * 5 「趙」碑刻「越」。
- * 6 「略」録文・碑刻「路」。録文校記「大村は昭」。中田1974により改める。
- * 7 「万」碑刻「萬」。「賈万壽」も同じ。
- * 8 「馬」録文・碑刻未読。中田1974により補う。
- * 9 「虬」録文「虬」，碑刻「刺」。
- * 10 「生」録文に「？」
- * 11 「靈」続く一字分，碑刻「□」とするが，空格とする録文にしたがう。
- * 12 「曇」碑刻「雲」。
- * 13 「寇」碑刻「冠」。
- * 14 「輦」録文「輩」。
- * 15 「承」続く一字分，諸本「□」とするが，空格とする録文にしたがう。
- * 16 「毛」録文校記「毛の字大村はママ，補正は老に作る，殆ど非なり」。
- * 17 「□」萃編・大村は「文」，中田1974は「齊？」と読むが，保留。
- * 18 「勲」碑刻「勤」。「勲」は「勤」の通仮。
- * 19 「策」碑刻「榮」。
- * 20 「唯」碑刻「準」。
- * 21 「万」碑刻「方」。
- * 22 「傳」録文「傳」。
- * 23 「豹」原石は偏と旁の間に「イ」，録文はこれにしたがう。録文校記はこの字を「不詳」とし，萃編はママ，大村は「勺」を「句」として翻刻することをいう。「豹」の異体字とする中田1974にしたがう。
- * 24 「吳」碑刻「毛」。
- * 25 「方」録文「万」。中田1974「万（方？）」。
- * 26 「俱」録文校記「萃編，大村による」。
- * 27 「明」録文・碑刻「明」。「景明」も同じ。
- * 28 「菅」録文，碑刻「官」。
- * 29 「毛」録文校記「萃編，大村は毛に作る，非なり」。
- * 30 「壽」続く区画に「一」の刻字ないしキズあり。録文・碑刻「一」。録文の句点は「賈雙。王董。伯壽一。」中田は「賈雙。王董伯。壽□。」。
- * 31 「香」録文校記「香解の二字は萃編，大村による」。
- * 32 「廷」録文，碑刻「延」。
- * 33 「伯」原石の旁は「日」。
- * 34 「臣」小字で刻され，録文は小字で翻刻。

【訓読】

邑子像（題額中央）

邑主・中散大夫・榮（榮）陽太守・孫道務（左）

寧遠將軍・中散大夫・潁川太守・安城令・衛白犢（右）

（上段）

大代太和七年，新城県の功曹の孫秋生，新城県の功曹の劉起祖二百人等，敬んで石像一区を造る。願わ

くは国祚は永えに隆く、三宝は弥よ顕れんことを。有願の弟子等、榮茂せる春葩のごとく、庭槐の独秀するがごとく、蘭櫟（条）馥を昌年に鼓し、金暉 誕（ここ）に聖歳を照らさんことを。現世の眷属、万福の雲帰し、洙（朱）輪の豊駕せんことを。元世の父母及び弟子等、来身は神 九空に騰がり、迹 十地に登らんことを。五道の群生、咸な此の願を共にせんことを。孟広達文、蕭顯慶書。

（下段）

※人名列举部分は略。

臣、景明三年、歳は壬午に在り、五月戊子の朔、廿七日、造り訖る。

【解説】

古陽洞南壁第3層の東から3番目に位置する大仏龕に付属する。龕の高さは254cm、幅154cm、深さ60cmで、禪定相の坐仏を中心に2体の菩薩像が侍立する。

造像記は高153cm、幅50cmで碑額、碑身の上半と下半、以上三部分に分けられる。交龍に囲まれた碑額の中央に大きく「邑子像」の3字、その左右に「邑主」の称号をもつ孫道務・衛白犢兩人の名をその官職とともに刻む。碑身上半には1行9字、13行で本文を刻し、新城県功曹の孫秋生・劉起祖ら二百人が造像を行った旨記す。下半には1行30字、15行にわたって「唯那」の肩書をもつ15人と肩書のない125人、総勢140人の人名が列举される。上半にいう「二百人」とは数が合わないが、全体として志を同じくした多数の信徒（邑義）で構成される団体（義邑）の造像という体裁をとっており、その龍門における最大級かつ最古級の事例である。本造像記における邑義の序列は上位から邑主・唯那・一般の邑子（肩書なし）となるが、本造像の中心的人物と目される孫・劉の両名は下半にもみえず、肩書はわからない。

拓本については下半第3行の「劉起祖」の「劉」、最終行の「来祖香」の「祖香」が残るものが旧拓とされる（『校碑隨筆』、中田1974）が、北京図書館所蔵の最旧拓では下半第9行の「吳仲孫」「方洛州」、最終行の「来祖香」「解延儒」が完存する。本造像記を最初に著録した書物は乾隆六年（1741）自序の黄叔璥『中州金石攷』で、採拓もこの頃始まったと目される。北京図書館本も乾隆年間の拓とみてよい（清原1997）。

本造像記は上半に「太和七年」の年紀がみえることから夙に注目を集めてきた。文字通り483年を指すのであれば、古陽洞そして龍門石窟最古の紀年となる（比丘慧成造像記〔龍門二十品3〕の年紀を太和二年=478とする説も一部にあるが、ここでは採らない）。一方で下半の末尾には「景明三年（502）九月廿七日」に「造り訖る」という文言がある。両者を隔てる19年に対する解釈はしばしば古陽洞の開鑿時期をめぐる問題とも結びつけられ、議論の対象となってきたが、諸説ある中で最も有力なのは当該造像の完成を502年、483年の年紀は造像団体の発足を示すとする見解（塚本1941、中田1974）である。比丘恵感為亡父母造弥勒像記（龍門二十品13）及び高樹等造像記（龍門二十品12）は、本造像記中にみえるのと全く同一の文を含む。両者はいずれも本造像記の景明三年（502）五月二十七日から、わずか3日後の日付（五月三十日）をもつ。また140人の邑義のうち高（文）紹、高天保、高珍保については、高樹等造像記の邑主高樹・唯那解伯都以下32人の邑義中にもその名を見出すことができ、同時に複数の義邑に参加していたことがわかる。また本造像記の文面は比丘慧成造像記及び魏靈藏造像記（龍門二十品6）と酷似しており、撰者「孟広達」は比丘慧成造像記の「孟達」と同人である可能性が高い。以上の事実は本龕が個別的に造られたのではなく、500年前後に古陽洞第3層周辺で整備されたこれら仏龕群と、造像から碑刻の完成に至るまでの過程を共有していたことを物語る。



なお中田1974は本造像記下半末行にみえる「臣」を、皇帝の崇仏に基づく造仏事業への協賛を示す文言とみなし、願文の選者・書人が厳選された要因もここに求められるという展望を述べる。本造像記は全体が同時期の撰述・刻銘と認めざるを得ないが、蕭顥慶の署名があるのは上半のみで、これと下半の文字はやや異なった印象を与える。上半で「萬」、下畔で「万」が使用されるなどの不統一も認められる。中田は上下の相違と同時に蕭氏の書としては願文のみ、あるいは願文は太和七年の書稿があった可能性に言及する。起草者を同じくし、類句も多い498年の比丘慧成造像記とは撰文から揮毫まで一連の事業だったとみなすのが穏当であり、そこに15年の年代幅を設ける太和七年書稿説には無理がある。とはいえ下半の書が筆者はともかくとして上半に比べ遜色があり、別に取り扱うべきという中田の指摘には留意が必要だろう。(稲本)

景明三年五月廿日邑主高樹唯那
解佰都世二人等造石像區願元世
父母及現世眷屬來身神騰九空迹
登十地三有同願高買奴高惡乎
王僧賢夏侯林宗高留祖魏洪度高
乞德高冬成左芝高安都高楚之高
郎胡司馬保解佰勳高文紹高天保
亲英芝盖芝王張芝光高南仁高雲
保高創高洛珎揚洪佰高思順鄧通
生高珎保孫山起障父建高天生

12 高樹解佰都三十二人等造像記

北魏 景明三年（502）五月三十日 古陽洞（第1443窟）N81

【著録】

録文585，碑刻1847，拓本 DB: NAN0060X，NAN0712C

目録14（補正12，關表上1，大村193，沙畹1606，孫録2，汪録，王目，繆目2，趙目1，吳録6，吳目9，方筆，調表，石言）

【釈文】

景明^{*1}三年，五月卅^{*2}日，邑主高樹，唯那／解佰都卅二人等，造石像一區^{*3}。願元世／父母及現世眷属^{*4}，來身神騰九空，迹／登十地。三有同願。^{*5}高買奴。高惡子。／王僧寶。夏侯林宗。高留祖。魏洪度。高／乞德。高文成。左芝。高安都。高楚之。高／郎胡。司馬保。解佰勛^{*6}。高文紹。高天保。／辛^{*7}英芝。盖^{*8}定王。張定光。高南征。高曇／保。高副。高洛珍^{*9}。楊洪佰。高思順。鄧通／生。高珍保。孫山起。薛文達。高天生。

【校勘】

- *1 「明」録文・碑刻「明」。
- *2 「卅」字形は「世」。下の「解佰都卅二人等」も同じ。
- *3 「一區」の2文字を1格に記入する。
- *4 「属」録文・碑刻「屬」。
- *5 願文の後に1字の空格がある。
- *6 「勛」録文「勳」とするが，碑刻にしたがう。
- *7 「辛」字形は「亲」に作り，碑刻は「親」とする。録文にしたがう。
- *8 「盖」碑刻「蓋」。
- *9 「珍」碑刻「珍」。下の「高珍保」の「珍」も同じ。

【訓読】

景明三年，五月三十日，邑主の高樹，唯那の解佰都，三十二人等，石像一区を造る。願わくは元世の父母，及び現世の眷属，来身は神九空に騰がり，迹十地に登らんことを。三有も願を同じうす。高買奴。高惡子。王僧宝。夏侯林宗。高留祖。魏洪度。高乞德。高文成。左芝。高安都。高楚之。高郎胡。司馬保。解佰勛。高文紹。高天保。辛英芝。盖定王。張定光。高南征。高曇保。高副。高洛珍。楊洪佰。高思順。鄧通生。高珍保。孫山起。薛文達。高天生。

【解説】

古陽洞北壁上層に位置する円拱龕で，太和二十年（496）一弗造像龕（龍門二十品2）の東側に隣接し，下に同年月日に造像された比丘惠感造像龕（龍門二十品13）がある。龕の高さ96cm，幅78cm，深さ13cm，禪定形の坐仏を主尊として左右に脇侍菩薩が侍立する。本尊の仏坐像と脇侍菩薩立像はいずれも古い西方式服制をとどめ，比丘惠感造像より古い相を示している。太和十九年の丘穆陵亮夫人尉

遲氏造像（龍門二十品1）や太和二十年一弗造像（同2）と同じ層位にあり、下の比丘惠感造像よりも先行して造像がはじまっていた可能性が高い。

龕の左下に長方形の造像銘があり、本文は10行、各行ほぼ14字である。願文の後に1字の空格があり、以下に造像者30人の名を列举する。これは邑主の高樹と唯那の解伯都をリーダーとする民間の信仰集団の造像であり、32人のうち高姓は17人を数え、その中の高文紹・高天保・高珍保は、本龕の3日前に造像された古陽洞南壁の景明三年五月二十七日の孫秋生劉起祖二百人等造像記（龍門二十品11）にも名を連ねている。しかも、死後未来の生活について願うところは孫秋生等造像記とほとんど同じであり、両文は同じ指導者の思想信仰から導かれていると塚本善隆（1941：215頁）は指摘し、高樹等32人の造像会員は孫秋生と同じ新城県、もしくは龍門に近い地域の人びとによって結成せられたものと推測する。一方、佐藤智水氏の教示によると、河北省涿州市で発見された景明四年（503）高伏徳等三百人造像記に記された供養者のうち高樹・高買奴・高思順の3人が本造像記と共通するという。高氏は幽州范陽郡涿県当陌村の豪族で、景明四年から正始元年（504）に相次いで造像した石彫が涿州市から3点出土し、また洛陽出土の傅姆王遺女墓誌によれば、その高雒陽に嫁いだ勃海郡陽信県出身の王遺女は、洛陽に出仕した後、正光二年（521）に83歳で没したことが記されている（佐藤智水2007）。幽州は洛陽から遠く離れているが、わずか1年の差で仏教造像に3人の名が共通してあらわれるのは、偶然とは考えがたい。

造像者に名を連ねる解伯都について、中田（1974：34頁）は太和年解伯達造像記（龍門二十品5）の解伯達と音が近く、同一人物であるかもしれないという。『魏書』官氏志によれば、解氏は解枇氏を改めた姓で、天興四年（401）に北魏に帰順した高車族の解枇部落に出自する（姚薇元1962：156頁）。

この造像者は名からみて全員が男性のようであり、官位や爵位をもつ者はひとりとしていない。確実に漢人といえるのは夏侯林宗ひとりである。（岡村）

京明三年五月一日比丘惠感為亡父
造像一區願國祚永隆三
廣劫師僧父
母眷屬與三
塗永求福鍾
覽集三有群
生成同此願
比丘法寧為亡父
造石像記

13. 比丘惠感造像記

13 比丘惠感造像記 北魏 景明三年（502）五月三十日 古陽洞（第1443窟）N135

【著録】

録文584, 碑刻1846, 人文研 DB・NAN0059X

目録13（補正12・13, 關表上1, 大村192, 沙畹1604, 孫録2, 朱記2, 楊圖3, 王目, 繆目2, 吳録6, 吳目9, 方筆, 調表, 石言, 羅録3-7）

【釈文】

景明^{*1}三年, 五／月 [卅]^{*2}日, 比丘／惠^{*3}感, 為亡父／母, 敬造弥勒／像一區。願國／祚永隆, 三／寶弥^{*4}顯。^{*5}／曠^{*6}劫^{*7}師僧・父／母・眷属, 与^{*8}三／塗永乖^{*9}, 福鍾／競集。三有群／生, 咸同此願。
比丘法寧^{*10}, 為亡父／母, 造石像一區。

【校勘】

- *1 「明」録文・碑刻「明」。
- *2 残画からみて録文・碑刻とも「卅」とする。直上の邑主高樹等三十二人造像記（龍門二十品12）と同年月日である。
- *3 「惠」録文・碑刻「惠」。
- *4 「弥」碑刻「彌」。
- *5 行末に1字の空格がある。
- *6 「曠」録文は「日」を偏ではなく冠に作り, それが是である。
- *7 「劫」碑刻「劫」。
- *8 「与」録文・碑刻「與」。
- *9 「乖」沙畹は「求」と釈し, 「救」の省体とするが, 録文・碑刻にしたがう。魏靈藏等造像記（龍門二十品6）でも「乖豪光東照之資」の句に同じ字があり, それも「乖」と「求」に字釈が二分している。
- *10 「比丘法寧」以下, 碑刻は採録せず。

【訓読】

景明三年, 五月 [三十] 日, 比丘惠感, 亡父母の為に, 敬みて弥勒像一区を造る。願わくは国祚永隆にして, 三宝弥いよ顕れんことを。曠劫の師僧・父母・眷属, 三塗（途）と永えに乖き, 福鍾競い集まらんことを。三有の群生も, 咸な此の願を同じうす。
比丘法寧, 亡父母の為に, 石像一区を造る。

【解説】

古陽洞北壁上層に位置する円拱龕で, 太和二十年（496）一弗造像龕（龍門二十品2）と同年月日に造像された邑主高樹等三十二人造像龕（龍門二十品12）の直下に位置している。龕の高さ100cm, 幅73cm, 深さ12cm, 交脚菩薩を本尊とし, 左右に菩薩が侍立している。

造像記は宝壇の中央に12行, 各行5字あるが, 交脚像の足を持ち上げる地天と下の二仏並坐龕の尖拱が銘区に食い込んでおり, 第6行目は1字下げて4字のみ, 第7行目の上下1字ずつ欠落して3字しかなく, 第8行末の「父」字が左に偏って刻まれている。

また, 宝壇の両端に一仏二菩薩の小龕があり, 右龕の坐仏は双領下垂式, 左龕の坐仏は通肩式に着衣



している。本造像記の末につづいて小さい字で「比丘法寧，為亡父母，造石像一区。」という造像記が刻まれ，録文584は「北魏比丘惠感造弥勒像記，并比丘法寧造石像記」として一連の造像記とするが，それは右の坐仏龕にともなう追刻であろう。もっとも，左の坐仏龕に造像記はないが，この両龕は比丘惠感の主龕と同時設計であった可能性は否定できない。

惠感の名がみえる造像記には，以下の4区があり，いずれも古陽洞に存在する（塚本善隆1942：215頁）。

- | | | | |
|---|-----------|---------------|-------|
| 1 | 景明三年（502） | 比丘惠感造像記 | 録文584 |
| 2 | 永平三年（510） | 道人惠感造釈迦文仏記 | 録文610 |
| 3 | 神亀二年（519） | 邑師惠感邑主孫念堂等造像記 | 録文635 |
| 4 | 神亀三年（520） | 邑師惠感邑主趙阿歛等造像記 | 録文642 |

また，補正に収録する

- | | | | |
|---|-----------|----------|-------|
| 5 | 景明元年（500） | 邑師惠□等造像記 | 録文836 |
|---|-----------|----------|-------|

も惠感の可能性がある。本造像記にみえる「敬造……像一区。願国祚永隆，三宝弥顕」という願文は，3日前に造像された孫秋生等二百人造像記（龍門二十品11）にみえ，何らかの関係が推測されるし，5の景明元年と3・4の神亀年間に惠感は邑師として民間の造像団体を指導していたことで共通する。しかも，国祚永隆を願うその願文のほか，2の道人惠感造仏記には「為皇帝」とあり，惠感が古陽洞の開鑿期に仏教を国家の永隆に結びつけて説いたことが知られる。このことから塚本は，古陽洞の開鑿を発願した比丘慧成の協力者として，また壁面の造像者であり，民間にそれを勧めた邑師として惠感が活動していたと推測している。（岡村）

景明三年八月十八日廣
川王祖母太妃侯為亡夫
侍中使持節征北大將軍
廣川王加具蘭汗造彌勒像
願令永絕苦因速成正覺

14. 廣川王祖母太妃侯造像記

14 広川王祖母太妃侯造像記

北魏 景明三年（502）八月十八日 古陽洞（第1443窟）D87

【著録】

録文588, 碑刻2272, 人文研 DB・NAN0063X, NAN0712B

目録17（補正12, 大村194, 沙畹1607, 汪録5, 王目, 繆目2, 呉録6, 呉目9, 方筆, 調表）

【釈文】

景明^{*1}三年八月十八日, 廣／川王祖母太妃侯, 為亡夫／侍中使^{*2}持節^{*3}征北大将^{*4}軍／廣川王賀蘭汗, 造弥勒像。／願令永絶苦因, 速成正覺。

【校勘】

*1 「明」録文・碑刻「明」。

*2 「使」録文・碑刻「使」。

*3 「節」録文「節」, 碑刻「節」。

*4 「将」録文・碑刻「將」。

【訓読】

景明三年八月十八日, 広川王の祖母太妃侯, 亡夫, 侍中・使持節・征北大將軍・広川王の賀蘭汗の為に, 弥勒像を造る。願わくは永えに苦因を断ち, 速やかに正覺を成ぜしめんことを。

【解説】

D87 龕は古陽洞窟頂の東南に位置する。龕の高さは100cm, 幅64cm, 深さ8cmで, 交脚菩薩像の左右に2体の菩薩像が侍立する。碑形を呈する本造像記は龕に接して南側（向かって左）にある。高さ70cm, 幅36cmで碑額と碑身からなり, 碑身に全5行, 各行10字で銘文が刻される。碑額には文字がない。造像記の文面は景明三年（502）八月十八日, 「広川王の祖母」たる太妃侯氏が, 亡き夫である「広川王賀蘭汗」の冥福を祈って弥勒像を造ったという簡素なものである。

D87 龕の北隣に位置する交脚菩薩龕（D88）は造像が粗彫のままで, 左側に別の銘区が確保されているともみられるが, 間に垂れる帷幕の下に両者を分かつ枠がないことなどから, ほぼ同時の作としてよい（ただし両龕の下辺は不揃いである）。確証はないものの本造像記を両龕に対応させる見解（劉景龍1997）にも, 一定の蓋然性を認めたい。

本造像記を最初に著録した『十二硯斎金石過眼録』（汪録）以来, 「賀蘭汗」は文成帝拓跋濬の三男で, 『魏書』卷20文成五王列伝にみえる拓跋略に比定されている。『魏書』高祖紀の記事によると, 皇帝（孝文帝拓跋宏）の叔である略は延興二年（472）十一月丁亥に広川王に封じられ, 太和四年（480）正月乙卯に薨じて莊と諡されたという。

略の没後広川王家はその子諧, 字は仲和が継承したが, 諧もまた太和十九年（495）五月己巳に薨じた（高祖本紀）。『魏書』『北史』の伝は孫の「靈道」が後を継いだことをごく簡略に記し, 以上3代を以て広川王家についての記事は終了するが, 正史の不備を補う注目すべき史料に洛陽出土の元煥墓誌がある（趙超1992: 168頁。塚本1941・中田1974）。元煥, 字は子昭は第4代の広川王となった人物で, 永

平元年（508）に宣武帝の勅命を受けて養子として同家に入り、孝昌元年（525）に21歳で薨じた。その出自について、墓誌は献文帝の曾孫、趙郡靈王元幹の次孫、給事黃門侍郎・使持節散騎常侍都督・相州諸軍事・中軍將軍・相州刺史の元譔の二男であると記す。

墓誌には広川王家の家系が詳述されており、拓跋略は「賀略汗」の名で登場する。その官爵について、正史の伝が「中都大官」のみを記すのに対し、本造像記は「侍中使持節征北大將軍」とする。『八瓊室金石補正』（補正）は後者が没後追贈された称号であるため史書では省略されたと推定するが、墓誌に「侍中征北大將軍中都大官、（又加）車騎大將軍広川莊王」という長大な肩書との整合性が問題となる。

墓誌は第3代広川王の名を「靈遵」、諡を「哀王」としており、この結果本造像記に二度みえる「広川王」のうち、最初のものに該当するのは502年の時点で同王だった「元靈遵」と確定できる。正史の名「靈道」、諡「悼王」はともに訂正を要し、その没年は元煥が王位に就いた508年の可能性が高い。また太妃侯氏についての記載もあり、父が侯石拔（出自は上谷侯氏とする）という名で、平南將軍・洛州刺史に封ぜられたことがわかる。

本造像の主目的は拓跋略の追善供養に存するが、薨去から22年余が経過している。息子の元譔も造像の7年前の495年にすでに薨じていたが、『魏書』広川王伝は、孝文帝の従兄弟にあたる元譔の死に際して、帝の周辺で葬送の制度や儀礼をめぐる重大な議論と決定がなされたことを詳述しており、遷都直後の北魏における漢化政策の動向を物語る。特に注目しておきたいのは夫婦の埋葬に関する規定で、元譔の場合、代京で先に薨じた広川王妃王氏との合葬をめぐり、「旧卑」と「新尊」の関係が問題となった。孝文帝の詔勅は遷洛した者は以後悉く邙山に埋葬し、旧都周辺（恒、代）に帰葬してはならないという原則を述べ、夫婦合葬については以下の如く規定している。

夫が先に北に葬られ、妻が南で没した場合は北への帰葬を認め、父を（洛陽の）母のもとへ移すことも認める。妻の墓が北にあり、夫が南で没した場合は、夫の北への追葬は認めないが、母を父のもとに移すことは認め、両者別葬することも任意とする（ただし戸が北地及び諸州に属する者については任意）。

洛陽にあった太妃侯氏にとって、この502年の造像は遠隔の地に葬られた夫を偲ぶ営為だったとしても不思議ではないが、侯氏の薨去の時期および埋葬の状況を語る史料は知られない。一方で奉為の対象に元譔夫妻が含まれていない理由については、譔が邙山に葬られたことが確実な点と関係する可能性も考慮される。

なお劉景龍・楊超傑1999のD87の解説が「碑刻」2272の文章を録さず、「賀蘭汗」の3字のみを記載しているのは訂正を要する。また劉景龍2001の附冊「碑刻題記録文」の「補遺」に「G053 賀蘭汗造像記」として「賀蘭汗」の三字を録するが、位置等未詳である。（稲本）

景明四年十月
 七日廣川王相
 母太妃侯自以
 流磨彌劫於法
 喻遠囑過像教
 身乘達士雖奉
 聯紫暉早頃片
 體孤育幼孫以
 結蕃固冰薄之
 心唯歸真壽今
 造彌勒像一區
 願此微因資潤
 神識現身永康
 月悟旨覺遠除

曠世無明愜崇
 又迄未來空宗
 妙果又願孫息
 迺年神志速就
 胤嗣繁昌慶光
 萬世帝祚永隆
 弘宣妙法賢愚
 未悟咸發菩提

國學官
 臣平乾虎
 為太妃
 廣川王教
 造釋迦
 牟尼像
 區

15. 廣川王祖母太妃侯造像記
 (附) 平乾虎造像記

15 広川王祖母太妃侯造像記

景明四年（503）十月七日 古陽洞（第1443窟）D99

【著録】

録文590，碑刻2273，人文研 DB・NAN0069X，NAN0712S

目録19（補正12，關表上1，大村193，沙畹1608，汪録5，王目，繆目2，吳録6，方筆，調表，石言，劉録3）

【釈文】

景明^{*1}四年十月／七日，廣川王祖／母太妃侯，自以／流歷弥^{*2}劫^{*3}，於法／喻遠，
囑^{*4}遇像教^{*5}，／身乖達士。雖奉／聯紫暉，早頃片／體，孤育幼孫，以／紹蕃國，
氷^{*6}薄之／心，唯歸真寂。今／造弥勒像一區。／願此微因，資潤／神識，現身永康，
／朗悟旨覺，遠除／曠世，無明愆業／，又延未來，空宗／妙果。又願孫息／延年，神
志速就，／胤嗣繁昌，慶光／万^{*9}世，帝祚永隆，／弘宣妙法，昏^{*10}愚／未悟，咸發菩
提。

【校勘】

*1 「明」録文・碑刻「明」。「無明愆業」も同じ。

*2 「弥」碑刻「彌」。

*3 「劫」碑刻「劫」。

*4 「囑」録文・碑刻「囑」。

*5 「教」録文「教」。

*6 「氷」碑刻「冰」。

*9 「万」碑刻「萬」。

*10 「昏」碑刻「昏」。

【訓読】

景明四年十月七日，広川王の祖母太妃侯自ら以えらく，流歴劫に弥り，法喻より遠ざかる。囑ま像教に遇うも，身は達士に乖く。紫暉に奉連すと雖も，早頃に片体となり，幼孫を孤育し，以て蕃（藩）国を紹ぎ，氷薄の心，唯だ真寂に帰するのみ。今弥勒像一区を造る。願はくは此の微因，資て神識を潤し，現身永康にして旨覺を朗悟し，遠く曠世に無明の愆（悩）業を除き，又た未来に空宗の妙果を延べんことを。又た願わくは孫息延年し，神志速やかに就り，胤嗣繁昌し，慶万世に光らんことを。帝祚永隆にして，妙法を弘宣し，昏（昏）愚未悟をして，咸な菩提を發せしめんことを。

【解説】

D99 龕は古陽洞窟頂の東北に位置する。高さは110cm，幅80cm，奥行10cmで，主尊の交脚菩薩像の両側に各一体の菩薩像が侍立する。景明4年（503）の年紀をもつ造像記は龕の下部，横に長い方形の区画に1行6字，22行にわたって刻されており，縦24.7cm，横79.1cmをはかる。前年に供養された広川王祖母太妃侯為亡夫賀蘭汗造像龕（龍門二十品14に対応）と同じく太妃侯氏を願主とする造像で，



両龕は約1m隔たっている。侯氏は文成帝の三男で初代広川王に封ぜられた拓跋略（賀蘭汗・賀略汗）の妃であり、本造像銘にいう「広川王」も夫妻の孫・元霊遵にあたる。

「広川王祖母太妃侯造像記」（龍門二十品14。通称・賀蘭汗造像記）の項でも述べたとおり、霊遵は父元諧を495年に、母王氏をそれよりさらに以前になくしており、造像当時は祖母である太妃侯氏の庇護下にあった。侯氏の一人称で綴られた美文調の造像記には、皇室に連なる身分となったものの若くして夫に先立たれ、息子夫妻も不在となったいま、一人で幼い孫を養育して広川王家を維持しているが薄氷を踏むかのように心細く、ひたすら仏道に帰依するという心情が吐露されている。本造像記も本尊すなわち交脚菩薩の尊名を弥勒と明示し、自身の健康と現世及び来世における仏道の成就、孫の長寿と子孫の繁栄、皇室の安泰とそのもとでの仏法の興隆、迷える衆生すべての発心、などが造像の功德によってもたらされるよう祈念している。文中に明示されているわけではないが、孫の元霊遵が病気だったとする解釈（劉景龍1997）もある。

本造像記の右側（向かって左側）に隣接して「平乾虎造像記」が刻されている。7行23字からなるこの造像記は国学官令の平乾虎が「太妃広川王」のために釈迦牟尼仏を造立した旨述べており、その上に位置する禪定の小坐仏龕（D97）に対応するが、清朝以来しばしば「太妃侯造像記」と一体をなすと解され、両者の拓本を1枚の用紙に同時に採取した事例も少なくない。汪鋈『十二硯齋金石過眼録』（汪録）は両者をまとめて「平乾虎造像記」と命名する一方、「賀蘭汗造像記」の方を「侯太妃造像記」の名で採録するが、この現象もかかる拓本の流布のあり方と関係があろう。D99の周囲にはほぼ同形同大の禪定坐仏を容れた尖拱龕が並んでいる。右下に位置するD97はその一つであるが、左上のD101にも国常侍の王神秀が「太妃広川王」の為に釈迦像を造ったという造像銘（録文912，目録1009，碑刻2274），その上のD100にも「太妃」の2字が刻されており、いずれも同時の作とみて問題ない。古陽洞窟頂部に一定の面積を占めるこの区画で、侯氏とその周囲の人々が集団的な造像活動を展開していた様子がうかがえる。

元霊遵の両親すなわち元諧と妃王氏の埋葬をめぐる議論については「賀蘭汗造像記」の項で述べたとおりだが、王氏の父で霊遵にとっては外祖父にあたる人物が文明太后馮氏の寵臣・王叡（睿，434～481）で、『魏書』巻93・『北史』巻92に立伝されている。伝はその一族を太原王氏とし、父王橋は太武帝の涼州平定（439年）に際して平城に移住したという。王叡の事績中特に注目すべきものに、太和五年（480）に発生した沙門法秀による反乱の鎮定がある。この事件では中山など河北各地を巡幸中の孝文帝の留守を狙って政府の転覆が企てられたが、叡はみごとに事態を収拾し、千人以上が死刑を免れたという。

王叡は馮后と孝文帝から厚い信頼を寄せられ、48歳で没した際には両人が親臨して哀慟し、喪事は雲岡石窟及び永固陵の造営などを監督した宕昌公王遇すなわち鉗耳慶時によってとりしきられた。病床を訪れた孝文帝及び馮后に対し、王叡は「赦小罪，輕徭役，薄賦斂，修福業，禁淫祠」という言葉を以て治国の要を説いた。宗教政策においても「二聖」のブレンとして甚大な影響力を保っていたことが窺える。元諧の妃にして元霊遵の母たる王氏は叡が要人に嫁がせた子女の1人であり、孫にあたる霊遵の周囲で行われた造像，及び広川王一族をとりまく宗教的環境に，かかる理念（「修福業」）の影響が及んでいたとしても不思議はないであろう。（稲本）

（附） 平乾虎造像題記

北魏 無年月 古陽洞（第1443窟）D97



【著録】

録文911, 碑刻2281, 目録1791 (補正12, 關表上11, 趙録2, 王目, 繆目2, 調表, 石言, 劉録3)

【釈文】

國學官令／臣平乾虎^{*1}, ／為^{*2} 太妃／廣川王, 敬／造釋迦／牟尼像一／區。

【校勘】

*1 「虎」録文・碑刻「虎」。

*2 「為」後の「太」との間に空格あり。

【訓読】

国学官令, 臣, 平乾虎, 太妃広川王の為に, 敬んで釈迦牟尼像一区を造る。

夫抗音授澗美惡必酬振服依河
長短交目斯乃德音道俗水鏡古
今法生微逢孝文皇帝專心於三
寶又遇北海母子崇信於二京妙
演之際屢叨末筵一降淨心忝充
五戒思樹芥子庶幾須彌今為
孝文并莊海母子造像表情以申
接遇法生攝始王家身終夙霄締
敬歸功帝生万品衆生一切同福
魏景明四年十二月一日比丘法
生并文皇帝并北海王母子造

16 比丘法生造像記

北魏 景明四年（503）十二月一日

古陽洞（第1443窟）S66

【著録】

録文591，碑刻2299，人文研 DB・NAN0070X，NAN0712F

目録21（萃編27，補正12，關表上 2，大村194，沙畹1609，孫録 2，姚目 3，縣志59，楊録 2，王目，繆目 2，趙目 1，吳録 6，吳目 9，方筆，常録，調表，石言）

【釈文】

夫抗音投澗，美惡必酬，振服依河，／長短交目。斯乃德音道俗，水鏡古／今。法生
傲*¹逢*² 孝文皇帝專*³心於三／寶*⁴，又遇北海母子崇信於二京*⁵。妙／演之際，
屢叨末筵。一降淨心，忝充／五戒。思樹芥子，庶幾須弥。今為*⁶／孝文并北海母子，
造像表情，以申／接遇。法生構*⁷始，王家助終。夙霄*⁸締／敬，歸功帝王。万品衆生，
一切同福。／魏景明*⁹四年十二月一日，比丘法／生，為孝文皇帝并北海王母子造。
供養者列*⁵：清信士元寶意／清信士元善意／佛弟子北海王元伏榮／比丘僧隆／比丘僧
道／比丘尼明惠／比丘尼法真／□□□□□

【校勘】

- * 1 「傲」碑刻「傲」。
- * 2 「逢」続く「孝文」との間に空格。
- * 3 「專」録文・碑刻「專」。
- * 4 「寶」録文・碑刻「寶」。
- * 5 「京」録文・碑刻「京」。
- * 6 行末に 1 字分の空格あり。
- * 7 「構」碑刻「構」。
- * 8 「霄」は「宵」の仮借字で「夕」の意であり，「夙霄」は「夙昔」に同じ（補正）。
- * 9 「明」録文・碑刻「明」。
- * 10 録文未載。釈文は碑刻にしたがう。順序は向かって右から左へと読む。

【訓読】

夫れ音を抗げて澗に投ずれば，美惡必ず酬い，服を振いて河に依れば，長短交目するなり。斯れ乃ち徳は道俗に音^{ひび}き，水は古今を鏡す。法生 孝文皇帝の三宝に専心するに傲逢し，又た北海母子の二京（京）に崇信するに遇う。妙演の際，屢しば末筵を叨なくす。一たび淨心を降せば，五戒を充たすを忝なくす。芥子を樹ゆるを思いて，須弥を庶幾う。今，孝文並びに北海母子の為に，像を造りて情を表し，以て接遇を申ぶ。法生始めを構し，王家 終わりを助く。夙霄に敬を締び，功を帝王に帰す。万品の衆生，一切福を同じくせんことを。

魏・景明四年，十二月一日，比丘法生，孝文皇帝，並びに北海王母子の為に造る。

【解説】

古陽洞南壁第 3 層の東から 2 番目の大龕である。尖拱龕の高さ258cm，幅176cm，深さ54cm，本尊



は禪定形の仏坐像で、偏袒右肩に着衣し、脇侍の菩薩立像はX字状天衣をまとう。

宝壇の中央には造像銘が全11行、毎行13字に記されている。ただし、第3行は孝文皇帝の前に1字の空格があり、行末の一格に「於三」2字を詰め込んでいる。

宝壇の左には3人の比丘に先導された10人の供養者像が並び、榜題は前から2人目に「比丘僧道」、3人目に「比丘僧隆」、後続の大きくあらわされた貴人に「弟子北海王元伏榮」（勝村哲也1976はみずから入手した拓本によって「仏弟子北海王元伏□」と読む）とあり、2人の子供に「清信士元善意」、「清信士元宝意」とある。また、宝壇の右には3人の比丘尼に先導された供養者が10人あらわされ、先頭から「比丘尼明恵」・「比丘尼法真」・「□□□□□」の3人に榜題がある。

これら供養者像の榜題は近年の発見であり、李玉昆1998は、「伏榮」は北海王元詳の字、「善意」は河南王元和の字、「宝意」は北海王元詳の第二子頊の字とする。しかし、北海王元詳は『魏書』卷21上献文六王列伝・北海王詳伝と永平元年（508）十一月六日の「北海王元詳墓誌」（趙万里1956：図版181）ともに元詳の字は季予となっている。「伏榮」を字とする同時代の宗室には艾陵伯の元子華があるが（『魏書』卷14神元平文諸帝子孫列伝第二高涼王孤伝）、もとより北海王ではない。

つづく「元善意」に比定された元和は、『魏書』卷16道武七王列伝の河南王曜条によれば、和の字は善意で、河南王元鑒の兄であるが、太和中に沙門として出家していたため、元鑒が薨じた後、世宗のときに還俗して王位を継ぎ、正光四年（523）に薨じたという。しかし、河南王の第二子がここにあらわされている理由はわからない。「元伏榮」が北海王元詳であれば、むしろ第一子の元顥（字は子明、墓誌も同じ）に比定すべきであろう。

最後の「宝意」は、『魏書』によれば、元顥の弟の頊の字である。ただし、「魏故使節侍中太尉公尚書令驃騎大將軍都督雍華岐三州諸軍事雍州刺史東海王墓誌銘」（趙超1992：290-291頁）によれば、元頊の字は「幼明」であり、永安三年（530）七月二七日に29歳で薨じたという。本龕が造像された景明四年には3歳ぐらいであるから、年齢上では問題はない。

勝村哲也は、「元伏榮」は北海王元詳、「元善意」はその第一子の元顥、「元宝意」は第二子の元頊で、いずれも仏教的な法名を記したものであり、榜題のない先頭の比丘は、元詳一族に五戒を授けた法生自身ではないかと推測している。古陽洞北壁第2層の永平四年（511）安定王元燮造像龕（N246）の供養者列像にも「法訓王」・「法威王」・「法嵩王」、「弟子多宝」・「弟子伏寶」という榜題があり（録文619、碑刻1912）、造像銘との対比によって両龕の例とも法名の可能性が高い。

北海王元詳造像記（龍門二十品2）に解説したように、かれは太和九年（485）に北海王に封ぜられ、宣武帝の親政後も司徒・録尚書事の重役を担ったが、本龕造像の翌年、高肇の誣告により庶民に落とされ、幽閉の後、正始元年（504）六月十三日に29歳で暴死した。その後、永平元年（508）に復権して平王と諡され、孝文帝の長陵北山に埋葬された。

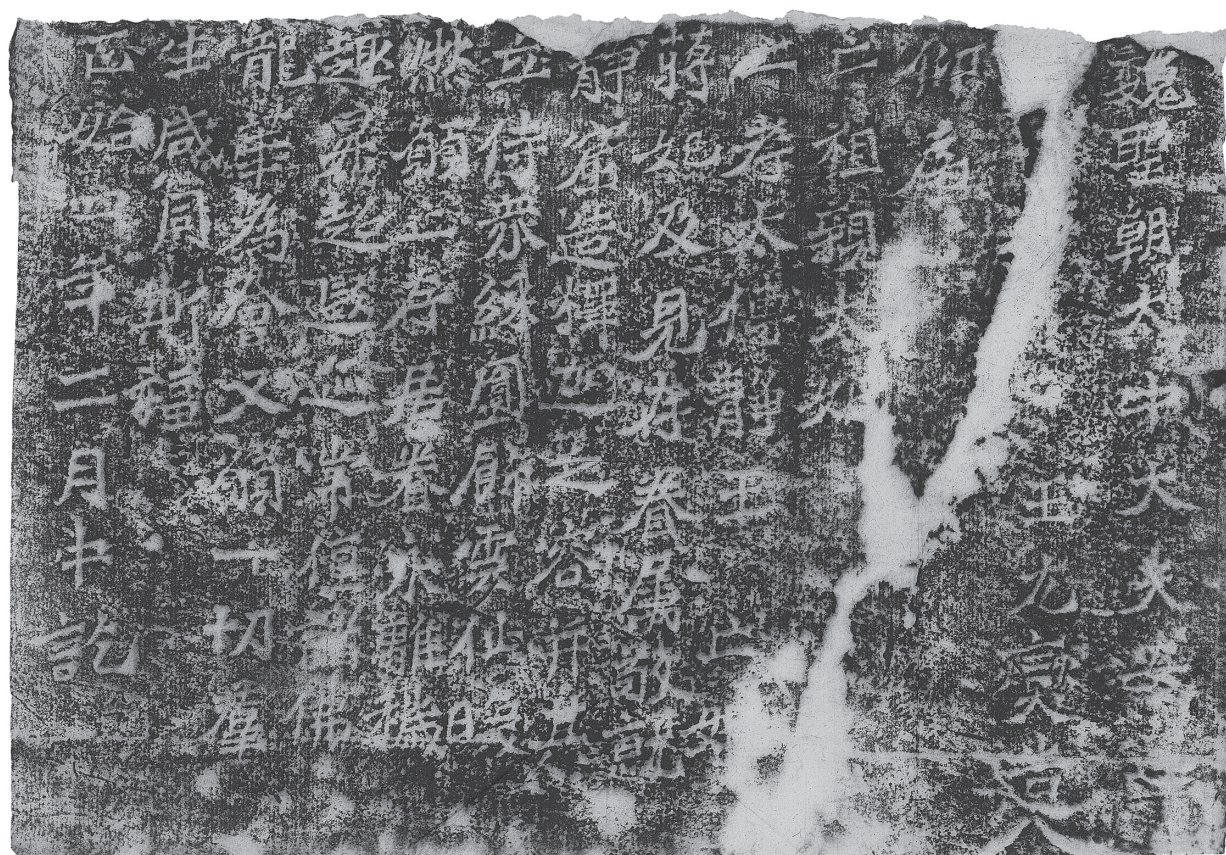
造像記にあるように、本龕は比丘法生が孝文帝と北海王母子のために発願し、北海王家の援助によって完成されたものである。孝文帝は499年に崩じており、本龕はその4年後の造像である。「孝文皇帝の三宝に専心するに慊逢し」、「北海母子の二京に崇信するに遇う」とあるから、比丘法生は平城時代より北海王家と深く関係し、現皇帝より孝文帝とのつながりが強かったのであろう。

造像主の比丘法生にかんしては、麦積山石窟の「法生」碑にみえる「沙弥法生」と同一人物か否かが問題になっている。この石碑は1953年に第127号窟内で発見され、馮国瑞は冒頭に「大魏」とあり、造像主が「沙弥法生俗姓劉，洛陽人也」とあることから、龍門の「比丘法生」と同一人物で、第127号窟の年代を正始・永平年間（504～512）とした。これに対して金維諾（岡田健詵1987）は、「法生」碑は近くの石窟から第127号窟に移設されたもので、その大きさ（残高45×幅38cm）が西魏末年ごろの第

109号窟の窟門上の凹み（高51×幅43cm）に合致し、その年に懸隔があることから、ふたりは別人と考えている。近年、この両説を受けて董広強²⁰¹⁰は、「法生」碑の仏像様式が516～540年で、碑文の「進不值釈迦初暉，退□蒙慈氏三会」が日本大谷大学所蔵北魏永熙二年（533）『宝卷經』卷上比丘惠愷題記の「前不及釈迦九会，後不經弥勒三唱」に類似することから、533±5年の造像とみなし、北魏が東西に分裂した534年、龍門の比丘法生が麦積山石窟に避難して造像したものと推測している。その年代論はいささか強引であるが、金維諾の論じたように、その様式は西魏に下る可能性が高く、龍門の比丘法生造像龕より30年あまり懸隔があることから、別人とみるのが妥当であろう。

この比丘法生造像龕とまったく同年月日に、北海王元詳のために造像されたのが古陽洞北壁第3層の比丘慧成造像龕の直上にある比丘慧樂造像龕（N105）である。高さ137×幅96cmの円拱龕に交脚菩薩の三尊像があり、左側に碑形の造像銘を配している。目録022に比丘慧樂造像記として掲載されるが、拓本もほとんど流布しなかったため、録文にはなく、塚本善隆らの注意にのぼることもなかった。近年、龍門石窟芸術研究院の調査によって、ようやく仏龕とその造像記の詳細が明らかになった（李玉昆1998、碑刻1850）。造像記は碑額に「弥勒佛像」とあり、全7行、毎行17字に記されている。ただし、第3行目の「造像一区」の「一区」は一格の中に2字を入れている。最後の2行に「魏景明四年十二月一日比丘慧樂為侍中・太傅・領司徒・録尚書事・北海王元詳造」とあり、『魏書』にみえる宣武帝時の官職が記されている。比丘法生造像龕とは同年月日の造像であり、字形は類似するものの、銘文の内容は異なっている。

この比丘慧樂造像龕の奥（西側）に太和十九年（495）の丘穆陵亮夫人尉遲氏造像龕（龍門二十品1）があり、その直上に太和二十二年（498）の北海王元詳造像龕がある。この3龕はいずれも交脚菩薩を本尊とする円拱龕で、碑形の造像記を左側に配し、大きさも近似しているが、本尊の服制は、年代の早い尉遲氏龕は西方式、ほかの2龕は漢式になっている。（岡村）



17. 太中大夫安定王元變造像記

17 太中大夫安定王元燮造像記

北魏 正始四年（507）二月十五日 古陽洞（第1443窟）W3

【著録】

録文599，碑刻2303，人文研 DB・NAN0086X，NAN0712I

目録33（補正13，關表上2，大村203，沙畹1617，洪記2，汪録5，王目，繆目2，吳録6，吳目9，方筆，調表，石言）

【釈文】

魏聖朝，太中大夫安定／王^{*1}元燮造。／仰為／亡祖，親太妃，亡考太傅靜^{*2}王，亡妣蔣妃，及見存眷屬^{*3}。敬就／靜窟，造釋迦之容，并其／立侍。衆綵圓飾，雲仙煥^{*4}／然。願亡存居眷，永離穢／趣，昇超遐迹，常值諸佛，／龍華為會。又願一切羣^{*5}／生，咸同斯福。／正始四年二月中訖。

【校勘】

- *1 録文は「王」の前を「□□□□□」とする。
- *2 「靜」録文・碑刻「靜」。「靜窟」も同じ。
- *3 「屬」録文・碑刻「屬」。
- *4 「煥」録文は「火」偏ではなく「日」偏に作り，碑刻は「口」偏に作る。
- *5 「羣」碑刻「群」。

【訓読】

魏の聖朝，太中大夫・安定王元燮 造る。仰いで亡祖，親太妃，亡考の太傅靜王，亡妣の蔣妃，及び現存の眷属の為に，敬みて靜窟に就き，釈迦の容，並びに其の立侍を造る。衆綵円飾し，雲仙煥然たり。願わくは亡存の居眷，永えに穢趣を離れ，遐迹に昇超し，常に諸仏に値い，龍華に会を為さんことを。又た願わくは一切の群生，咸な斯の福を共にせんことを。正始四年二月中に訖る。

【解説】

古陽洞の西壁と南壁との境，正面（西壁）本尊仏坐像の火焰光背の横に接し，右脇侍菩薩像の火焰光背の直上に位置している。その切り合い関係から，本龕の造像は石窟正壁本尊よりも後出する。本龕を含め，正壁三尊像の周囲には正始元年（504）～永平四年（511）までの仏龕が造像されていることから，正壁の本尊と脇侍像は景明末年もしくは正始初年の完成と考えられる（水野・長広1941：91頁）。

本龕は周囲の壁面を高さ140cm，幅113cm，深さ24cmに彫り込み，間口三間，木造瓦葺き入母屋造りの仏殿を造形し，その中に一佛二弟子二菩薩を配置している。本尊の坐佛は漢式の服制で，右手を挙げ，高い方座に結跏趺坐している。弟子の比丘像は2体とも浅い浮彫であらわされ，右側は老相，左側は若相である。三尊形式に老若2比丘を加える五尊形式は，龍門石窟賓陽中洞をはじめとする北魏後半期以降の典型的な尊像形式であり，これはその確実な最古の例である（石松日奈子2005：158頁）。

宝壇の中央に造像銘があり，全13行，毎行9字に記されるが，第2～第4行目は亀裂を避け，「亡祖親太妃」と「亡考太傅靜王」の擡頭改行のため，文字数が少ない。その左右には比丘／比丘尼1人に先



導された供養者列があり、大きくあらわされた貴人男性は2人、女性は3人である。

造像主の安定王元燮は、『魏書』巻19下景穆十二王列伝に立伝されている（塚本善隆1941：202頁）。父の安定王休は太子晃（恭宗景穆帝）と孟椒房との間に生まれた子で、皇興二年（468）、安定王に封ぜられ、孝文帝の信をえて太傅となり、太和十八年（494）、孝文帝の南征に大司馬として従軍したが、その年に病没し、靖王と諡せられた（造像記では「静王」に作る）。長子の安は幼年にて卒し、次子燮が王位を継ぎ、世宗宣武帝の初年に太中大夫となり、征虜將軍、華州刺史をへて幽州刺史となり、延昌四年（515）に薨じている。造像記に「亡祖」とあるのは景穆帝、「親太妃」は孟椒房、「亡考太伝静王」は父の安定王休、「亡妣蔣妃」は母の蔣妃である。

元燮は正始四年（507）二月に本龕を造像した4年あまり後、永平四年（511）十月には北壁第2層に交脚菩薩を本尊とする大龕（N246）を造像している（録文619、碑刻1912）。その造像記によって元燮が507～511年の間に征虜將軍・華州刺史に任じられたこと、正始四年龕と同じように祖父母と父母のために造像したこと、西壁の主要造像、正始四年龕、北壁第2層の永平四年龕の順に造像されたことがわかる。

この正始四年龕には男性供養者列像の上に名を刻んでおり、録文によれば、先頭の比丘に「比丘法智師」、つづく貴人に「法訓王」・「法威王」・「法嵩王」、「弟子多宝」・「弟子伏賓」とある。しかし、これらの俗名を誰に比定するのかは解決されていない。

安定王に関係する造像としては、年月不明だが、安定王為女夫閭散騎□造觀世音像二軀記（録文700）がある。塚本善隆（1941：202-203頁）は、安定王の女の夫たる閭散騎某が仏教に帰依した記念の造像で、閭散騎某は『北史』巻80外戚伝にみえる閭毗の一門と推測している。閭毗は代の蠕蠕人で（郁久閭氏）、世祖太武帝のときに来降し、その妹は太子晃（景穆帝）の妃となり、高宗文成帝の母となった（景穆恭皇后郁久閭氏）。閭氏は高宗の時代に外戚として、毗が河東王に、弟の紇が零陵王に封ぜられ、孝文帝の時代にも一門は榮華を誇ったという。（岡村）

夫玄宗皇帝起跡
 於扶境若不圖危
 相以義光儀爵聲
 保如軌將河以依
 帝至象歸神功奇
 村節替汪州詰軍
 事松虜將軍經州
 判中齊郡王祐體
 蔭宸儀天然滋茂
 達成肅之進途識
 真假之高韻精善
 惡二門明生滅之
 一理資福有由歸
 道無礙於是依雲
 山之連狀即林水
 之仙區咸神像於
 青山鏤禪形於玄
 石鑿度想於此津
 結嘉應於冥運乃
 任銘曰
 其玄極妙妙此宗
 靈風潛被神化真
 通再興為本廣有
 為功德由世重道
 以人鴻造觀淨境
 將純度此圖示泉
 石指至雲松
 三福日有度嘉應
 無窮
 興平二年七月廿
 五日

18. 齊郡王元祐造像記

18 齊郡王元祐造像記

熙平二年（517）七月二十日

古陽洞（第1443窟）S189

【著録】

録文633, 碑刻2313, 人文研 DB・NAN0169X, NAN07120

目録90（萃編28, 補正13, 關圖26, 關表上5, 大村215, 沙畹1643, 錢目1, 姚目3, 縣志59, 洪記2, 一跋4, 楊録2, 王目, 繆目2, 趙目1, 吳録6, 吳目9, 方筆, 常録, 調表, 石言, 劉録3）

【釈文】

夫玄宗沖^{*1}邈, 跡遠於塵關, 靈範崇虛, 理絕／於埃境。若不圖色相, 以表光儀, 尋聲教^{*2}, 以／陳妙軌。將^{*3}何以依希^{*4}至象^{*5}, 髣髴^{*6}神功者哉。／持節^{*7}督涇州諸軍事征虜將軍涇州刺史／齊郡王祐, 體蔭宸儀, 天縱淑茂, 達成實之／通途, 識真假之高韻。精善惡^{*8}二門, 明^{*9}生滅／之一理, 資福有由, 歸道無礙。於是依雲山／之逸狀, 即^{*10}林水之仙區, 啓神像於青山, 鏤／禪形於玄石, 締慶想於幽津, 結嘉應於冥／運。乃作銘曰。

芒芒^{*11}玄極, 眇眇幽宗。靈風潛被, 神化冥通。／舟輿為本, 曠^{*12}濟^{*13}為功。德由世重, 道以人鴻, ／超觀淨^{*14}境, 邈^{*15}絕塵^{*16}□^{*17}, 圖形泉石, 構^{*18}至^{*19}雲松。／□□□□, □□三^{*20}空。福田^{*21}有慶, 嘉應無窮。／熙^{*22}平二年七月廿日, ／造。

【校勘】

- *1 「沖」碑刻「冲」。
- *2 「教」録文「教」。
- *3 「將」録文・碑刻「將」。以下同じ。
- *4 「希」碑刻「稀」。
- *5 「象」碑刻「像」。中田1974は「像」の省体とする。
- *6 「髣髴」碑刻「仿佛」。
- *7 「節」録文「節」, 碑刻「節」。
- *8 「惡」萃編は刻字に際し「善惡之二門」の「之」が脱したと推定。
- *9 「明」録文・碑刻「明」。
- *10 「即」録文「即」。
- *11 「芒芒」碑刻「茫茫」。
- *12 「曠」録文・碑刻とも「日」を偏とするが原石では冠とする。
- *13 「濟」録文・碑刻「濟」。
- *14 「淨」録文・碑刻「淨」。
- *15 「邈」録文・碑刻・中田1974は「遐」とするが, 「北朝石刻資料選注（三）」（解説参照）により訂正。
- *16 「塵」碑刻「塵」は誤り。
- *17 「□」録文校記「補正は封」。
- *18 「構」録文「構」。
- *19 「至」萃編・中田1974・「北朝石刻資料選注（三）」は「至」と翻刻するが, 「室」の誤刻と推定。
- *20 「三」録文「？」を付す。
- *21 「福田」補正による「福周」への訂正は不要。
- *22 「熙」録文「熙」。

【訓読】

夫れ玄宗は冲邈として、跡は塵関より遠く、靈範は崇虚として、理は埃境を絶す。若し色相を図して以て光儀を表し、声教を尋ねて以て妙軌を陳べずんば、将た何を以てか至象に依希し、神功を髣髴する者ならんや。持節・督涇州刺史諸軍事・征虜將軍・涇州刺史・齊郡王祐、体は宸儀を蔭い、天は淑茂を縦にし、成実の通途に達し、真仮の高韻を識り、善惡の二門に精しく、生滅の一理に明るく、福に資するに由有り、道に帰するに礙げ無し。是に於いて雲山の逸状に依り、林水の仙区に即き、神像を青山に啓き、禪形を玄石に鏤み、慶想を幽津に締び、嘉応を冥運に結ぶ。乃ち銘を作して曰く。

芒芒たる玄極、眇眇たる幽宗。靈風は潜被するも、神化は冥通す。舟輿を本と為し、曠濟を功と為す。徳は世に由りて重く、道は人を以て鴻まる。浄境を超観し、塵□を邈絶す。形を泉石に図し、至を雲松に構う。□□□□、□□三空。福田に慶有り、嘉応は窮り無し。

熙平二年七月廿日、造る。

【解説】

古陽洞南壁第三層四大龕のうち最も奥にある坐仏三尊龕と、洞全体の本尊である奥壁（西壁）三尊の右脇侍の間に位置する。龕は高さ174cm、幅80cm、深さ31cmで、交脚菩薩像を中心に二体の菩薩像が侍立する。基壇中央におかれた造像記は高さ38cm、幅38cmの正方形で全16行、各16字で刻される。本文末尾に四字句を連ねた頌がおかれ、本格的な駢文の体裁を備えた作例として龍門の北魏造像銘中稀有の存在である。語句の出典・用例は「北朝石刻資料選注（三）」（『東方学報』88, 2013）所載の詳細な注釈に譲る。

基壇には造像記を挟んで左右に小さな楣拱龕（S194・195）があり、いずれも龕内に交脚菩薩の両側に二比丘・二菩薩を配した五尊像をあらわし、基部に供養者列像を刻する。主龕（S189）との関係は確言できないが両者は同型同大で、この二小龕については同時の作とみてよい。うちS195には造像記があり（録文727、碑刻2339）、法貴を初めとする尼僧グループの造立にかかる弥勒像とわかる。直下には本龕よりやや大きく、精緻な彫りで坐仏五尊像をあらわす楣拱龕（S206）がある。その向かって左下に坐仏を主尊とする小龕（S208）が位置し、S208は造像記（比丘恵珍造像記。録文632、碑刻2312）を伴う。この造像記の年紀はS189と同年（熙平2年=517年）で、南壁西端部の造像が整備された時期に指標を与える。一方でS189の直上の壁面は、未彫刻のまま残されている。

齊郡王元祐（488～519）は文成帝（在位452～465）の四男拓跋簡（元簡、460～499）の子である。元祐に関する正史の記載（『魏書』卷20文成五王列伝等）はごく僅かだが、出土した墓誌（趙超1992：107～8頁）から生涯の概略が知られる。正始二年（505）に驍驤將軍・通直散騎常侍、永平五年（512）には持節・都督・涇州諸軍事・征虜將軍・涇州刺史に除せられた（『魏書』には齊郡王以外の肩書として涇州刺史を挙げるのみ）。本造像記の文面及び墓誌のタイトルに付された祐の肩書は、512年に与えられたものに一致する。祐は神龜二年（519）正月六日に32歳で薨じ、使持節、平東將軍、冀州刺史を追贈され、二月二十三日に洛陽北邙に葬られた。諡は（齊郡）敬王。正史は祐の字を「伯援」とするが、墓誌にしたがい「伯援」に改めねばならない（中田1974等）。

祐の父簡は字を叔亮といい、太和五年（481）に齊郡王に封ぜられ、中都大官の位を与えられた。のちに内都大観となり、さらには太保に遷されている。墓誌（趙超1992：37頁）が出土しているが下部を欠き、文面がわかるのは一部のみである。簡の母沮渠夫人は沮渠牧犍（？～447）が李敬受（西涼の李暠：351～417の女）との間に儲けた女であり、簡は鮮卑・匈奴・漢族の混血児である。曾祖父は沮渠蒙遜（368～433）で、その出自は河西との関わりが深い。性質や風貌は外祖父の牧犍によく似ており、酒



を好むあまり「公私の事を理むる能わざ」るほどであったという。結局簡は妻常氏の努力もむなく断酒できぬまま太和二十三年（499）正月二十六日に薨じ、三月に邙山に葬られた。諡は当初靈王とされたが、宣武帝の時に順王に改められた。

雲岡開鑿を發願した文成帝直系の子孫であると同時に、崇仏君主だった沮渠氏の血を引く齊郡王家にとって、仏教及び造像が身近な存在だったことは容易に想像がつく。本造像記には「成実の通途に達し」という字句があり、塚本1941や中田1974はこれを元祐が精通した教理が『成実論』に基づくものだったのではないかと推測している。

関連して注目されるのは、『魏書』釈老志に孝文帝の同論に対する傾倒が特記されている点である。同志には太和十九年（495）年四月、徐州白塔寺（彭城）に行幸した際の帝の発言がみえる。帝はかつて同寺にあった僧嵩が羅什から『成実論』を伝授され、これが（僧）淵法師、道登及び慧紀へと継承された系譜、及び自身の成実論学習に言及しており、それ故にこの寺に至ったと述べる。北魏で活動した同寺ゆかりの成実学者としては曇度（?～489）、平城で講義を行った慧紀、帝と深く交わって頻繁に講論を行った道登（496卒）らの存在が知られる（湯用彤1983：362頁等）。少なくともこの用語については、5世紀末の北魏で顕在化する成実学派の隆盛を背景にもつ可能性を認めてよい。

本造像記を最初に著録した文献は錢大昕『潜研堂金石文跋尾』（錢跋）で、初拓が行われたのも乾隆年間とみてよい。王壯弘1981は第1行の「宗」が残るもの、14行「三空」の「空」の右上角が残るものを旧拓とするが、清原1997は前者が洗石補刀の結果今もよくみえること、後者については同治ころの拓とすることを指摘する。

本造像記を考える上で問題となるのは、全く同じ年紀と日付をもち、干支の表記の有無などを除けば文面もほぼ完全に一致する毎行13字本（目録・録文なし。碑刻1880，人文研DB・NAN0730X）の存在である。ただし13字本は、16字本に比して残存する字数が大幅に少ない。

最初に13字本を採録したのは、1915年に洛陽県知事の曾炳章が集成発行した『初拓龍門五十品』である（清原1997：261頁）。この「五十品」は二十品（16字本を含む）に新たに選定した三十品を加えたもので、13字本は三十品中に「齊郡王後造像記」の名で登場する。また関百益『伊闕石刻図表』（関表）は同名の「齊郡王造像」二種を挙げる。両者の関係について、一時は13字本が原刻、16字本が重刻という憶測（『八瓊室金石補正』）も出た。中田1974は明確にこれを否定するが、この時点では13字本の原石の所在は把握されていない。今日では13字本は古陽洞北壁第二層四大龕中、最も窟門側にある交脚菩薩龕（N317）の直下にあることが判明しており、同龕に対応する造像記とみてよい。長らく所在不明だった要因は、古陽洞窟門部にあった磚築のアーチ（撤去済）に隠されていたことに存する。20世紀初のご写真がその状況を物語る。したがって齊郡王元祐は古陽洞内の別の場所で、同年同日に全く同じ願意のもと、二つの交脚菩薩龕を供養したことになる。（稲本）

大魏神龜三年三月廿
日比丘尼慈香慧政造窟
一區記。夫空覺知虛非
體真遂其跡道達榮日表
常軌垂乃標義幽宋是以
渴法津應像管徵福形且達
生託頌躬願騰天身之境
速乃人思含觀法界無家
澤掘石亦真刻石八万延
及三從敢同其福

19. 比丘尼慈香慧政造窟記

19 比丘尼慈香慧政造窟記

北魏 神龜三年（520）三月二十□日 慈香洞（第660窟）

【著録】

録文640，碑刻934，人文研 DB・NAN0712N，NAN0712T，NAN0203X

目録21（補正13，關圖30，關表上 6・16，大村217，沙畹1647，趙録 2，楊録 2，汪録 6，楊圖 3，王目，繆目 2，吳録 6，吳目 9，方筆，常録，調表，石言）

【釈文】

大魏神龜三年三月廿□／日。比丘尼慈香・慧^{*1}政。造窟／一區記。✓^{*2}夫零覺弘虛。非／體。真遂其跡。道建^{*3}崇□^{*4}表／常軌^{*5}。無乃標美幽宗。是以仰／渴法津，應像營^{*6}微福形且遙，／生託煩躬。願騰无尋^{*7}之境，／逮及□恩，含閏法界，□蒙^{*8}／澤，楯^{*9}石成真，刊功八万^{*10}，延／及三從，敢同斯福。

【校勘】

- *1 「慧」碑刻「慈」は誤り。
- *2 「・」形の起句記号。
- *3 中田1974は「建」の「廼」を「廼」に作る。
- *4 録文未読，碑刻「日」。「日」偏のみで，旁は未刻である。
- *5 「軌」碑刻「範」。「軌」に「𠂔」を冠した異体字か。
- *6 「營」録文「夢」。中田1974は清の趙之謙『六朝別字記』にもとづいて「營」と釈す。
- *7 「尋」碑刻「礙」。「碍」の省体で，丘穆陵亮夫人造像記に「騰遊无礙之境」という類似句がある。
- *8 「□蒙」録文・碑刻未読。録文校記「沙畹は慈蒙二字」。
- *9 録文・碑刻は「扞」偏に作る。字書にない。
- *10 「万」碑刻「萬」。

【訓読】

大魏の神龜三年三月二十□日，比丘尼の慈香と慧政，窟一区を造るの記。

夫れ靈覺は弘虚にして体 非く，真は其の跡を遂くす。道の崇□より建め，常軌を表わすは，乃ち幽宗を標美する無からんや。是を以て法津を仰渴し，像に応じて微を営むも，福形且つ遙かにして，生を煩窮に託す。願わくは無碍の境に騰り，□恩に逮及し，閏（潤）いを法界に含み，□澤を蒙り，石を楯み真を成し，功を八万に刊み，延きて三從に及ぶまで，敢て斯の福を同じうせんことを。

【解説】

慈香洞は老龍洞の上方に位置する小型窟である。平面は隅丸長方形で，奥行き2.31 m，幅1.67 m，高さ1.74 m，前壁と窟門は崩壊し，天井はドーム形を呈する。

三壁設壇式の初期窟で，三仏六弟子六菩薩と六獅子を配する。正面（西壁）の本尊は禪定形の仏坐像で，頭光は蓮華文の外周に五層の同心円文と七仏がめぐり，火焰文の挙身光背がおおっている。その左右には維摩・文殊の対問像があり，維摩には 2 人 3 組，文殊には 28 人の供養比丘がともなっている。造窟記は壇の右下，石窟の西南隅にある。南壁の主尊は挙手形の交脚菩薩，北壁の主尊は挙手形の坐仏で，

いずれも頭光は西壁本尊と同じ文様構成である。脇侍の弟子はいずれも合掌し、菩薩は内側の手を挙げ、外側の手には宝珠形の持物を下げている。石窟の北東隅と南東隅には方格に区切られた千仏龕があり、24尊が残存する。天井の中央には大蓮華文があり、その周囲には飛天があらわされている。

この造窟記の所在について、曾炳章『龍門五十品目錄表』は路洞とし、録文は古陽洞としている。龍門二十品のうちこれだけが古陽洞以外の石窟にある。

この造窟記にあるように、慈香洞は比丘尼の慈香と慧政によって開かれた。慈香洞の名も造窟者の慈香によることはいうまでもない。造窟は神亀三年（520）三月であり、孝明帝は同年七月に正光に改元しているから、それ以前の刻銘になる（補正）。

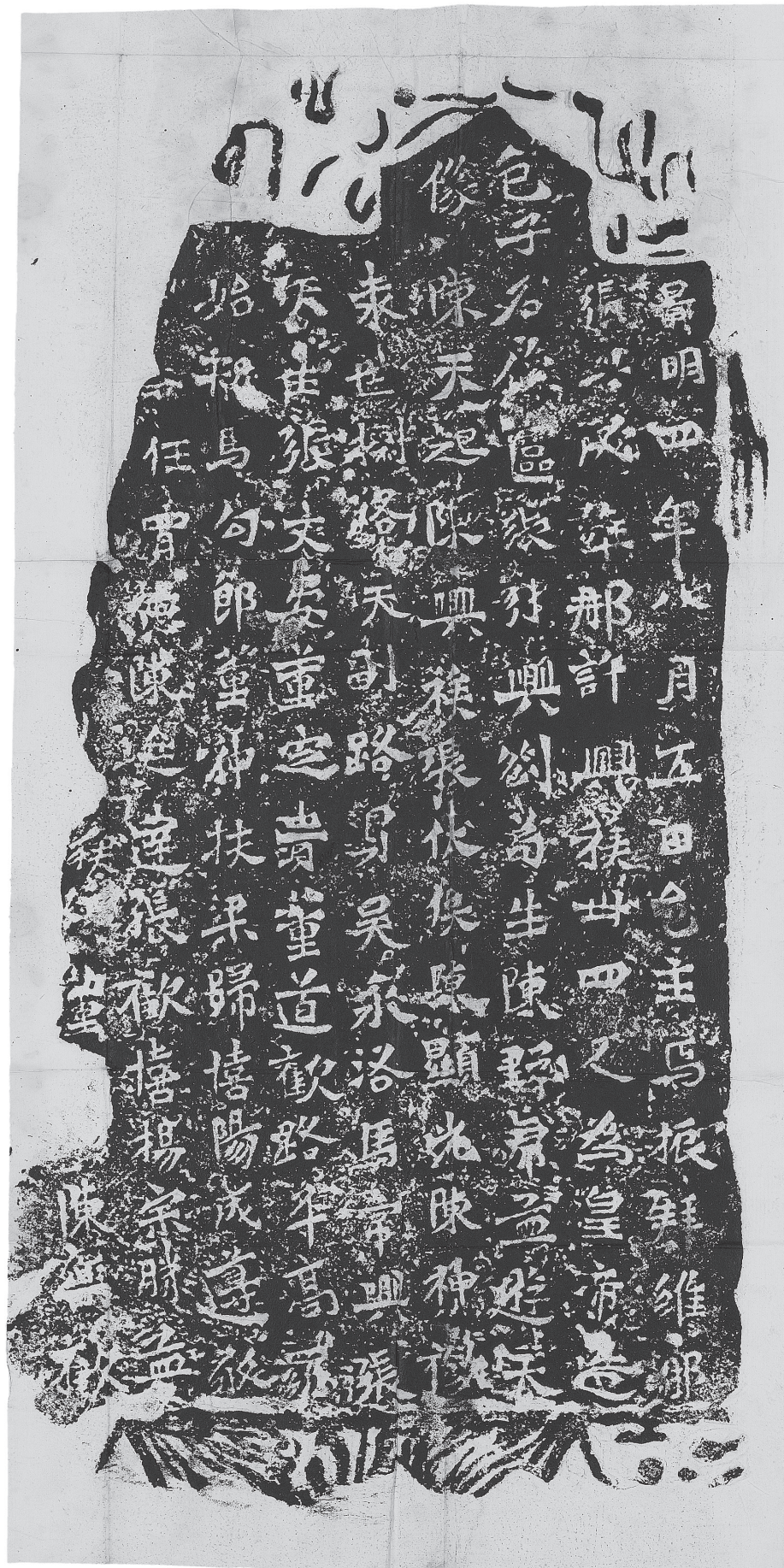
慈香洞にはこれ以外の造像記がないが、慈香は古陽洞南壁 S70 にも皇帝とみずからの父母のために弥勒像一区を造像している（碑刻2371、録文にはなし）。

□□□年□□／□□□慈香／□□造弥勒像／□□為皇帝／□□□願世□／□□父母□□／□□□□
□□／□□佛□／□□衆生□／□□同斯□／□□□□□。

紀年は判読できず、わずかに「慈香」「造弥勒像」「為皇帝」「父母」「仏」「衆生」「同斯」などが読まれているだけである。その造像は楣拱龕に交脚菩薩像を本尊とし、二弟子と二菩薩の脇侍をとまなう五尊像の構成は慈香洞と共通する。造像時期も近いと思われる。

龍門造像記の中でこの書体はかなり特異であり、中田勇次郎は「書の歴史の表面に出る書ではなく、造像中の奇逸の書」と評している。

王壯弘1981は重刻本に二種あり、ひとつは字迹軟弱にして石の剥離痕が不自然で、もうひとつは末行の「従」字の左上が一点少ないという。（岡村）



20. 馬振拜張子成許興族三十四人造像記

20 馬振拜張子成許興族三十四人造像記

北魏 景明四年（503）八月五日 古陽洞（第1443窟）窟頂 D71

【著録】

録文589，碑刻2521，人文研 DB・NAN0067X，NAN0712R

目録18（補正12，關表上1，趙録2，楊録2，王目，繆目2，吳録6，吳目9，方筆，調表，石言）

【釈文】

題額：邑子／像

景明四年八月五日。邑主馬振拜。維那／張子^{*1}成。維^{*2}那許興族。卅^{*3}四人。為皇帝造／石像一區。張引興。劉苟生。陳野帟^{*4}。孟遊天。／陳天^{*5}起。陳興族。張伏俱。陳顯光。陳神歡。／袁世標。路天副。路買。吳永洛。馬常興。張／天生。張文安。董定貴。董道歡。路平。高羅／始。龍馬勾郎。董神^{*6}扶。梁歸禧^{*7}。陽成遵敬^{*8}。／^{*9}任買德。陳延達。張歡禧。揚^{*10}宗勝。孟／^{*11}族^{*12}□。董□□。陳樂歡。

【校勘】

- * 1 「子」録文・碑刻とも未読だが，中田1974にしたがう。
- * 2 「維」碑刻が「唯」とするのは誤り。
- * 3 「卅」字形は「卅」。
- * 4 「帟」録文・碑刻とも「虎」とするのは誤り。
- * 5 「天」録文「元」とするが，中田1974・碑刻にしたがう。
- * 6 「神」録文は「？」を付すが，北京図書館の旧拓をみると是である。
- * 7 「禧」碑刻が「喜」とするのは誤り。
- * 8 録文は「陽成遵。敬□□。」と句読する。「陽成（陽城）」と「敬」の姓氏はともに存在するが，中田1974にしたがう。
- * 9 第8行目の上は2字分の空きがあるが，造像者の数からみて，当初から名が刻まれていなかった可能性が高い。10説参照。
- * 10 「揚」碑刻は「陽」，中田1974は「楊」とするが，碑刻にしたがう。
- * 11 補正は「缺七字」とし，録文・碑刻もそれにしたがうが，第9行目の上7字は当初から文字が刻まれていなかったと考える。解説参照。
- * 12 「張」録文は「？」を付す。

【訓読】

景明四年八月五日。邑主馬振拜，維那張□成，維那許興族，三十四人，皇帝の為に石像一区を造る。
（造像者略）

【解説】

古陽洞の入口上方にある楣拱龕で，高さ70cm，幅57cm，深さ3cm，本尊の交脚菩薩像は大破しているが，左右の菩薩立像と拱額の図像はよく残っている。ただし，石松日奈子（2005：154頁）は本尊の頭光に菩薩の冠帯が彫刻されていないことや龕の下縁に衣の裾部が残存していることから，本尊は裳懸座の表現をもつ仏坐像であったと考えている。確かに，冠帯の表現がないことに加えて，獅子があら



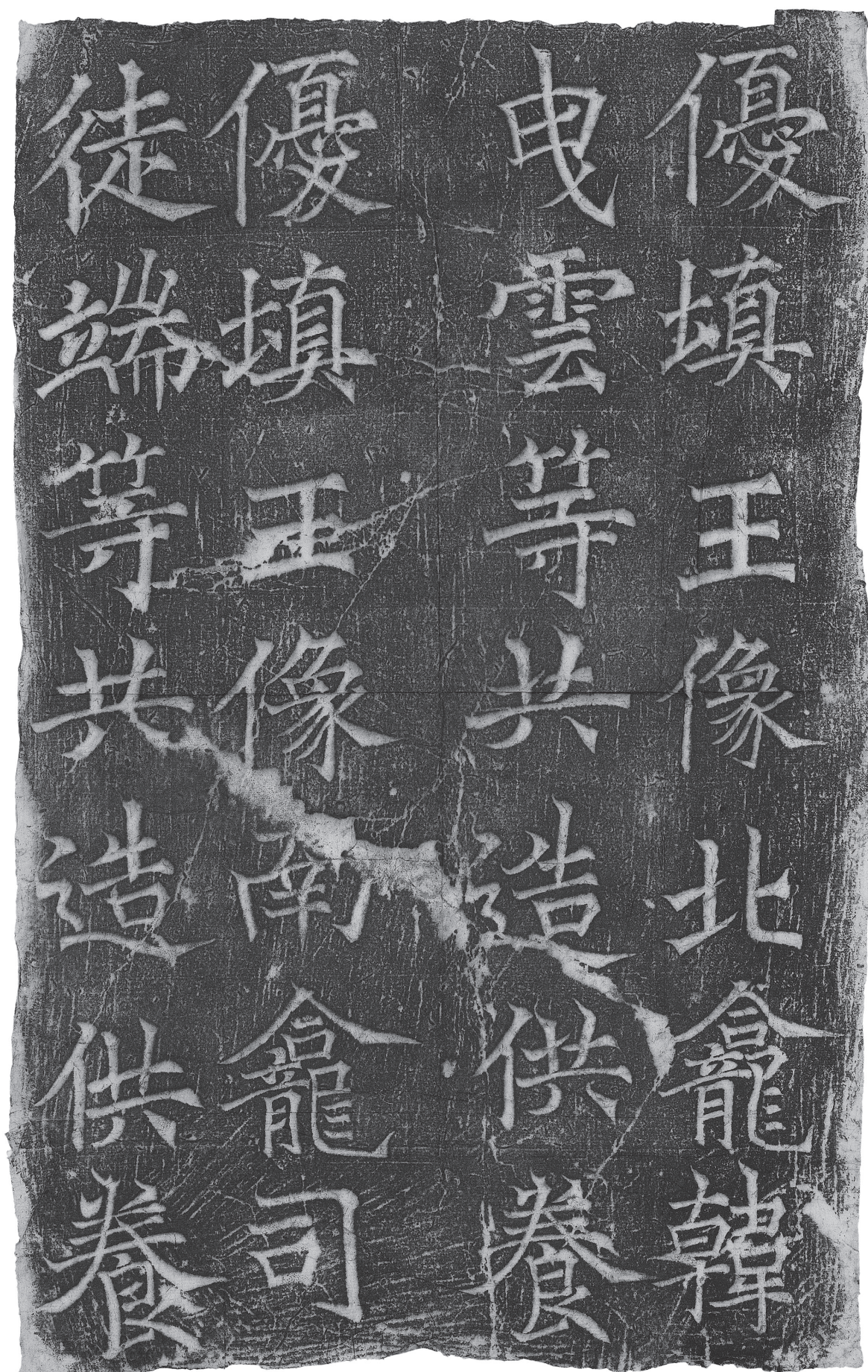
わされていないことも問題であるが、台座に残る交脚の痕跡や衣裾部の形状からみて、劉景龍1997のみに、交脚菩薩であったと考えておきたい。

そうすると、下の楣拱龕には坐仏の三尊像があるが、上龕本尊の裳懸座は下龕の拱額に重なり、上下2龕の幅が一致し、帷幕の形や浅い彫刻の手法が相似することから、この上下2龕に弥勒と釈迦を対置したのであろう。造像記の下にも、高さは低い、同じ幅をもつ交脚菩薩の楣拱龕があり、拱額の図像や彫刻手法が類似するため、これも一連の造像の可能性はある。この下2龕には造像記がともなっていない。

龕の右側に碑形の造像記があり、高さ62cm、幅34cm、本文は9行、各行15字に刻まれている。碑形の右側（向かって左側）が斜めに削がれ、第9行目の上7字が欠けている（補正）。これに対して中田1974は、もともと石質が悪いため、文字を刻んでいなかった可能性を示唆している。邑主の馬振拝と維那の2人をふくめて造像者34人の名が列举されているから、第8行目の上2字と第9行目の上7字は当初から文字が刻まれていなかったと考えられる。

造像者34人の姓氏をみると、もっとも多い陳氏は7人、張氏は維那をふくめて6人、董氏は4人、路氏は3人、馬氏は邑主をふくめて2人、孟氏は2人、のこる許氏・劉氏・袁氏・呉氏・高氏・梁氏・任氏・楊氏・龍氏・陽成氏はそれぞれ1人ずつである。許氏は維那の許興族1人、邑主の馬氏も2人だけと少ない。

この造像記は、もともと龍門二十品には収められていなかったが、方若撰『校碑隨筆』などの説にしたがい、唐刻の「優填王造像記」をのぞき、その代わりにこの「馬振拝等造像記」を加えたという。しかし、中田は二十品の中では刻法も書も見劣りがすると評している。（岡村）



(参考) 韓曳雲司徒端等造像記 (造優填王像記)

京都大学人文科学研究所蔵「龍門二十品」拓本 調査整理報告

安岡素子

2016年より京都大学人文科学研究所蔵龍門石窟拓本の調査整理を行った結果、「龍門二十品」拓本については以下のような事が判明した。

1. 旧蔵者、収蔵経緯により5種類に分類することができる。

- ① 東方拓本（東方文化学院京都研究所時代に黒川古文化研究所から寄贈）⁽¹⁾、⁽²⁾、⁽³⁾
- ② 松本文三郎旧蔵拓本
- ③ 内藤湖南旧蔵拓本
- ④ 早崎稗吉旧蔵拓本
- ⑤ 中国金石拓本（収蔵経緯不明）⁽⁴⁾

更に収蔵者別で細分類すると、

- ① 東方拓本は3種類、（うち旧拓1種類）⁽⁵⁾
- ② 松本文三郎旧蔵拓本 2種類（全套本1種類 旧拓で剪装本1種類）⁽⁶⁾
- ③ 内藤湖南旧蔵拓本 2種類
- ④ 早崎稗吉旧蔵拓本 1種類⁽⁷⁾
- ⑤ 中国金石拓本 2種類

合計10種類の拓本が人文研所内に収蔵されていることが分かった。

2. 所蔵拓本の新旧について

今回の調査により、松本文三郎旧蔵拓本のうち剪装本（松本Ⅰ）が所内最旧の拓本であることが判明した。その根拠として以下の二点を例示する。⁽⁸⁾

鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等造像記……第3行「騰空」の「空」の文字第6画目以降が欠損していない。

また、前南陽太守護軍長史雲陽伯鄭長猷造像記……第7行「敬造弥勒一軀」の「軀」が鮮明でなく、拓本文字全体に瘦細。これは、洗石補刻以前の拓、「軀」の「身」部が見えなかった道光時の拓に近い。

また、これまで「舊拓龍門二十品」と記載されていた中国金石拓本（中金Ⅰ）は東方Ⅲ（旧拓）より大きく遅れて採択されたものであることが判明した。⁽⁸⁾

(1) 塚本善隆「龍門石窟に現れたる北魏仏教」(『塚本善隆著作集 第二巻 北朝仏教史研究』, 大東出版社, 1974), pp. 253-254

(2) 川見典久「二代黒川幸七に関する書簡」(黒川古文化研究所紀要『古文化研究』第七号 2008)

(3) 竹浪遠「二代黒川幸七の書画蒐集 その来歴と人物交流」(『美術フォーラム21』第二十六号 美術フォーラム21刊行会, 醍醐書房, 2012)

(4) 「中国金石拓本」の名称は帙に貼付された題簽による。

(5) 所内の記載には精拓とあるが、これは採拓期の新旧に対応するものではない。むしろ、近拓（清末、中華民国期）という方が相応しいかもしれない。

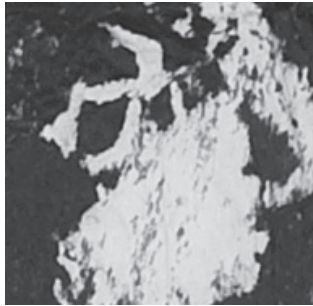
(6) 全套本を一行4字から7文字で裁断し、鑑賞しやすいように、また書道の臨書の手本となるような法帖仕立てにしたもの。

(7) 同一の造像記に基づく複数枚の拓本が含まれる。

(8) 拓本の新旧の判断にあたっては清原實門氏の「龍門造像記研究」(劉景龍『龍門二十品』, 中教出版, 1997)を参考にした。

鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等造像記

中金Ⅱ



松本Ⅰ



旧拓は「空」の6画目以降「エ」の部分がはっきりわかる。

前南陽太守護軍長史雲陽伯鄭長猷造像記

中金Ⅱ



松本Ⅰ



洗石補刻以前の旧拓は「軀」の「身」部分が見えない。

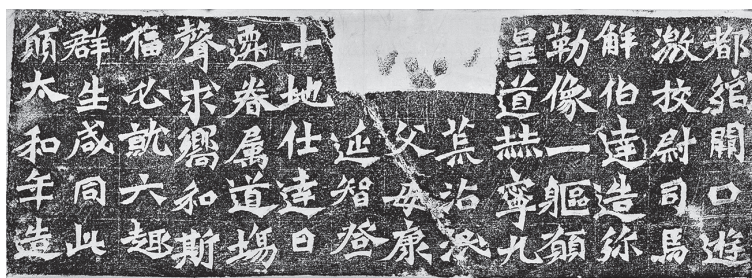


京都大学人文科学研究所蔵龍門二十品拓本一覧

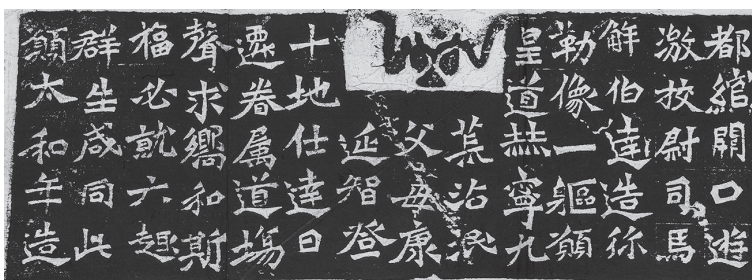
	東方Ⅰ	東方Ⅱ	東方Ⅲ	松本Ⅰ	松本Ⅱ	内藤Ⅰ	内藤Ⅱ	早崎	中金Ⅰ	中金Ⅱ	合計
1 長樂王丘穆陵亮夫人尉遲造像記	1	1	1	1		1	1	3	1	1	11枚
2 一弗造像記	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	11枚
3 比丘慧成造像記	1	1	1	1		1	1	1	1	1	9枚
4 侍中護軍將軍北海王元詳造像記	1	1		1		1	1	3	1	1	10枚
5 都結闕口遊徽校尉司馬解伯達造像記	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	12枚
6 鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等造像記	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	11枚
7 北海王國太妃高造像記		1	1	1	1	1	1	2	2	1	11枚
8 仇池楊大眼造像記	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	11枚
9 比丘道匠造像記	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	11枚
10 前南陽太守護軍長史雲陽伯鄭長猷造像記	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	12枚
11 孫秋生劉起祖二百人等造像記	1	1	1	1		1	1	1	1	1	9枚
12 高樹解佰都三十二人等造像記		1	1	1	1	2	1	2	1	1	11枚
13 比丘惠感造像記	1		1	1	1	1	1	3	1	1	11枚
14 広川王祖母太妃侯造像記	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	12枚
15 広川王祖母太妃侯造像記*	1	1	1	1		1	1	3	1	1	11枚
16 比丘法生造像記	1	1	1	1	1	1	1	3		1	11枚
17 太中大夫安定王元燮造像記	1	1	1	1	1	1	1	2		1	10枚
18 齊郡王元祐造像記	1	1	1	1	1	1	1	3		1	11枚
19 比丘尼慈香慧政造窟記	1	2	1	1	1	1	1	3	1		11枚
20 馬振拜張子成許興族三十四人造像記	1	1			1				1		4枚
											合計210枚
韓曳雲司徒端等造像記（造優填王像記）	2		1	1		1	1	2			8枚

*15. 広川王祖母太妃侯造像記のうち、東方Ⅲおよび松本Ⅰは平乾虎造像記を伴う。

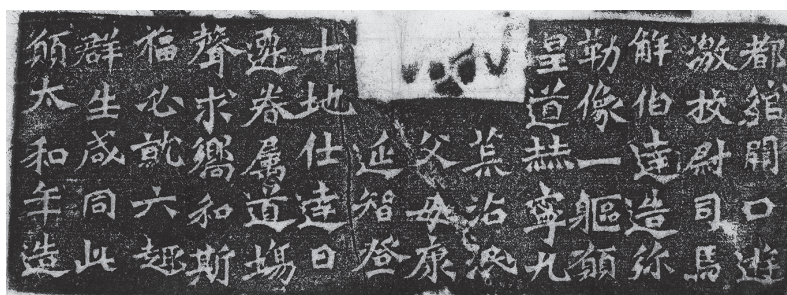
都縮關口遊徼校尉司馬解伯達造像記十種



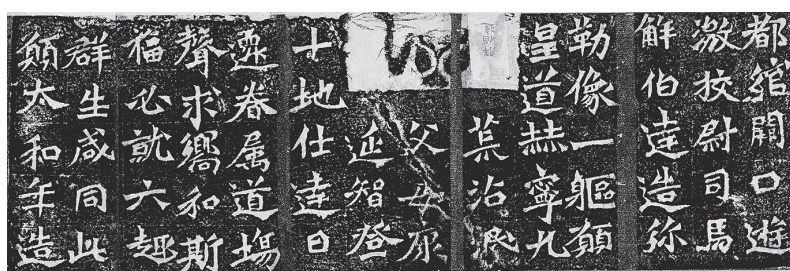
① 東方 I



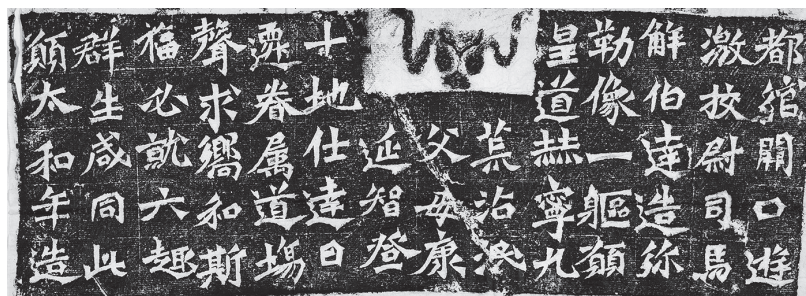
② 東方 II



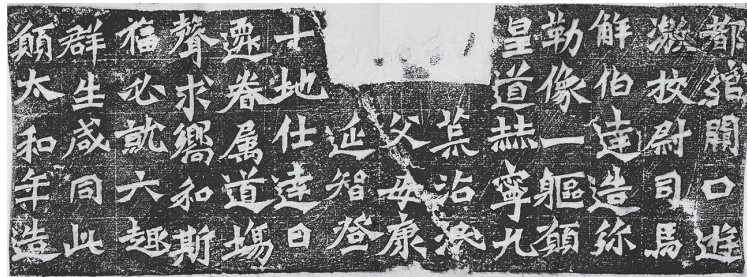
③ 東方 III



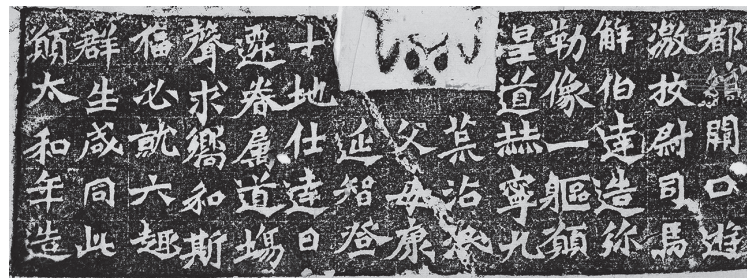
④ 松本 I (剪装本)



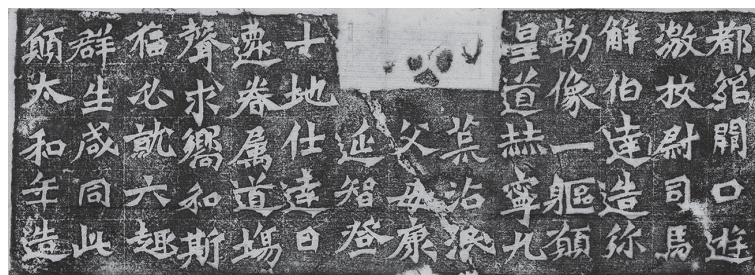
⑤ 松本 II



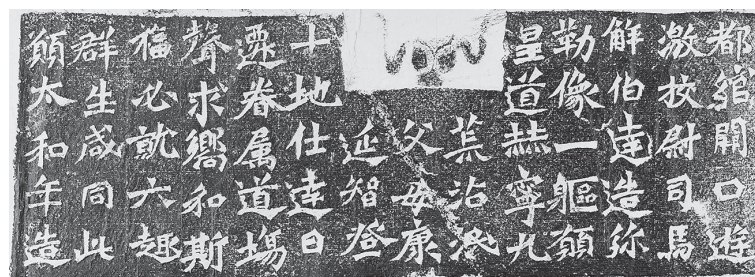
⑥ 内藤 I



⑦ 内藤 II



⑧ 早崎



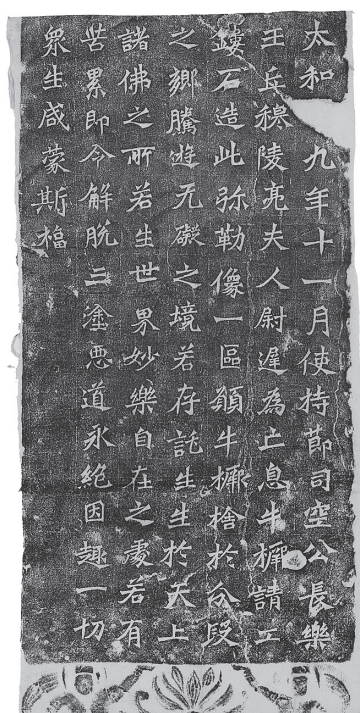
⑨ 中金 I



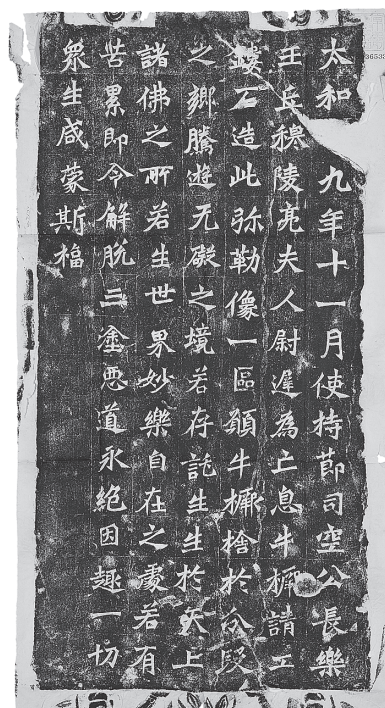
⑩ 中金 II

京都大学人文科学研究所蔵龍門二十品拓本選

1. 長樂王丘穆陵亮夫人尉遲造像記



(早崎拓)

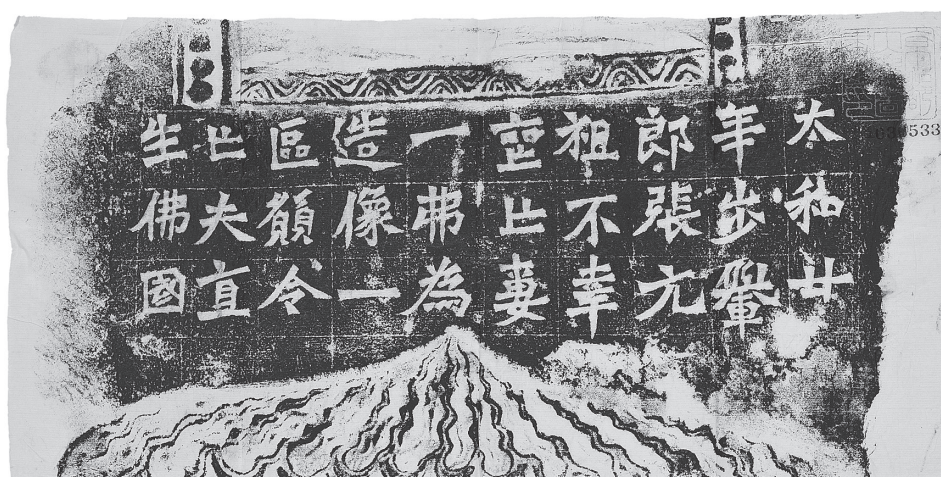


(内藤拓 I)

2. 一弗造像記



(早崎拓 I)



(内藤拓 I)

3. 比丘慧成造像記

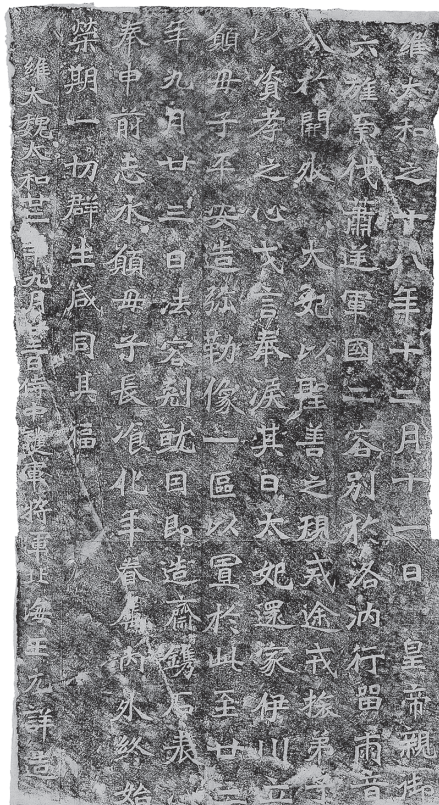


(早崎拓)

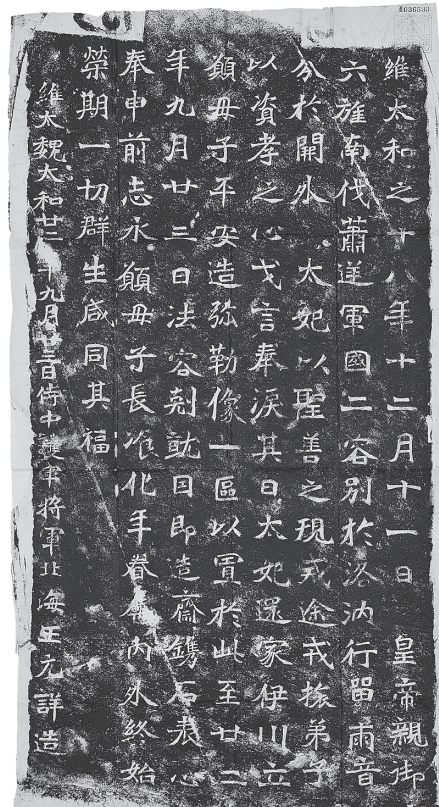


(内藤拓 I)

4. 侍中護軍將軍北海王元詳造像記

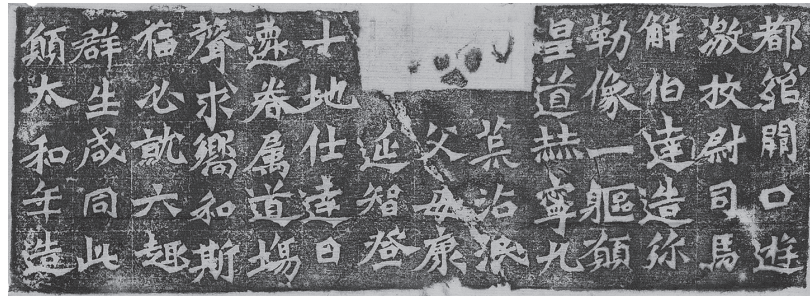


(早崎拓)

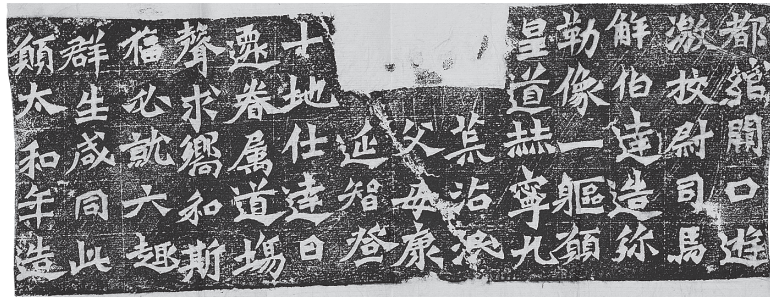


(内藤拓 I)

5. 都縮闕口遊徼校尉司馬解伯達造像記

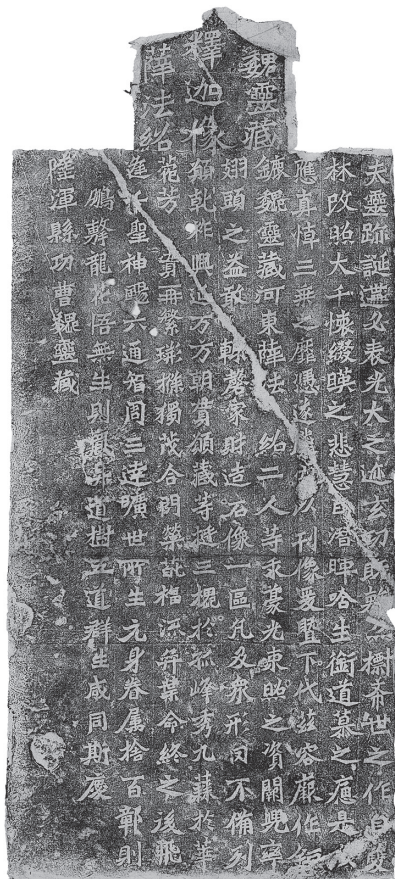


(早崎拓)

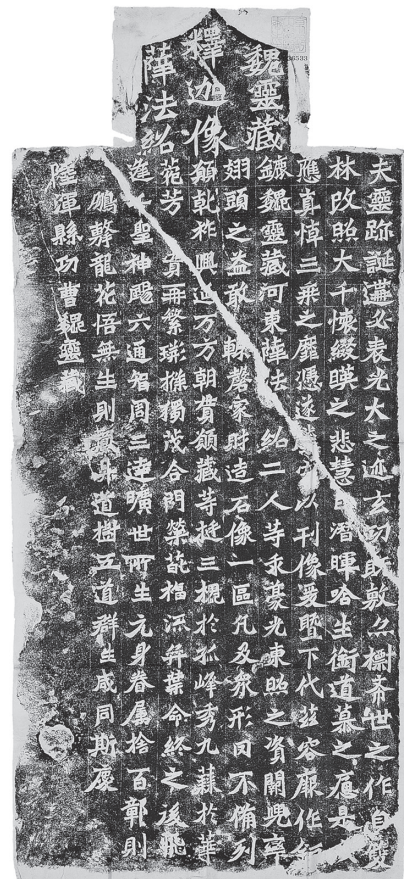


(内藤拓 I)

6. 鉅鹿魏靈藏河東薛法紹二人等造像記



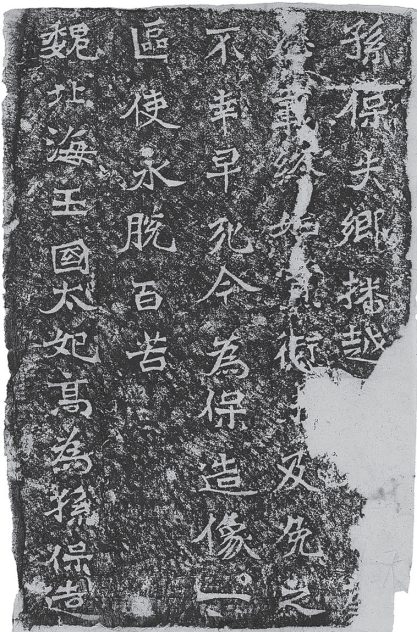
(早崎拓)



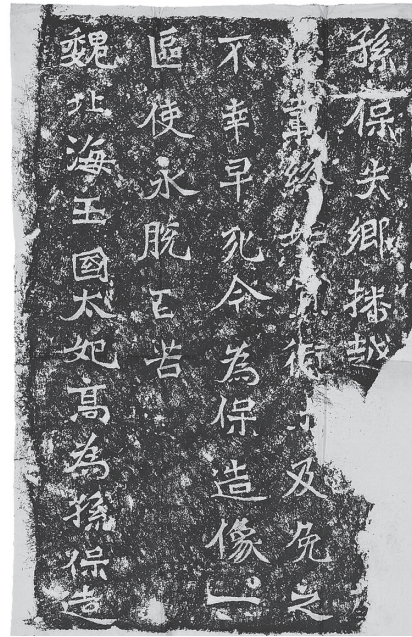
(内藤拓 I)



7. 北海王国太妃高造像記

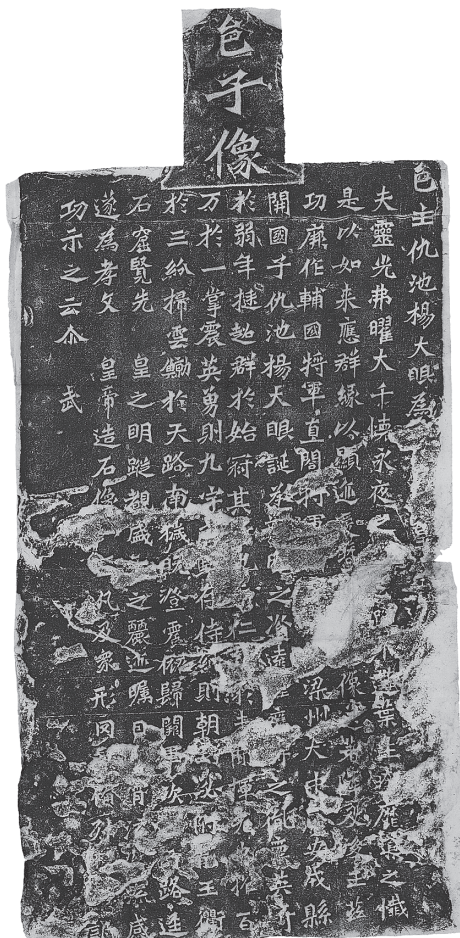


(早崎拓)

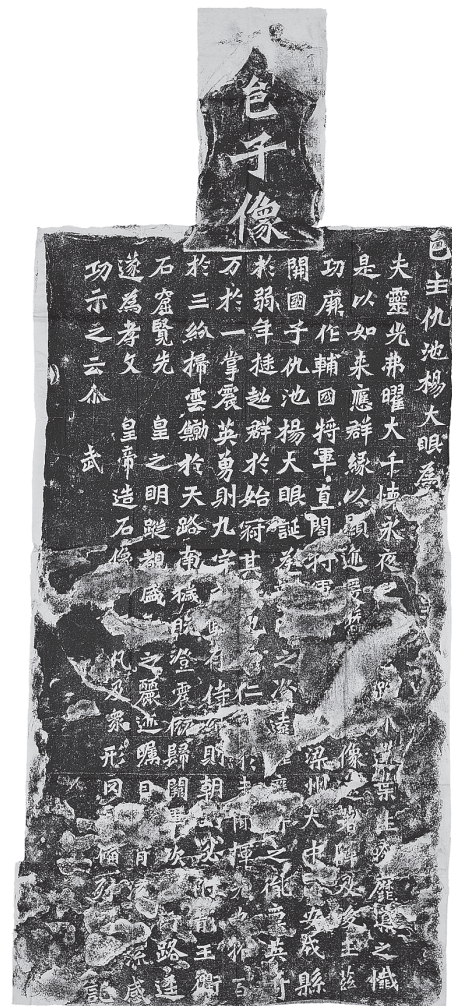


(内藤拓 I)

8. 仇池楊大眼造像記

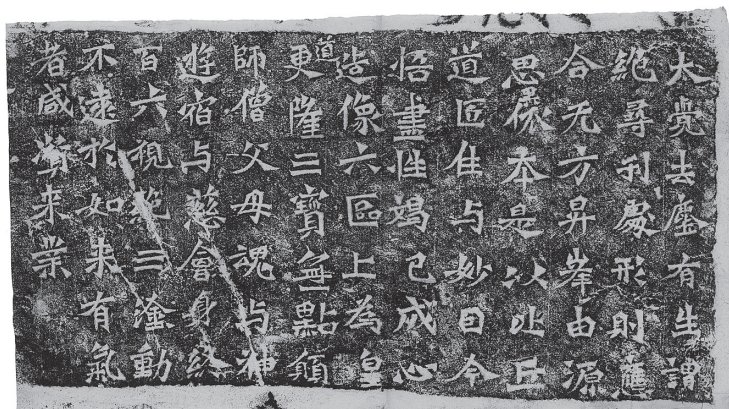


(早崎拓)

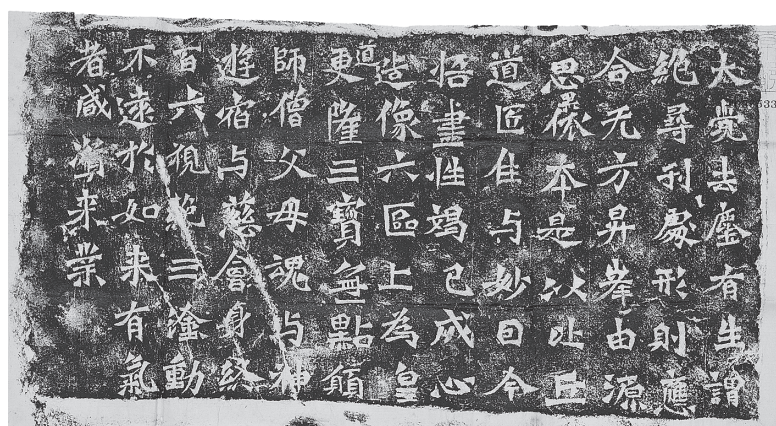


(内藤拓 I)

9. 比丘道匠造像記

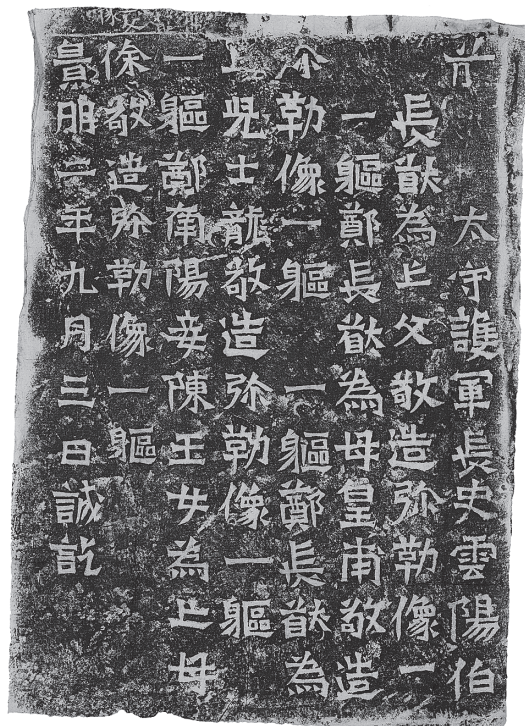


(早崎拓)

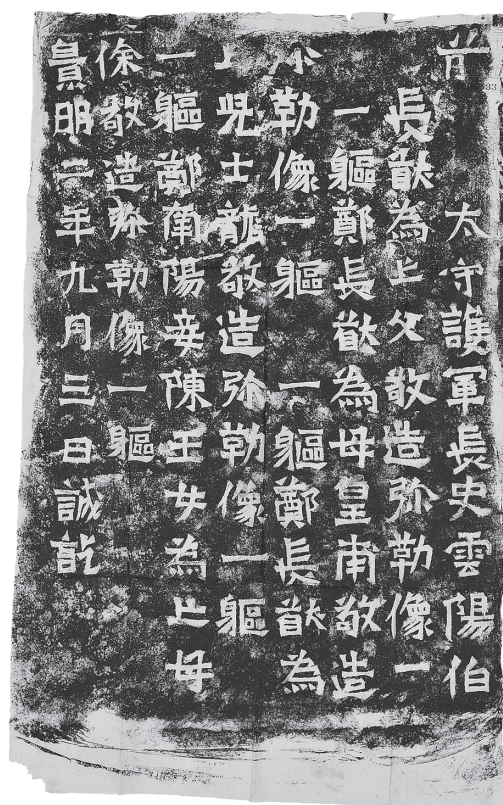


(内藤拓 I)

10. 前南陽太守護軍長史雲陽伯鄭長猷造像記



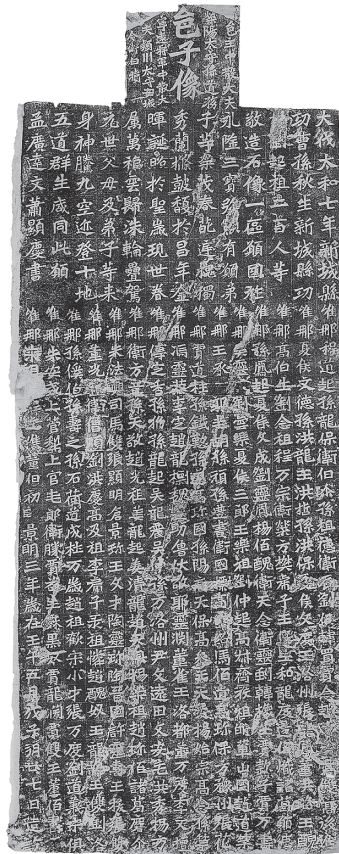
(早崎拓)



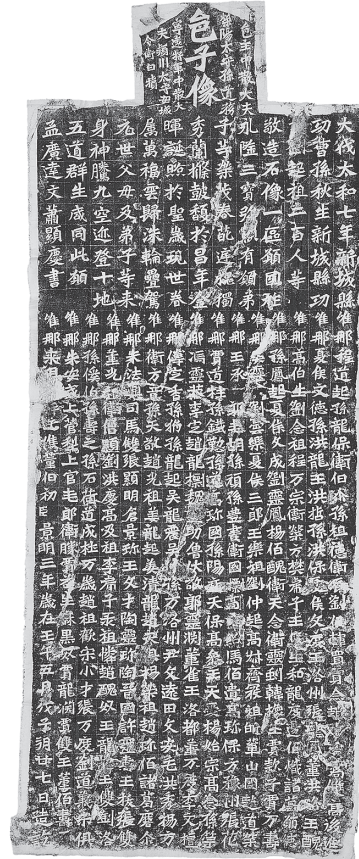
(内藤拓 I)



11. 孫秋生劉起祖二百人等造像記

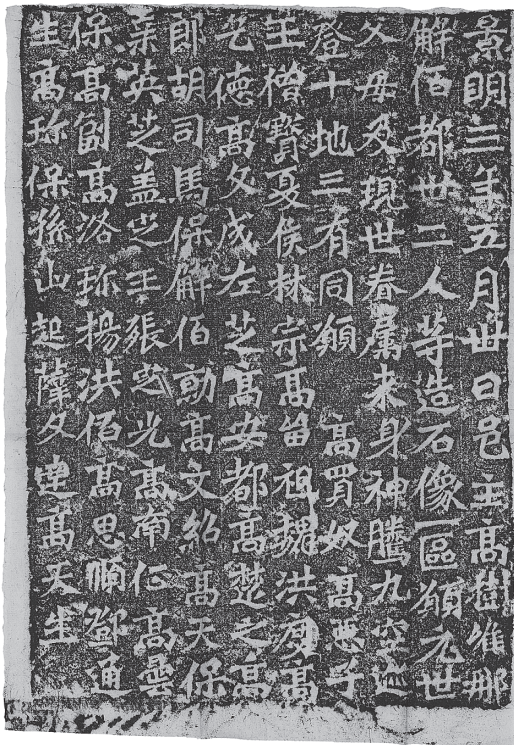


(早崎拓)

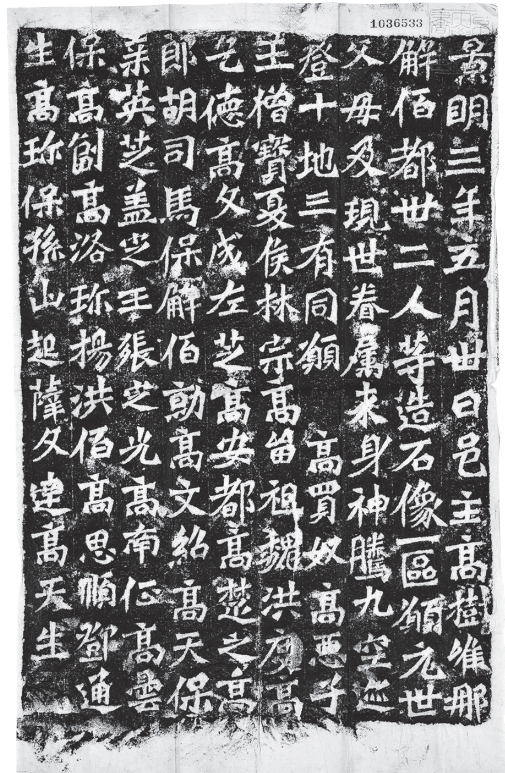


(内藤拓 I)

12. 高樹解伯都三十二人等造像記

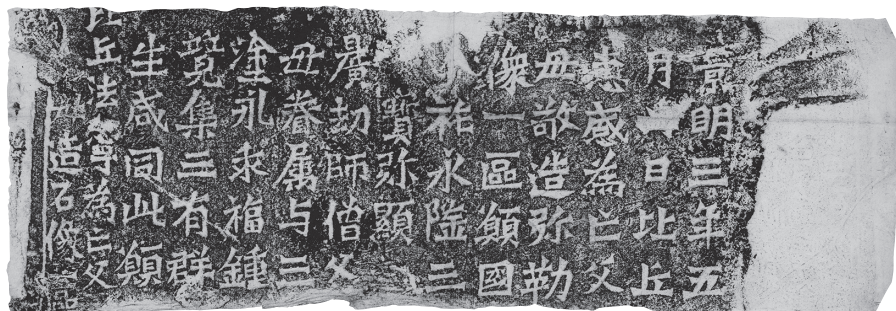


(早崎拓)

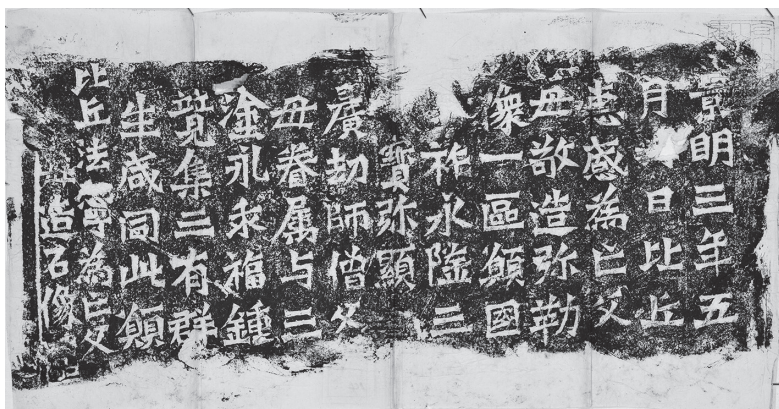


(内藤拓 I)

13. 比丘惠感造像記

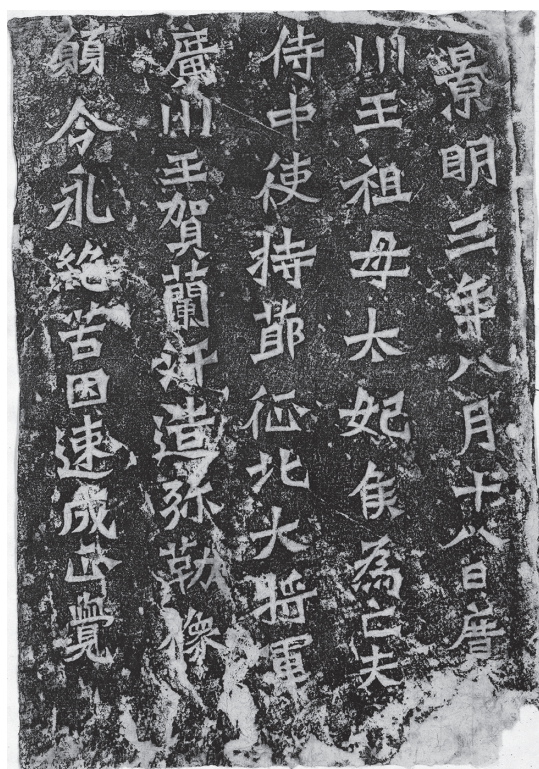


(早崎拓)

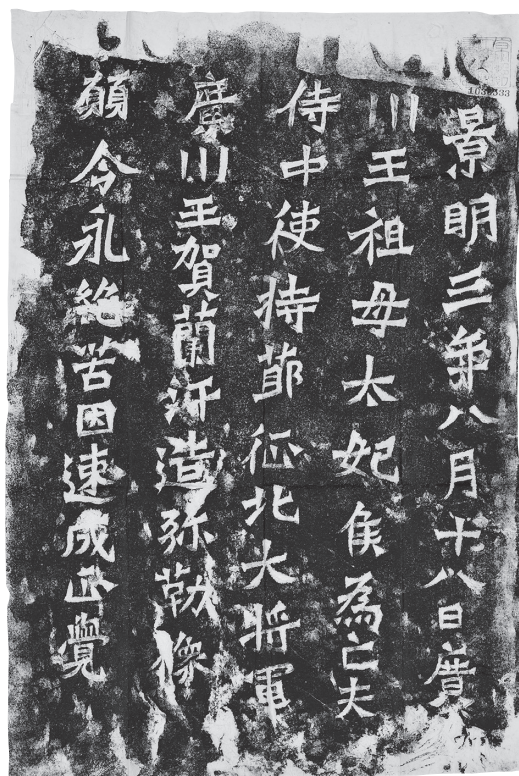


(内藤拓 I)

14. 広川王祖母太妃侯造像記

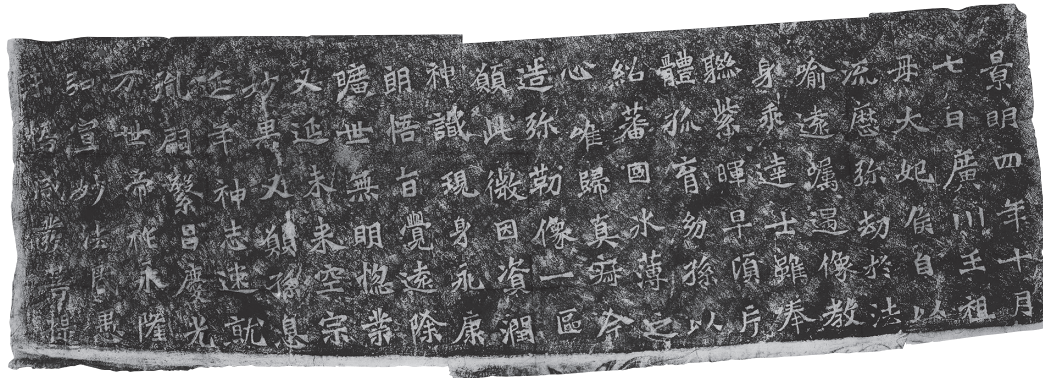


(早崎拓)

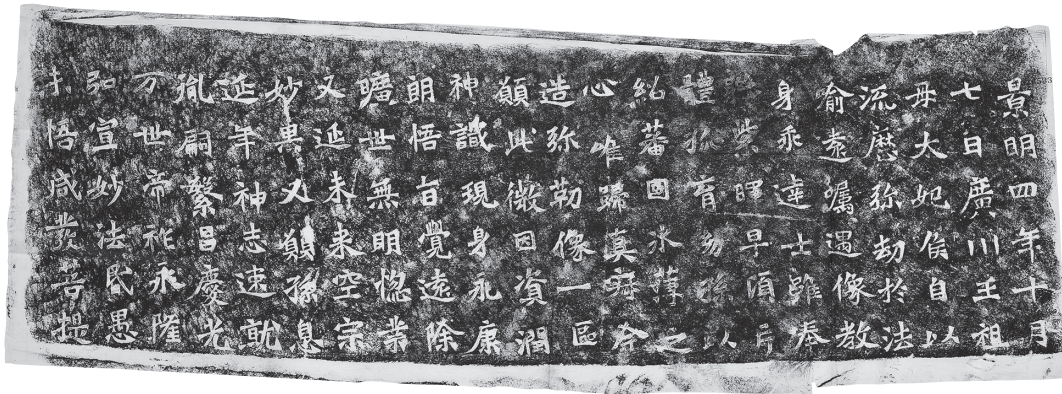


(内藤拓 I)

15. 広川王祖母太妃侯造像記

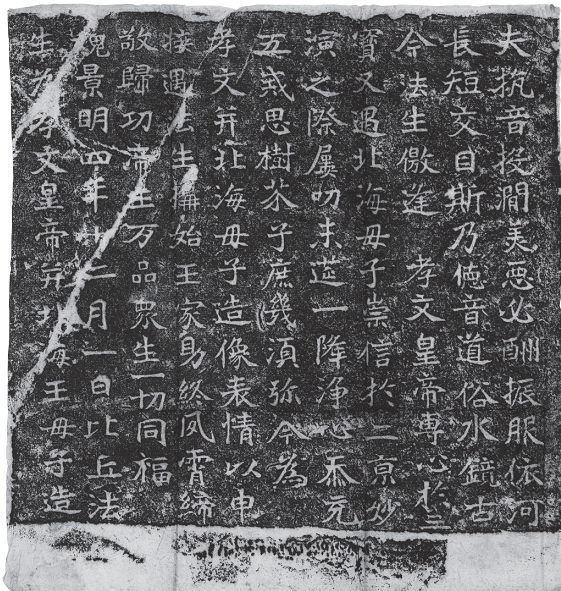


(早崎拓)

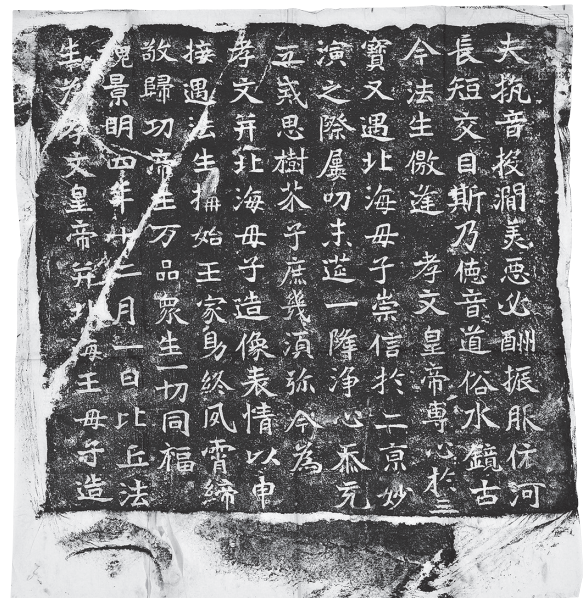


(内藤拓 I)

16. 比丘法生造像記

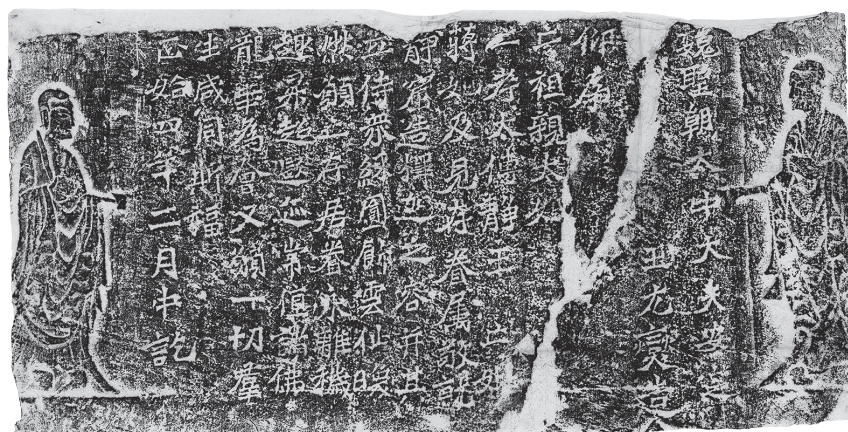


(早崎拓)

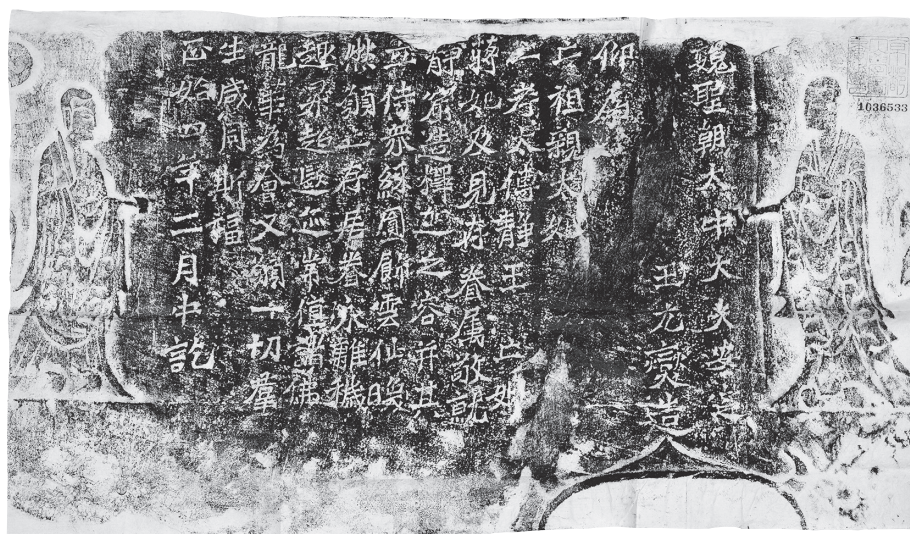


(内藤拓 I)

17. 太中大夫安定王元變造像記

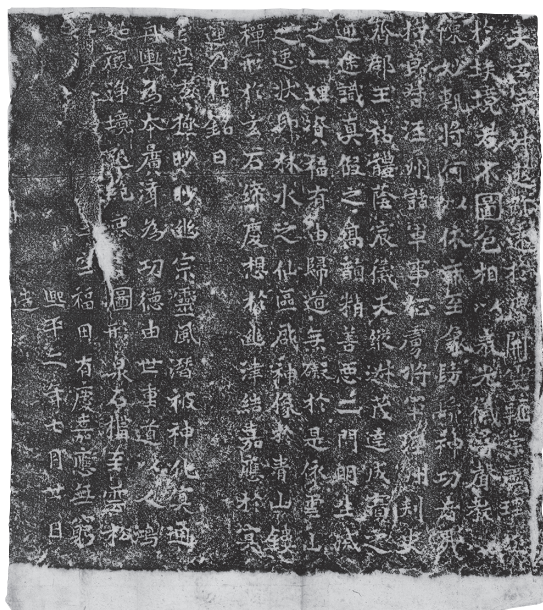


(早崎拓)



(内藤拓 I)

18. 齊郡王元祐造像記



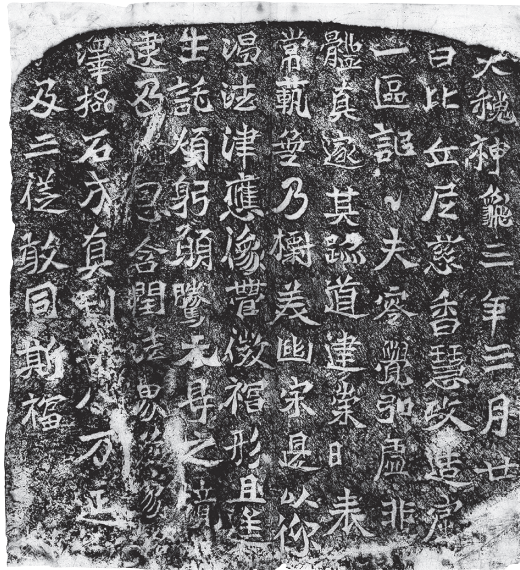
(早崎拓)



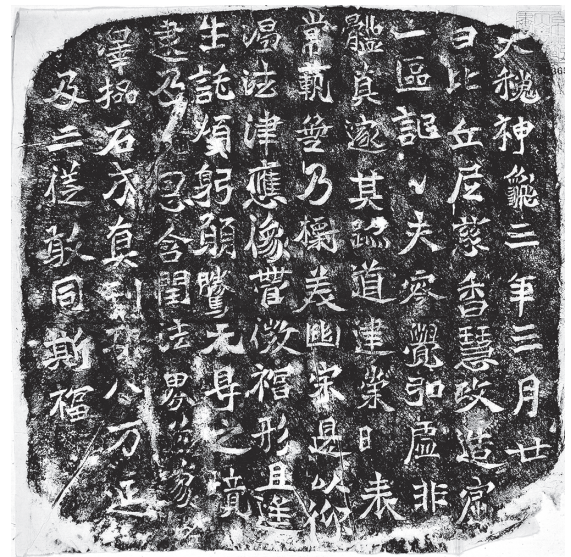
(内藤拓 I)



19. 比丘尼慈香慧政造窟記



(早崎拓)

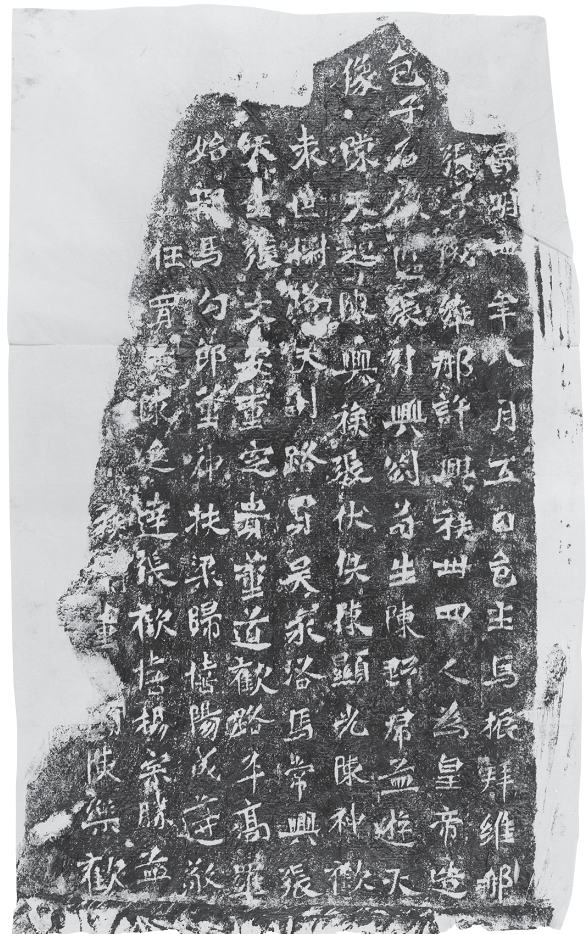


(内藤拓 I)

20. 馬振拜張子成許興族三十四人造像記



(松本拓 II)



(中金拓 I)

(附) 韓曳雲司徒端等造像記 (造優填王像記)



(早崎拓)



(内藤拓 I)

龍門石刻著録書目 并略号

- | | | |
|----------|--------------------------|-----------------------|
| 萃編 | 王昶，金石萃編百六十卷 | 嘉慶十年自序 |
| 補正 | 陸增祥，八瓊室金石補正百三十卷 | 民國十四年刊 |
| 札記 | 陸增祥，八瓊室金石札記四卷 | 民國十四年刊 |
| 關圖，關表 | 關百益，伊闕石刻圖表二冊 | 民國二十四年刊
上册圖表 下冊箸錄表 |
| 大村 | 大村西崖，支那美術史彫塑篇三冊 | 大正四年刊 |
| 佛蹟 | 關野貞，常盤大定，支那佛教史蹟第二冊 | 大正十五年刊 |
| 沙畹 | 沙畹北支那考古圖譜四冊 | 一九〇九 — 一九一五年 |
| 集古 | 歐陽修，集古錄跋尾十卷 | 嘉祐六年成（朱氏金石叢書所收） |
| 金石 | 趙明誠，金石錄三十卷 | 政和七年自序（朱氏金石叢書所收） |
| 于志 | 于奕正，天下金石志 | 崇禎五年自序（顧氏金石輿地叢書所收） |
| 顧記 | 顧炎武，金石文字記六卷 | （顧亭林遺書十種所收） |
| 黃攷 | 黃叔璥，中州金石攷八卷 | |
| 府志 | 乾隆河南府志卷一〇六 — 一一一 | 金石志 乾隆四十四年序 |
| 畢記 | 畢沅，中州金石記 | 乾隆末年刊（經訓堂叢書所收） |
| 錢跋 | 錢大昕，潛研堂金石跋尾六卷續七卷又續六卷三續六卷 | 乾隆五十二年王鳴盛序（潛研堂全書所收） |
| 錢目 | 錢大昕，潛研堂金石文字目錄八卷 | 嘉慶十年刊（潛研堂全書所收） |
| 孫錄 | 孫星衍，寰宇訪碑錄十二卷 | 嘉慶七年刊 |
| 姚目 | 姚晏，中州金石目四卷 | 嘉慶十五年以後（咫進齋叢書所收） |
| 縣志 | 嘉慶洛陽縣志卷五九 | 金石錄 嘉慶十八年修 |
| 洪記 | 洪頤煊，平津讀碑記八卷續記一卷 | 嘉慶十六年及二十一年自序（槐廬叢書所收） |
| 一跋，二跋，三跋 | 武億，授堂金石三跋十卷 | 道光二十三年刊 |
| 續跋 | 武億，授堂金石文字續跋十四卷 | （授堂遺書所收） |
| 葉補 | 葉奕包，金石錄補二十七卷 | （朱氏金石叢書所收） |
| 葉跋 | 葉奕包，金石錄補續跋七卷 | 道光二十四年序（朱氏金石叢書所收） |
| 朱記 | 朱士端，宜祿堂收藏金石記六卷 | 同治二年刊 |
| 趙錄 | 趙之謙，補寰宇訪碑錄五卷 | 同治三年刊 |
| 楊錄 | 楊鐸，中州金石目錄八卷 | 同治六年自序（鄭齋叢書所收） |
| 汪錄 | 汪鋈，十二硯齋金石過眼錄十八卷 | 同治十二年自序 |
| 楊圖 | 楊守敬，寰宇貞石圖六卷 | 光緒八年刊 |
| 王目 | 王懿榮，南北朝存石目八卷 | 鈔本 |
| 繆目 | 繆荃孫，藝風堂金石文字目十八卷 | 光緒三十二年刊 |
| 趙目 | 趙魏竹，崦廬金石目錄五卷 | 宣統元年刊 |
| 吳錄 | 吳式芬，攷古錄二十卷 | |
| 吳目 | 吳式芬，金石彙目分編二十卷 | |
| 方筆 | 方若，校碑隨筆 | 民國二年刊（遜齋叢編所收） |
| 常錄 | 常茂徠，洛陽石刻錄 | 民國四年刊（雪堂叢刻所收） |
| 調表 | 河南古物調查表 | 民國七年刊 |
| 石言 | 顧燮光，夢碧簪石言六卷 | 民國八年刊 |
| 羅錄 | 羅振玉，雪堂所藏金石文字簿錄 | 民國十六年刊 |
| 劉錄 | 劉聲木，續補寰宇訪碑錄二十五卷 | 民國十八年自序（直介堂叢刻所收） |

参考文献

【中文】

- 董廣強2010「麦積山“法生碑”及相關問題的初步探索」麦積山石窟藝術研究所編『麦積山石窟研究』，文物出版社
- 宮万瑜2012「邙洛近年出土馮聿，源模，張懋三方北魏墓志略考」『中原文物』第5期
- 李玉昆1998「龍門碑刻及其史料價值」劉景龍・李玉昆主編『龍門石窟碑刻題記彙錄』，中国大百科全书出版社
- 林泗水1972『北魏書法導論』（台北，林吳冷冷）
- 劉景龍・李玉昆主編1998『龍門石窟碑刻題記彙錄』，中国大百科全书出版社
- 劉景龍・楊超傑1999『龍門石窟總錄』第9卷（文字著錄），中国大百科全书出版社
- 劉景龍編2001『古陽洞—龍門石窟第1443窟』，科学出版社
- 劉連香2016「北魏馮熙馮誕墓志与遷洛之初陵墓区規劃」『中原文物』第3期
- 歐陽輔1923『集古求真』
- 湯用彤1983『漢魏兩晉南北朝佛教史』，中華書局
- 王壯弘1981增補（方若撰）『增補校碑隨筆』，上海書畫出版社
- 姚薇元1962『北朝胡姓考』，中華書局
- 殷憲・劉俊喜2011「北魏尉遲定州墓石椁封門石銘文」『文物』第12期
- 曹社松・焦建輝・劉洵2016「龍門古陽洞楊大眼龕雕鑿年代考察」『中原文物』第2期
- 張乃翥1983「龍門石窟始平公像龕造像年代管窺」『中原文物』第3期
- 張廷濟1892『清儀閣金石題識』
- 張雯2012「古陽洞雕鑿次第初探」『石窟寺研究』第3卷
- 趙超1992『漢魏南北朝墓誌彙編』，天津古籍出版社
- 趙萬里1956『漢魏南北朝墓誌集釋』，科学出版社

【和文】

- 青木実1983「龍門古陽洞比丘慧成造像記にみえる始平公について」『（早稲田大学）美術史研究』第20冊
- 石松日奈子2005『北魏佛教造像の研究』，ブリュッケ
- 溫玉成（鶴島俊一郎訳）1987「龍門北朝期小龕の類型と分期および北朝期石窟の編年」龍門文物保管所・北京大学考古系編『中国石窟 龍門石窟 1』，平凡社
- 勝村哲也1976「龍門古陽洞法生造像龕の仏座画像拓について」『書論』第8号
- 金維諾（岡田健訳）1987「麦積山石窟の創建とその芸術上の成果」天水麦積山石窟藝術研究所編『中国石窟 麦積山石窟』，平凡社
- 清原實門1997「龍門造像記研究」劉景龍『龍門二十品』，中教出版
- 清原實門2000「始平公造像記の諸問題」『金石書学：書の原点』第2号
- 倉本尚徳2016『北朝佛教造像銘研究』，法蔵館
- 小林靖幸1984「始平公造像記について」『学林』第4号
- 佐藤智水1998『北魏佛教史論考』，岡山大学文学部
- 佐藤智水2007「河北省涿県の北魏造像と邑義（前編）」『仏教史研究』第43号
- 塚本善隆1941「龍門石窟に現れたる北魏佛教」水野清一・長廣敏雄『龍門石窟の研究』附録第一，座右宝刊行会
- 中田勇次郎1974『龍門造像題記』，中央公論社
- 水野清一・長廣敏雄1941『龍門石窟の研究』，座右宝刊行会
- 劉景龍（方博訳）1997『龍門二十品』，中教出版

既刊：

- センター研究年報2010 特集 中国旅行雑誌（井波陵一編）
センター研究年報2013 特集 科学史研究室所蔵資料データベース（武田時昌編）
センター研究年報2015 特集 漢籍リポジトリ（ウィッテルン・クリスティアン編）
センター研究年報2016 特集 韓国の人名用漢字と漢字コード（安岡孝一・安岡素子編）

センター研究年報2017（不定期刊）
特集 京都大学人文科学研究所蔵 龍門二十品拓本

発行日 2018年2月28日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kita.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>

印刷所 共同印刷工業株式会社

